
毛利志保と宮野蘭—名探偵コナンAnother ver.—

mine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毛利志保と宮野蘭―名探偵コナンAnother ver.―

【Nコード】

N9271P

【作者名】

mine

【あらすじ】

宮野志保と毛利蘭の立場を入れ替えた、名探偵コナンのパラレルストーリー。

カップリングは新志（毛利志保）です。

3 / 8 タイトル名変更。これで確定のつもりです。

筆者より

ストーリー概要

- ・ 蘭と志保の立場が完全逆転します。（帝丹高校の毛利志保、黒の組織で『シェリー』のコードネームを持つ宮野蘭になります。）
- ・ ほとんどオリジナルストーリーで構成しますが、一部原作ネタを引っ張ってきます。特に、始まり方とかは原作とほぼ一緒です。
- ・ カップリングは新志です。が、そこまで辿り着くには凄い時間を要しそうです（笑）

原作と違う主な点一覧

- ・ 毛利志保は普通に帝丹小学校から進学しています。宮野蘭は悩みましたが、普通に日本育ちです。
 - ・ 宮野蘭の偽名は灰原哀で確定です。
 - ・ 蘭は組織内では科学者ではないため勿論科学知識が無い事になるので、『解毒剤を作る科学者がいない』事になりますが、そこをどうするかは既に決めてあります。お楽しみに。
- 注意事項
- ・ 更新ペースは結構遅くなりそうです。
 - ・ 宮野蘭の登場は少し後です。

それでは…宜しく願います。

0 プロローグ

「新一が帰ってこないのよ…トロピカルランドで、トイレに行くって言っただけで…」

「あゝ？あの探偵ボウズか…」

（ダメね…もう。相変わらず飲んだくれなんだから…）「もういいわ。とりあえず、探しに行くから。」

「おい！俺の夕飯…」

~~~~~

「そうか…薬の副作用で…」

「ああ。」

「とにかく、誰にもこの事を言っちゃいかんぞ。勿論、志保君にもじゃ。」

「わーってるよ…でも、あいつ本当に注意力が高いから…マジでやべえかも。」

「そうじゃった…何か策を練っておかんな…」

「いるの？博士…」

「……！」

## 0 プロローグ（後書き）

無茶苦茶短くなっちゃいました。すいません。

## 1 いきなりの疑惑

「博士…何でここに？」

「あ、いや…ちょっと…」

「？それに、後ろに誰がいるのかしら…」

ゆっくりと志保が机の裏へと向かう。

(やつべ…)

急いで、コナンは眼鏡を掛ける。

「…？」

「ははは…」

「誰？この子？」

（ふう…）「いや、わしの親戚でな…」

「そう…じゃあ、博士の家に？」

「いや…今日来たところなんじゃが…そうじゃ！志保君。この子をしばらくうちで預かってくれんか？」

「えっ!？」

「この子の両親が、今仕事で忙しくてのお…わたしは自分の生活で一杯じゃし…どうじゃ？どうにかしてくれんか？」

「そんな事言われたって…お父さんがいいって言うかしらね…まあいいわ。とりあえずダメ元でやってみるから。」

「おお！ありがとうな志保君。」

（おい！博士…何でそんな面倒な事しなくちゃいけないんだよ…）

（良く考えてみる…新一。志保君のお父さんは探偵…そこに居れば、組織の情報が飛び込んでくるかもしれんじやろ…）

（…それ以前に、志保にばれちまうだろ…）

（あ）

「ほら、行くよ。」

「あ、うん……」

しかし、歩こうとしてすぐに志保は立ち止まった。

「そういえば……名前、何て言うの？」

「え……」

「博士？この子の名前は？」

戸惑うコナンを見て、志保はすぐに聞く対象を変えた。

「あ、いや……」

「まさか……親戚の名前まで忘れたの……？老化現象かしら……」

「コナン！」

志保も振り向いた。

「僕の名前は江戸川コナンだ！」

その瞬間、志保が早くも疑い始めたのを、博士も、コナンも気付いていた…

## 2 致命的なミス（前書き）

短いですね……うーん……

## 2 致命的なミス

数秒後、志保はいきなり音を立てて笑い始めた。

「へ……」

「……面白いじゃない。」

（ハハ……悪かったな。変な名前……）「そ、そうかな？」

「まだしらばつくれるつもり？……良く簡単に偽名を作れたわね……」

「……！！」

「何驚いてるの？これぐらい、私だって分かるわよ……後ろの本を使  
ったんでしょけど……本当の名前を言えない事情があるのか、私を  
からかってるだけなのか……どっちだか知らないけど、まあいいわ。

よろしくね。江戸川君……」

「う、うん……」

二人が家を出てから、博士はぼそつと呟いた。

「……何日間持つか……」

~~~~~

二人は歩きだしたものの、中々帰れなかった。
何故か、歩くペースが遅い…というのも、志保がかなり遅い。手を

つなぐのを拒否されたコナンは、仕方なく後ろから付いて行った。

それにしても、志保の顔色が、さっきから少し優れない。たまらずコナンは聞く。

「志保お姉ちゃん、大丈夫？」

「え、ええ。大丈夫だけど…」

「気分悪いの？」

「ええ…だから悪いんだけど…先歩いてくれる？私、ゆっくり歩きたいから…」

「う、うん。いいよ。」

30秒後、コナンはようやく足を止めた。

しかし、もう遅い。角を2つ曲がってしまった――

「江戸川君…どうして私の家への行き方、知ってるのかしら？」

後ろを振り向いたコナンが見た物は、志保の冷たい瞳だった。
そして、それを見て確信する。誤魔化せない――

3 バレ…た？

「え…あ…いや…」

絶体絶命である。

呆気なく、コナンは志保の策略に引っ掛かったのだ。

勿論、彼女はピンピンしていて、静かな、だけど恐ろしい笑みを浮かべている。

―何かを確信している時の、志保の表情。過去に何度も色々な人間に見せた表情だが、この表情を見せた時はその人間が何らかの隠し事をしていて、それも90%を超える確率でそれがバレている。そして新一に至っては100%…バレなかった事は無い。

今は江戸川コナンだが、かなりの確率でバレている…そう確信した。

「もう…隠す必要なんてないでしょう?」

(やべっ…)(「な、何を?志保お姉ちゃん?」

「……この場合、お父さんの知っている人しか可能性は考えられないんだから…」

(えっ?)

「この道は3年前に少し形が変わってるから…完全に道を分かった感じだったあなたは、恐らく3、4歳の時より、もう少し後にこの辺りに来ている…そして、うちの事務所に来た。それしか考えられないでしょう?。」

どうやら、志保も勘違いしてくれているらしい。

「え…あー…」

「どうなのよ。はっきりしなさいっ…」

コナンはとりあえず、誤魔化す事にした。

「う、うん。そうだよ…」

「…まあ。もうお父さん覚えてないだろうし、調べようもないでしょうけど…」

コナンにとってはあまりにも幸運だった。まあ、流石にいきなり正体に気づかれたんじゃない。たまたまのものではない。

が、それでも志保の質問は終わってはいなかった。

「それと…あなた、やけに工藤君に似てるわね？」

「えっ？」

「ああ、ごめんなさい…さっき言ってた、新一の事よ…眼鏡外したら、本当に新一の小さい頃にそっくりなんだもの…」

「は、はあ。」

「本当に、まるであなたが新一の様に見えて…」

（ゲッ…）

すると、志保は座りこんで、コナンの顔を見つめる。

しばらくして、ようやく立ち上がると、志保は事務所へいつもの足取りで歩き始めた。

しかし、また一つ、志保の心の中に疑惑が生まれていたとは、コナシが知る訳が無かった。

4 アルバム

「ふう…着いたわ。と言っても、あなたからすれば久しぶりなんでしょうけど…」

ガチャ

「お父さん？」

「おー、帰ったかつ…志保っ…」

「ったく…泥酔しちゃって…」

パン

「は、はい。何でしょう…」

（おいおい…志保お得意の射撃かよ…）

「大丈夫よ。江戸川君…これはただのBB弾だから…」

「う、うん。」（いや、普通に当たったら痛えよ！！）

「お父さん、この子何だけど…」

終始、志保が話を優勢に進めていった。まあ、当たり前と言えば当たり前前…相変わらず志保は小型銃をちらつかせていたのだから…今や彼女に丁寧な扱われ、12年が経つこの銃は間違いなく彼女の護身兵器として、その生涯を終えるに違いない…

さて、話を戻すと、小五郎は勿論快く改め、渋々OKを出さざるを得なかった。

「でもよ…お前、忙しくなるぞ？食事も、洗濯も…」

「大丈夫よ…それくらい…」

そして、志保はコナンにまたしても僅かではあったが、恐ろしい笑みを浮かべたのだ…

~~~~~

「ねえ、お父さん？あの子、どこかで見た事ない？」

「ん？ああ、あのボウズか…あんな特徴的な奴なら、覚えてるはずなんだが…全然記憶にねえな。それがどうかしたのか？」

「ううん。何でもないけど…」

ちよつと可笑しいわね…

この3年間で、お父さんが扱った事件とかその他も含めて全部で8件。

内5件は、私も依頼者の他、この事務所に来た人の名前全員を記憶してある…

残りの3件の中に…考えられなくは無いけど、でもそれも可笑しいわ。全て依頼主は1人だったって聞いている…子供の話なんてしてなかった…

変ねえ…私の記憶もちよつと狂って来てるのかな…

それとも、やっぱりこの町の子だったとか？

私が学校に行っている間に、泥酔してるお父さんの元に行った事があるとか？

いくらでも考えられるパターンはあるけど……証拠も無い……

「……おい……」

待って……確かあの子……

「おい！志保！早く風呂入ってくれえ……」

「あっ……ごめんなさい。さっさと済ませてくるわ……」

~~~~~

（ふう…良く寝た。）

一晩で色々あって、完全に疲れきっていたコナンは、簡単に眠りにつく事が出来た。

そして、6時半には普通に目が覚めてしまったのだ。

―いつもは志保が作った遠隔目覚ましアラームで起こされていたのに。

（ん？）

部屋を出ると、ふとコナンは志保の方に目をやった。

朝食はもう出来ているようで、何か調べごとをしている。

「どうしたの？志保お姉ちゃん？」

「あら…早起きね。江戸川君。」

「そ、そうかな。」

「ちょっと、新一の事でね。」

「え？」

「この子なんだけど…凄く江戸川君に似てるな、って思ったのよ。」

志保はアルバムを指差して、座ってコナンに見せる。

「へえ…そうなんだ。」

そして、ゆっくりとアルバムを閉じて、本棚に仕舞い直した。

しかし、しばらく志保は立ち上がらない。

「…不安なの。新一が…何処に行ったのか。何をしに行ったのか…
音沙汰も無くどこかへ行ってしまった事なんて…無いから。」

ゆっくりと、志保の目が潤んでゆく。

（志保…）

「馬鹿ね…私っ…あんな推理フェチの事なんてっ…どうしてっ…気にしてるのっ…?」

4 アルバム（後書き）

志保の射的の腕が凄いのは（原作では実際の拳銃ですが）原作通りです。

ただ、これから何度これを志保がやるかと考えると…筆者ですら今からでも恐ろしくなります。（あんまり多用しないようにはしますが）

5 転校生

「馬鹿ね…私っ…あんな推理フェチの事なんてっ…どうしてっ…気にしてるのっ…？」

（志保…）

人前では決して涙を見せない志保が、涙を瞳に浮かべていた。

グツとコナンは齒を食い縛る。

今にでも口からは「俺が新一なんだ」と言いたくなる様な、そんな感情に耐える。

どれだけ志保が辛い思いをしているか、いつもは見せない志保の表情から理解出来た—だからこそ、コナンは耐える。

暫くして、志保の潤んでいた瞳も、いつもの冷静さを取り戻していた。

「…ごめんなさいね。さあ、朝ご飯食べましょうっ？」
「う、うん。そうだね。」

~~~~~

「それじゃ、行つて来るから―あまり飲まないでよね。私立探偵、毛利小五郎さん？」

「わーってるよ……」

ガチャン

「ごめんなさいね。江戸川君…お父さん、はっきり言つて役に立たないから。」

「べ、別に…気にして無いけど…」（いや、もう知ってるから。最初から。）

「そういえば、転校の手続き…阿笠博士にしてもらったの？」

「う、うん。そうだよ。」

「ふーん…っと、小学校はこつちよ…まあ、気をつけて行きなさい。」

「

とりあえず、コナンは無邪気な子供を装って返す。

「はい！」

そして、その方向へ向けて走り出した――

~~~~~

「志保〜！」

「園子……」

放課後。園子は、一人歩いている志保を見つけた。

「ふう……ねえ、今日これから――」

「ごめんなさいね。ちょっと、今日は用事があるから……」

しかし、志保は早足で去ってしまふ。

「もう……相変わらずね。志保……まっ、仕方ないか……っ！」

もし、すぐに園子が体の向きを変えていたら気付かなかっただろう。

――志保が、小学生に声を掛けて、一緒に帰る光景には。
しかし、何故か追いかける気にはなれなかったのだが。

~~~~~

「初めまして…江戸川コナンと言います。よろしくお願いします。」

背がかなり低い、眼鏡を掛けた少年―

（つたく…別の意味で、本当に緊張するぜ…）

「それじゃあ、コナン君はその列の、前から3番目の席に座ってください。」

「あ、はい。」

ゆつくりと、その席へ歩いていき、ランドセルを机において、椅子に座る。

―完全に、小学生の取る行動である。

（くっそ…まあいいか。あんまり周りと触れ合わなきゃいいだ―）  
「ねえ、コナン君？」

なんてわけには勿論いかない。女の子からすれば『可愛い転校生』に映っているコナンは、完全に注目の的だった…

「な、何？」

「ねえ―」

「さあ！授業を始めるわよ―！」

その少女が言い掛けた所で、小林先生は手を叩き、号令を促す。

「あ、じゃあ…また後でね！」  
「う、うん…」（くっそ…やり辛いな…マジで。）

~~~~~

「どうだった？学校は…お友達は出来た？」
「う、うん。まあね。」

強制気味に、歩美に友達にされ、元太と光彦にも紹介されたコナン。
正直、高校生からすれば呆れるような友人である…

「そう。良かったわね……私みたいじゃなくて。」

最後、志保は少し早口で言った為に、コナンは聞き取る事が出来なかった。

「え？最後…何て言ったの？」

「…別に。なんでもないわ……そうそう。今日の夕ご飯はカレーだ

から…たまにはあの飲んだくれに任せようかしら。」

「じゃあ、志保お姉ちゃんはどこかに行くの？」

コナンは上を見上げて、聞き返した。

「ええ。まあね……」

静かに、志保は笑った。

5 転校生（後書き）

次回、無茶苦茶志保のターン。まだまだコナンは大ピンチの連続です…

全ての疑惑が解けるまでは、どうしようもないでしょう。

6 暴かれた！？

「それじゃ、任せたわよ。」

「はい！」

この家では完全に、小五郎<<<<<……<<<<<<志保の
関係が成り立つ。

まず、そもそも推理能力ですら志保に軍配が上がる。新一に無理矢理連行されて事件現場へと連れて行かれる事もしばしば…その時も結構役に立つ。たまに新一の知らない事を知つてたりと、色々な面で。

それは、小五郎と一緒にの時でも同様だった。小五郎が忘れていた事や、見落としてる事に度々気付く……とんちんかんな推理をかます小五郎より遥かに役に立つ、とまで目暮に言われていた……小学3年生の時点で。

それに加え英理讓りの小五郎の扱いの上手さ。まさに小五郎の天敵であつた…

そして、たった今小五郎は志保に頼まれて、「カレーを作る」事と、「コナンの面倒を見る」事を同時にやらされているというわけだ。何より、後半はしつこく言い聞かせていた……何故なのか、小五郎には全く分からなかったが。

~~~~~

志保は、自分の携帯を一度開く。

それは…何故か帝丹小学校のホームページ。

「……よし。」

そう呟くと、再び閉じて、チャイムを鳴らす。

ガチャ

「おお、志保君。どうかしたのかね？」

もう博士は緊張している。志保が現れただけで、「コナン」新一「がバレル気がする。」

「とりあえず…上がっていいかしら？」

「あ、ああ。」

~~~~~

「ねえ、博士…江戸川君の転校手続き、お疲れ様。」

「え？」

「転校の手続きよ。したんでしょ？」

「あ、ああ。まあ、な。」

「江戸川君は結構喜んでたわよ…友達ももう出来たみたいだしね。」

「そ、そうか。それなら良かったんじゃないが…」

「そうそう…帝丹小学校への入学手続きの条件知ってる？」

はっと博士は志保を見た。

—自信に満ちた、静かな笑みを浮かべている。

「普通、転校については、在学証明書、教科用図書給与証明書等を、

通学していた学校から貰わなければならない。あ、後、海外国籍の場合、少し話は違うわ。でも『外国人登録証明書』が必要になる――そうね。博士。もう彼の母親に返しちゃったかしら？」

思わぬ方向からの奇襲。阿笠は驚くものの、なんとか冷静に対処しようとする。

「あ、ああ。まあ……」

「あら？そう……それで、返したのはどっちなのかしら？」

ここで、疑惑を断っておきたい阿笠は、冷静に答えを選ぶ。海外にした時に、変な知識を志保が知っていた場合厄介な話になる可能性が不安になった。

日本なら、対処も可能だと思い、阿笠は決断した。

「普通に、日本――」

しかし、この言葉が命取りとなってしまふとは。

「そうでしょうね…彼は日本人だというのは確かよ—だって」

彼、新一だもの…

「……………」

「そう…今の江戸川君には—戸籍が無いはずよ…調べてみれば分かるんじゃないかしら…」怪しい小学生がいる。いきなり居候してきた…調べてほしい。』ってね…」

6 暴かれた！？（後書き）

これは…凄い大危機^{ピンチ}。

7 電話の主は…

「な、何を言っておる…志保君。そんな…そんな事は…」

「まあ…調べなくなつて、どっちにしても彼に聞けば分かる事―付いてきてもらつたよ、博士…」

~~~~~

ガチャ

「只今…」

「あ、お帰り。志保お姉ちゃん…」

志保が3階の家の扉を開けると…台所で小五郎がカレーを作り、ダイニングでコナンは寝っ転がって漫画を読んでいた。  
にしても、小五郎は時間を掛け過ぎだった…

「お父さんねえ…何でまだ出来てないの？」

「あ、いや…それは…」

「私出て行ってから、すぐに作り始めたんだと思ってたけど…違ったのね？確かあの後、沖野ヨーコのライブの再放送がやっていたよ  
うな…」

もうバレバレである。

「もう…いいわ。別に…飲んだくれてればいいじゃない。いつものように…」

「「え？」」

小五郎とコナンの声が重なった。志保にしては言う事が珍しい…

「とりあえず、二人とも邪魔しないで。」

「「…はい。」」

この日、探偵事務所は閉まっているが…自宅の前には一人の老男性が、ドアの外から耳を傾けていた。

「ねえ、新一？」

不意に、小さな声で志保が尋ねた。

「新一って…あの高校生探偵の事？」  
「え」

志保からすれば予想外だった。無意識の内に新一と呼べば、簡単に「何だ？」とでも返してくると思っていたのである。

そこからある程度話しこんで、ボロを出せばそれが一番の証明になると思っていたのだ。

「早く見つかるといいね…新一お兄ちゃん…」  
「そ、そうね。」

しかし、目の前にいる子供は全く反応を示さない。  
それじゃあ、やはりコナン≠新一なのだろうか？  
自分の推論に、何かしらの問題点があったのだろうか？

そう考えていたその時――

プルルルル…

「電話だよ。志保お姉ちゃん。」  
「ええ…ちょっと待ってて。（ガチャ）はい、こちら毛利探偵事務  
―  
「よお、志保。久しぶり…」

「新—!？」

## 7 電話の主は…（後書き）

誤魔化しきれるか!?

## 8 不安

コナンは完全に硬直している。何故、存在しないはずの人間が、電話を掛けてくるのだろうか？

そして、志保は一応扉の外をしてみる…ちゃんと博士はそこにいたし、何か変な事をしてる素振りはない…

「悪いな…ちょっと、あの後厄介な事件に巻き込まれちゃってよ…しばらく―」

「―戻れそうに無いって？」

志保は、すぐに新一の意思を読み取った。

「あ、ああ。ごめん、志―」

「…ふざけないでよ…人の気も知らないで…」

「え？」

「何でも無いわ。分かったから…さっさと戻ってきなさいよ。」

「え、ああ。それじゃ、またな…志保。」

ピッ

グツと歯を食い縛った。

言いたい事があった…あの日、帰り道で言つつもりだった事―

まだ、何故か言えてない。

覚悟は出来ている。いつでも言えると思ってる―面と面が向かい合  
っていれば、絶対に言える。そう志保は思っている。

なのに、その青年は何処かで今日も探偵をしているらしい…

志保からすれば、余りにも下らないとしか思えなかった。

「…それじゃあ、ご飯食べましょ？」

その言葉にも、力が入らなかった。

~~~~~

「えっ！？マジ！？」

「ああ…危なかったんじゃないぞ？一応、『勘違いしててごめんなさい』というメールが来たから、追及はして来ないと思うが…じゃが、ちゃんと疑いの筋が通っておったし、完全に疑いが晴れたという事はないだろう…」

次の日の放課後。コナンは博士の家に立ち寄った時に、初めて志保にとてつもない疑いを掛けられていた事を博士から聞いた。

さらに、電話を掛けてきたのは…変声器を使ってたまたま帰国していた有希子だった事も。

「とりあえず、有希子君と優作君には事情は伝えておいた…追々、また連絡しに来るだろう。」

「そっか…」

「…とにかく、新一。その体で、探偵なんかやるんじゃないぞ。次に疑われた時は—もうお終いかもしれんしの。」

「ああ……」

しかし、それ以上にコナンには気になる事があった。

「それよりよ…俺が心配なのは…」

「心配なのは？」

だが、博士にもそれを言う事は出来ない。

「…いや、何でもねえ。とりあえず、俺は怪しまれない内に帰つから…じゃ、またな。」

「あ、ああ……」

それでも、コナンが言葉を詰まらせた事から、博士は何を言おうとしたか推測できた。

『志保に正体がバレた時に…志保がどんな気分になるだろうか？何故新一が正体を隠しているのか分からず、そのまま疎外感に苛まれるのではないだろうか？』

この不安は、やはり取り除けないのだろうか。

8 不安（後書き）

とりあえず志保疑い編一時終了です。ここまで読んで頂きありがとうございます。
うございました。

これからじっくりと展開していきます…蘭はまだもう少し先になりそうです。

お気に入り登録、感想、本当にありがとうございます。これからも
よろしく願います。

9 前日の朝（前書き）

「変わり果てゆく未来に」同様、バレンタインネタ突入です。

9 前日の朝

朝から、凍えるような寒さ。

「それじゃ、行つてきます。」

「行つてきまゝす。」

「おう…気をつけるよ…」

ガチャ

コナンがドアを開けて、横を見ると―僅かだったが、雪が積もっていた。

「昨日雪が降ったんだね。」

「そうね…」

ゆつくりと、二人は歩きだすと―

「あつ！志保！！」

すぐに後ろから、元気の良いお嬢様が…

「園子じゃない。どうかしたの？」

「もう…『どうかしたの？』じゃないでしょ？まるで何か用が無いと私は志保に話しかけちゃいけないみたいじゃない…」

しかし、志保は呆気なく返した。

「あら？そう聞こえた？ならごめんなさいね…」
(ははっ…相変わらずだな。)

心の底で、静かにコナンも呟く。

「それより、志保。明日、どうするの？」

(明日？げっ…まさか…)

「ええ。勿論…1年前と同じ事をするつもりよ—この子も巻き込んじゃおうかしら…」

そう志保が言っで、初めて園子は志保の隣を歩く少年の姿に気づいた。

「あれ？この子…誰？」

「私の家の居候…」

(居候って…否定は出来ねえけど。)(「はじめまして、園子お姉さん。」

しかし、この一言で話が厄介な事になってしまった。

「初めましてって…礼儀正しいのね、この子。」

「礼儀正しいんじゃないくて、ませてるのよ。この子…」

「あっ、そうだったの？へえ…」

園子が、コナンの顔を覗きこむ。

「それと、眼鏡外すと…小さい頃の新一君にそっくりじゃない？」

「まあ、そうね。」

(ゲッ…)

しかし、園子もそこで追及をやめて、1年前の話に話題を戻した。
「それで、志保…またやるの？あれ…」
「ええ。勿論…今回は後で新一に渡すだなんて失敗は決してしないわ…彼、何処かへ消えちゃってるし…」
「でも、大丈夫かな…新一君。どうせ今日も事件、事件でしょうけど…」

流石に園子も少し心配する。

「大丈夫よ。彼なら…」

「そうなの？」

（志保…）

「彼、ああ見えて悪運は強い方だから。」

「それもそうね。」

（って！おい！！）

しかし、コナンはそこではっと気付いた。自分に、とてつもない災厄が襲いかかるうとしている事を…

『この子も巻き込んだじゃおうかしら…』

~~~~~

帝丹中学校時代から、新一と志保には生徒、教員ともに注目が集まっていた。

志保は体育を除く全教科の成績が優秀―特に化学の知識は研究者レベルとも言われていた。

新一は音楽を除く全教科の成績が優秀―それに加え父親譲りの推理能力が、この頃からあったと言われている。

そんな二人の關係に、疑惑が生まれたのは中3のバレンタインデーだった…

毎年、そんなイベントに興味すら示さない志保が、何と新一に義理チョコを渡したのである…

幼馴染である事を考えれば、さほど気にする事は無いのだが…周囲はやはりそれが志保だとやや違和感を感じるのだった。

そして、次の年。事件は発生した。

『帝丹高校1年生、男子生徒が数名気絶』

「今年も新一にチョコをあげるのか？」

「未来の旦那様に…」

などなど、1カ月前から毎日のようにからかわれていた志保は、怒

りを爆発させて、なんと新一を除く学年の男子生徒124人全員に手作りチョコを配ったのである。

ところが、それがとんでもない事件を発生させた。

早速それを食べた男子生徒達が、次々と苦しみ始めたのだ。中には気絶する者も…

勿論、犯人は次々と授業中、休み時間に倒れゆく男子生徒を見て口元につすら笑いを浮かべる恐ろしい悪魔のような小娘である。

さらに、そのどさくさに紛れて、志保は新一だけにちゃんとした義理チョコをプレゼントする事に成功している…見たのは女子生徒のみ。

結果的に、後々新一が恨まれる事になるのだが…

「ーってわけよ。分かった？」

「う、うん。あっ…それじゃあね！」

一応、その話を志保から聞いたコナンは、分かれ道で志保と園子に手を振って、走って行った。

「元気がいいわね…あの子。」

「…そうね。」

二人はそう呟いた。

## 10 志保の計略

（これなら…やらなくても大丈夫そうね。）

昨年の出来事があつてか放課後になつても志保をからかう声は聞こえて来なかつた。

「明日はどうするの？」なんて聞いてくる人間すらない。志保からするとちよつと不気味に感じられたのだが。

しかし、丁度その頃―帝丹小学校1-Bでは、静かに火花が散りあつていた…

~~~~~

「ねえねえ、コナン君？嫌いな食べ物つてある？」

そう歩美が声をかけた瞬間だつた―謎の悪寒が、1年ぶりにコナンの背筋を伝つた。

「え…うーん…レーズンかな？」

（な、何だ！？まさか…この子達の中に…黒ずくめの仲間が！？…

って、いるわけねえか…)

「分かった…じゃあ、コナン君、明日楽しみにしててね!!」
「え?」

悪寒が、更に強くなっていく。

「じゃあ、帰ろ!コナン君!」
「あ、うん…」

そして、歩美は自分の席へ鞆を取りに行く―その時、気付いた。
―周りの男子生徒、女子生徒のとてもなく強い視線に。

~~~~~

ガチャ

「ただ…いま…」

志保がドアの方向を向くと、そこにはへとへとになったコナンがいる。

「どうしたの？」

「…ちよつと…色々…」

コナンはその後、沢山の生徒に囲まれた。女子生徒は好みを聞き出し、男子生徒はひたすら嫉妬である…特に元太と光彦。結局、帰るのは1時間遅れてしまった。

ふらふらとソファへ歩いていき、ぶっ倒れるようにコナンは寝っ転がってしまう。

そして、数秒もしないうちに寝てしまった―まるで某アニメの5年生のように。

「ちよつ…手ぐらい洗いなさい…って、寝てるし…はあ。でも…こっちの方が都合いいわね。」

そう言うと、志保はゆっくりと台所へと向かい、何かを作り始めた。

明日は、2 / 1 4である。

## 10 志保の計略（後書き）

やっぱり瞬間睡眠というドラマえもんのN君しか考えられないんで  
すよね…

さて、志保の計略とは？次回もよろしくお願いします。

## 11 事件発生！？

2 / 14 7 : 45

ゆつくりと、3人は学校へ向かう――

その中の一人。たった一人だけが、大きな袋を吊る下げている――志保だ。

この中身を知る者はいない――が、予想は誰にでもつく。

『脅迫用チョコレート』である。

この日、志保は恐らくまたしても全員に義理チョコを配るのだろう――恐ろしい話である。

捨てるわけにもいかないが――食べるわけにもいかない――怖い怖い。

「にしても、新一君何処行っただのかしら――こんな美人を放り捨てて――」

「――あなたに渡してもいいのよ？あのチョコ全部――」

そう志保が言った、瞬間だった――

「あ――」

園子が、血相を変えている。

「どうしたの？園子――」

志保と、コナンはゆつくりと園子が指差す方向へと顔を向けた。

一人の女性が、血を流して横たわっている。

キヤアアアアアアア

住宅街に、園子の悲鳴が響き渡った。

~~~~~

「っ……」

コナンは新一の時の癖でその女性に近寄ろうとしたが――

「ダメよ！江戸川君…離れてなさい！」

「あっ…でもっ……」

「いいから！ごちゃごちゃ言わないで、早く！」

「あ、うん……」

すると、志保は女性に近寄る。

「……………」

園子が、不安そうに尋ねる…

「その人…大丈夫…なの？」

しばらくして、志保は首を横に振った。

「ダメね…もう亡くなってるわ…」

「そ、そんな…」

「とにかく、園子。救急車と警察を呼んで！」

「あ、うん…」

~~~~~

「いやー…志保君。助かったよ。ちゃんと現場を保存してくれて…  
流石は工藤君の助手だな！」

確かに、志保の判断は冷静だった。死体は新一のせいで何度も見せられていたので、やや慣れている。

「そんな…別に、助手じゃ無いですよ…」

「いやいや…とにかく、君のお父さんよりはるかに役に立つさ…  
まあ、後は任せなさい。とりあえず、後で事情聴取には付き合っ  
てもらうが…」

「ええ。構いません…学校側には連絡しておきましたから。」

「おーい！志保！！」

そんな会話を二人がしていると…志保より役に立たない男がやって  
来た。

「来たよ…」

「はあ…まあ、お父さんの言う事はあまり気にしないでください…」

大きく、志保は溜め息をついた。

## 11 事件発生！？（後書き）

大した事件には出来なそうです…そういうの書くのが苦手なんで…

## 12 新一の電話

ところが、事件はあっさりと解決の方向へと向かっていった。犯人と思われる人物が周りの人物の証言であつという間に2人に絞られたのである。

殺された女性はデザイン会社に所属していて、名前は岡部真紀（25）。その壁にはさほど血も付いていなかったことから、壁に打ち付けられたという可能性は除外された。

すると、額を鈍器で一撃、そして壁へと倒れこんだと考えられる。そして犯人と思われるのは

・ 同会社に所属する上司の飯山元成（33）

・ 真紀の親友であるシナリオライターの坂城彩夏（24）の二人。

そして、二人ともその付近に居たという事も分かっていた。

ここまで分かっていたれば、さほど時間を掛けずに解決できそうなものなのだが…

「まだ、見つからないのか？凶器は…」

「はい…元成さんが通っていた大通りと、彩夏さんが通っていた反対側の線路沿いの道を調べているんですが…」

「ゴミ箱の中とかにはないのか、高木？」

小五郎が聞くが、高木は首を振った。

「いいえ…探してますが…」

「そうか…」

「しっかし…警部殿。」

「ああ…やはり、凶器が見つからないと…この時間帯は人通りが多い…確かに犯人候補はこの二人だが…有力なだけだ…やはり早く見つけたい…」

そんな話を話している二人を見かねていた一人の少年…コナンだ。仕方ないので、自ら見つけた物を警部の足元へとわざと落として、演技を試みる…志保にもバレていなそうだ。

「あつれれ…そこに何か落ちてるよ…」

「ん…？おいこら！ボウズ！現場に入ってくるんじゃない！」

「あつ…ごめんなさ…い！でも、そこに落ちてる物が気になって…あつ…」

言いかけている途中に、志保に持ち上げられてしまった。

「ダメでしょ？邪魔しちゃ…警察と、一応探偵のお父さんを。」

（一応って…酷いな…）

かすかに小五郎はそう思ったが、取り敢えずコナンがさつき指差した辺りを探してみる…

「ん？何だこりゃ…」

「どうしたんだね？毛利君…」  
「警部殿。これは…」

小五郎が見つけたのは…小さなガムテープの切れ端。

「…何に使うんでしょう？」

しかし、この時―一人の犯人の拳動が、明らかに可笑しくなっていた。

（間違いねえ…犯人は、あの人だ！！）

コナンは確信する。

がしかし、ここで一つ問題が発生した。

―どうやってこの推理を伝えるかである。

（しゃあねえな…こりゃ、頑張ってもらうか…志保に。）

そして、コナンは隠れて志保へと電話を掛けた…

~~~~~

プルルル…

「っ…こんな時に電話？（ピッ）はい？もしもし…」
「よっ！志保…」

え…

「新一！？」

「ああ、ちよつと一段落ついてな。暇だったから電話してみたんだが―」

「良かった…新一。ちよつと知恵貸してくれる？」

新一なら…分かるかもしれない。

「あ、ああ…何だかしらねえけど、事件か？」

「ええ。そうよ……」

「そういう事か…」

「分かった？犯人…」

「ああ。勿論。まずは―」

「ちょっと待って！」

「え？」

「…ねえ。新一…」

聞いてくれるかしら…新一。

「何だ？」

「…私も、私なりに一応推理してみたんだけど…」

馬鹿にされるわね。普通に…

「…聞いてくれない？」

「―ああ、いいぜ。」

あれ…意外ね。

「…#すー」

~~~~~

「どうかしら…やっぱり、どっか可笑しいわよね。」

まあ、違いわね…途中から少し甘い気がするし…  
やっぱり推理フェチには敵わ—

「クツクツク…」

ちよっ…何よ。あからさまに笑わなくなっ…

「志保、お前…そこまで出掛かってるなら、言っちゃえよ…その推理を。」

！！

「え…合ってるの？」

「さあ、な。」

何よ…酷いわね。

「ちょっと…馬鹿にしてるの？あなたみたいな完璧な推理フェチとは違って、どこかに見落としがあるかもしれないって思うのは当然でしょ？」

「いや？俺も自分でどっかに見落としがあるかもしれないねえぜ？」

「え…」

「—どんな名探偵だって、人間だ。少なからず自分の推理には不安がある…特に、今回みたいにやや不安定な状況だと、尚更な。でも、だからこそ…推理が的中してた時の快感が味わえるってもんなんだよ。」

ふふっ…そういう事ね。

あなたが、ずっと推理フェチであり続ける理由…

「…そうね。分かったわ。それじゃあ—」

「おい！志保—まだ話が—」

プチッ…

そうね…あなたの代わり、やらせてもらっわ。

—工藤新一の、助手代わりとしてね。

## 12 新一の電話（後書き）

あの蘭の某シーンを少し参考にしてみました…てか結構そのままな気が。

### 13 血の色の解決・溶けない思い

「目暮警部…?」

「おお、志保君か。何か見つかったかね?」

「いいえ…そうじゃなくて。あの……」

「何い!?!? 本当かね!?!?」

「ええ……とりあえず、二人をここに呼んで下さい。話はそれからです……」

~~~~~

「何ですか…刑事さん。もう身体検査も終わったし…」

「それにつ…早く家に帰してよ…分かるでしょ？ 私達の気持ちぐら
い…」

「そうですよ。凶器だって見つかって無いのに―」

「凶器ならあるわよ？」

全員の視線が、志保へと集まる。

「な！？ 本当かね、志保君！？」

「ええ…犯人が使ったのは―壁よ。」

「壁だと？ ふざけるな志保！」

「お父さん…気付かない？ 壁の一部がへこんでるのに…」

「た、確かにそうだが…」

「そう、犯人はそこに彼女の頭を叩きつけたのよ―そうよね、飯山
さん？」

「っ！」

「男の力なら確かに可能よ…力強く、その壁に頭を叩きつける事が
ね。」

「馬鹿な事を言っな！ それなら、壁に血が―」

しかし、志保は勿論、その理由も分かっている。

「そう。確かにそれなら血がつくはず…でも、ある物を使えば血をつけないのも不可能じゃないわ…」

「ある物…だと？」

小五郎は全くついていけない。

「そう―例えば、厚紙とか？」

「！！」

「そして、さっきあなたガムテープを見て顔の色を変えてたわよね？それは全て捨てたはずのガムテープが、まだ残っていた事に気付いたから…そうでしょう？」

「……」

「このサイズの厚紙を持っている可能性が高いのも、デザイン会社に所属しているあなたが一番よ。」

「じゃあ！その厚紙は何処に行ったというんだ！？」

「……それ、じゃない？」

志保は、その路地の端の方向を指差した。

「あ……」

「あそこに張つてある壁紙よ…赤にしては少し黒っぽいわよね？後

ろの壁と色が確かに完璧に同化してるから、分かりづらかったけど…調べてみればすぐに分かるんじゃないかしら…」

そして、がつくりと飯山は倒れこんだ。

―この後、その壁紙の裏側に空いていた穴から、血の付いた手袋も発見され、事件は収束を迎えた…

~~~~~

「いや〜！お手柄だったよ！志保君！」

「別に…大した事は…ただ…」

すると、志保は小五郎の方を向いた。

「お父さんに、推理を聞いてそれを喋ってただけなんですから…」

とりあえず、志保は出任せを言う。一々自分に注目を集められるのも、何だかうざったらしかった。

「な、何！？本当か、それは！？」

流石に、コナンも呆れていた。

（おいおい…目暮警部。それ信じてどうする…）

「毛利君！やれば出来るんだな！君も！」

「はっはっは！天下の名探偵、毛利小五郎！今、誕生…！」

「はあ…呆れるわね。あんたのお父さん…」

「いつもの事よ…」

「そうなんだ…」（知ってるけど…にしても酷えな…）

溜息の志保、コナン、園子。

—そして、その横を一台の黒い車体が通り過ぎていった…

~~~~~

「只今…ってあれ？おいおい！志保は何処行つた！？」
時計は夜の8時を回っている…

「おじさん。志保お姉ちゃんなら、ちょっと用事があるって言つて…」
ガチャ

「只今…夕飯は出来てるから…」ナン君、温めてくれた？」
「うっ、うん。」

「おい、志保。何処行つてた？」

「あら？天下の名探偵さんなら分かつて当然だと思うけど…」

志保はいたずらっぽく言ってみた。

「何だと？」

「ヒント：今日は何の日？」

「「あ！」」

コナンと小五郎の声が重なる。

「新一兄ちゃんのお家！？」

「ピンポン…それと、新一…暫く帰つて来ないと思って、ちよつと変わったチヨコを置いて来たわ。」

「「変わったチヨコ？」」

また重なる…意外と息びつたりな二人。

「さ、とりあえず食べましょ？」

「そ、そうだな。」

「うん。」

（そう…溶けちゃいけない。思いが溶けたら…全て終わりだから。）

~~~~~

変わったチョコって……

おっ！あったあった……ん？これって……ああ……耐熱性のチョコね……

って！ちょっと待て……それを自分で作ったのか！？

マジかよおい……

流石だな……

…ま、ありがたく頂きますか…

T h a n k   y o u . . . 志保。

### 13 血の色の解決・溶けない思い（後書き）

次回いよいよ「蘭」登場！

## 14 車中（前書き）

蘭が登場…ですが、何か怪しい雰囲気…？

謎が沢山発生します。その内分かってくるので、あんまり気にしなくても大丈夫です。

## 14 車中

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「ええ…大丈夫よ。でも、安心したわ。相変わらず、蘭は元気みたいね。」

「当ったり前よ！組織の一員だからなんて、関係ないわ…普通に高校生活を送ってるし。」

しかし、それでも明美は心配だった。

「でも…これから何か組織にさせられる事も増えるかもしれないわ…」

「大丈夫だって！私、銃弾だって避けられるんだから…それに、お姉ちゃんがピンチになっても守ってあげるから…いつでも呼んでね？」

「ふふっ…頼もしいわね。ありがとう。」

「うん。それじゃあ、またね。」

ちらつと蘭は外を見て、すぐにそう言った。

~~~~~

「シェリー…乗れ。」

その車の助手席へと蘭は乗り込む。

「どうだった？久々の姉との御対面は…」
「…ほとんど、何も話す事無かったわ…」
俯きながら、蘭は答える。

「フン…まあそんなもんだろう。」

「ねえージン？」

不意に、蘭が尋ねた。

「ジン…あなた、どうしてそんなにも変わってしまったの？」
「は？」

「…前までは、楽しそうに毎日を過ごしてたじゃない…あんなに『毎日充実してる』って……キャッ！」

いきなり、体を包み込む物に、蘭は驚愕する。

―車を止めたジンが、いきなり抱き締めてきたのだ。

「大丈夫だ…お前は、守る。」

蘭はただ、黙っている事しか出来ない。

「いや…守る必要は無いか。どちらかというとな俺の方が守られているのかもしれない…お前だけは、失えないからな。」
「……………」

ジンはちらつと蘭の顔を覗きこむ。

―その表情が、あまりにも悲しい。

「そんな嫌な顔をするんじゃない…近い内に、お前を組織から抜けださせてやるよ…」

「私…が？」

「勿論、俺と姉も一緒にな。」

たちまち、蘭の顔が明るくなる。

「ほ、本当に!？」

「ああ…任せておけ。あの方と話をつけておく。」

すると、今度は蘭からジンを強く抱きしめた。

「ジン…ジン…ありがとっ…」

「当たり前だろう? もう短い付き合いじゃねえんだからな…」

「そ、そうね…」

「その代わり、これから3カ月、大量に仕事が入るが…ミスは許されねえぞ?」

「ええ。分かってる…それで? 今日は何処へ?」

静かに、ジンは笑って告げる。

「毛利探偵事務所だ―あそこのへボ探偵を利用して、3億円を強奪する―」

15 依頼人（前書き）

またしても事件です…が、テンポ良くいきます。あんまり長引かせる話でもないのです…

15 依頼人

この日、授業は4時間で終わった。

昨日学校に来なかった事を咎められた俺。まあ仕方ない…とりあえず謝った。

勿論、誰もチョコはくれないだろう…って思ってたら、皆持ってきて…何だそりゃ。

しかし、そんな事はどうでもいい。とりあえず、今この状況を何とかしなくちゃならねえ。

帰ってきたら、事務所の前に高2ぐらいと思われる、女性が一人立っていた。

「入らないの？依頼があるんでしょ？」

「え、ええ…ねえ、毛利探偵事務所ってここで合ってるかしら？」

「う、うん。合ってるよ。」

「そう…」

しかし、それでもなかなか入らない…思わず聞いてしまった。

「ね、ねえ。どうして入らないの？」

「うーん…こんな事でいちいち依頼していいのかな…って思って…君、お名前は？」

「え、江戸川コナンだけど…」

すると、いきなり彼女は表情を変えて、俺の顔を覗きこんできた…
というわけだ。

そして、それから15分近く経つ…通行人はその様子を不思議に思
いながらも、普通に通り去って行く…

って！誰か助けてくれよ！！

「何やってるの…？」

おっ！救世主…

「志保お姉ちゃん…」

「ちよつと、通してくれる？」

やや不機嫌かな。今日は…

~~~~~

「依頼？」

「はい。ただ…こんな事で依頼していいのかなって…」

しかし、志保は普通に事務所のドアを開けて、そこにその女性を通した。

「大丈夫よ。いつもはただの飲んだくれ…仕事だから。」

「あつ…そうですか…」

（おいおい…実の娘がそこまで言っているのか？）

「お父さん？依頼よ。」

「おーっ！依頼！？……って！女子高生じゃねえか…」

がつくりとする小五郎。

「とりあえず、座って。」

「おいこら！志保…お断りだ！女子高生の依頼なんぞ」

パンッ

「は、はい。話は聞きます…」

きつちりと、小五郎の右耳をBB弾が掠めていた。

(怖…)

~~~~~

「脅迫状？」

「はい…これですけど。」

すると、その女性はゆつくりとその紙を出した。

「『お前の父親を捕まえた。返して欲しければ、6時までに3億円持つて、東米花ビル裏まで、お前一人で来い。警察や探偵に連絡したら命は無いと思え。』だと…？」

「はい…『探偵』っていうのが引つ掛かって…もしかして、そういう方面にも興味があるんじゃないかなって思いましたから…名前

も聞いた事無い探偵ならって思っで…」

「あ…はあ…」（そういう理由かよ…）

（ははっ…情けなっ…）

「この人、お父さんと面識があつて…必ず殺してやるってしつこく
て…私の顔も知ってるんです。だから私以外が行ったら…」

「とりあえず…3億円だと今から用意するのは厳しすぎる……」

「そ、そうですよね…」

「やりようによるんじゃないかしら？」

「「え？」」

いきなりそう言つた志保の顔に、3人の注目が集まる。

「東米花ビルの裏…って事は、多分そこにある倉庫でしょうけど…
そこを根城にしてるツツパリを放り込ませたらどうかしら？どさく
さに紛れて犯人を捕獲、お父さんの救出まで出来るかもしれないわ
…報酬に金をチラつかせればすぐにでも乗ってくるんじゃない？」

意外と恐ろしい事を言う志保に、コナンも青ざめていた。

「おいおい…」

「で、でも！それでお父さんが助かるなら…」

その女性は完全にやる気である。

「ま、まあまあ。そうしなくても、酔っ払った振りをした私が突っ込んでいけば…っと！」

小五郎はそう言いかけて、大事な事に気付いた。

「そういえば、あなたのお名前は？」

そういえば、まだその女性の名前を誰も知らない。

「ー早野朋美です。よろしくお願いします…」

~~~~~

「ここか…ん？」

「あれ？」

「ここですけど…」

「何だか、おかしいわね。」

車を飛ばして、現地へと向かった小五郎達…  
しかし、その全員が違和感に気付いた。

―6時を過ぎたにも関わらず、倉庫の扉が、閉まっているのだ。

小五郎は一人で車を降りて、窓から倉庫の中を覗き込んで見る…  
しかし、その中の光景は―

「志保！！救急車と、警察だ！人が死んでいる！！」

「『えっ！？』」

16 正体に気付いた者…（前書き）

コナン、超速攻。

## 16 正体に気付いた者…

「2人…どっちも殴殺か…」

「はい…警部。」

亡くなったのは…朋美の父親と、その脅迫犯。

「そんな…そんな…」

朋美はただただ、震えていた。

「しかし…何者だろうか…この二人を殺したのは？」

「…とりあえず、死後硬直も進んでいない…犯人は近くにいます…  
…なんだが…」

「…宮野さん？」

「え？何かしら…朋美さん？」

「…ちよつと、風に当たつてくるんで…事情聴取の時は、呼び戻し  
に来てくれませんか…？すぐそこにいますので…」

「え、ええ。分かったわ。」

（へえ…なるほど。やっぱりおかしいと思ってたけど…そういう事  
だったのか…）

そう言うと、朋美は倉庫の裏側へと歩いていった。

―しかし、この時一つの小さな影が、迫っている事には気付かなかったが。

~~~~~

「ねえ、朋美さん？」

いきなり変な気配を感じた朋美は、すぐにその方向を振り向く。

「っ！…あら、コナン君じゃない。どうかしたの？」

「ねえねえ、朋美さん。お父さんって何をしてる人なの？」
「……」

悲しそうな表情をする朋美。

「う、ごめんなさい…変な事聞いて…」

「うんうん。ごめんね……お父さんは、普通のサラリーマンよ。」

「へえ…ねえ、この脅迫犯は、どんな人？」

「…お父さんと、同じ会社なんだけど…3日前にお父さんと大喧嘩しちゃって…その人、いつもは優しいんだけど、怒ったらもう…」

「へー…じゃあ、最後に一ついい？」

「いいけど…」

コナンの口調が、変わった。

「お姉さん、探偵事務所に来る前に、ここに来たでしょ？」

「何時気付いたの…？」

既に朋美は気付いていた。この少年は全て理解している、と。

「小五郎のおじさん、有名じゃないって言ったでしょ？でも今朝の

新聞に載ってたよね…」

「…他には？」

「朋美さん、入ろうか迷ってたって言ったよね？その時は『こんな事』って言った割にはちゃんとした依頼だったじゃない？それでちよっと怪しくなって…それにお姉さん空手やってるでしょ？」

「っ！」

「相当鍛えてるみたいだし…殴殺するには最適だよね？」

「で、でも…それだけじゃ、空手とは…」

「―被害者に、他の傷痕もあつたけど…」

すると、朋美も手を叩く。

「なるほど…踵落としね。」

「そうだね。そこが一番気になったんだ…」

「…予め、殺しておいたのよ。二人とも…あの脅迫状も捏造した物…本当は、社長である二人に両会社からとあるデータファイルを手に入れたんだけど…って言ったの。そしたら簡単に食い付いたわ。両方とももう片方が脅迫した人だって勘違いしたみたいで…混乱している間に、後は私が仕留めただけよ。そしてそれから1億5千万を手に入れたわ。」

「…それじゃあ。」

「ええ。後であのへボ探偵に上手く証言させて、私の無実を証明してもらおうと思ったけど…ま、流石に無理があつたかしら…」

そして、コナンは悲痛そうな表情で次の言葉を発した。
「ねえ、朋美さん…どうして、こんな事を？」

「ふふっ…流石の名探偵君も、気付かなかつたみたいね？」

はっと、コナンは朋美の方を見る。

―不敵な、笑みを浮かべていた。

「でっち上げよ…早野朋美なんて人間、そもそもこの事件には関係ないわ…」

「っ…じゃあ、一体―」

「お姉ちゃん…たった一人の、私の大切な家族―」

コナンの言葉を遮った朋美は、それだけ告げると、ゆっくりと歩いて倉庫の窓に近寄っていく

（っ！まさか…）「させるか…！」

すると、コナンは腕時計を取り出す。そう、阿笠博士につけてもらった発明品…護身用にと、麻酔銃を手渡されていたのだ。

そして、その照準を朋美に合わせ、発射した！

「な…」

その針は、綺麗に朋美の首筋に刺さる…はずだった。
しかし、彼女は後ろすらみないで、その針を指で掴んでいた。

「悪いけど…一般の人間レベルで考えないでくれるかしら？私の事…ねえ、工藤新一君？」

「
う
! ?
」

17 違和感の結末

ただの高校生では無かった。

圧倒的な力で、一方的に大の大人を殺す事が出来る殺人者――

そして、後方から発せられた麻醉銃の針を、振り返りもせずには掴み取る事が出来る、信じられないような感覚の持ち主――

そして、何故かコナンの正体が工藤新一である事を知っている、謎の女性。

論理的な思考では、考えられないようなその能力に、コナンは絶句するしかなかった。

「中は…へボ探偵一人みたいね。」

コナンは構える。もう何も言わない。

「大丈夫よ。誰も殺さないから…それじゃあ、さよなら…楽しかったわよ？高校生探偵、工藤新一君…また会えるのを楽しみにしてるわ…」

すると、一気に朋美は飛び上がって、窓を割って倉庫の中へと飛び込んだ。

中で一人、現場をうろついていた小五郎。

そして、朋美はその小五郎を、力強く蹴り飛ばす。

小五郎は倉庫の外へと飛ばされていた。

「ぐっ…おい！何をするつもりだ！？」

「うふっ…大丈夫。誰も死なないわ…私を除いてね。」

すると、その少女はパチンと指を鳴らした…

「ぐっ…！」

次の瞬間、とてつもない爆炎で、倉庫の中が包まれていた…

「なっ…」

小五郎は近寄ろうとするが、目暮に止められる。

「ダメだ！とにかく、消火してから……」

どんどんと火は強くなっていく―二人の男と、少女を巻き込んで…

~~~~~

数日後―

「それで…その女性は偽名だったのね？」

「ああ…結局、誰かも分からねえみたいだ…にしても、あいつは…」

「そうでしょうね。多分、高校生でもないでしょうけど？……あら…」

志保は、ソファに座って俯いているコナンに気付く。

「大丈夫かしら…江戸川君…やっぱり、子供に見せる物じゃないわよね…」

「かもな。でもこれから家に置いてく訳にもいかねえだろ…」

(…あの女性…一体…何者…？それに…死んで…ない？)  
『さよなら…楽しかったわよ？高校生探偵、工藤新一君…また会えるのを楽しみにしてるわ…』

その言葉だけが、コナンの頭に引っ掛かっていた。

~~~~~

ブルルルル…

「ジン？終わったわよ…ええ。ええ…大丈夫よ。ちゃんと3億円、確保しておいたわ…ええ。ええ…勿論。ちゃんと警察は私の遺体を見つけたつもりになっているはずだから…ええ。分かったわ。今から向かうわ…それじゃあ。」

ピッ…

（にしても…まさか、あの探偵が…幼児化してるなんて、ね……………）

…お姉ちゃん…大丈夫だよ？服もボロボロだけど…ちゃんと、あれだけは…守ったよ？
だから、安心して……ね。

大事な、大事な宝物は、ここにあるから…

17 違和感の結末（後書き）

ひとまず、謎だらけの蘭登場シリーズは終了です…

後々、分かってくると思いますので。

間章 1 揺れる黒の感情（前書き）

ジン視点。

間章1 揺れる黒の感情

「…殺す？」

「ああ―あの女…近い内にライの件で処分を下さねばと思っていたのだが…とはいえ、妹…シェリーがあまりにも貴重な存在だったからな…とにかく、殺して後は内密にしておく。シェリーが反抗したら、後はお前に任せる―引き取ってくれても構わない。命の恩人としてね。」

「……正気ですか？ボス……」

ジンは否定的だった。

「ふむ…まあ止むをえんだろう。勿論、君が齒向かうならば話は別だが…まあ、いい。とにかく妹はお前に任せる。姉は殺さざるを得ないがな。」

「―了解しました。」

ピッ…

「へっ…今更何を躊躇ってる…」

~~~~~

「どうしたんですか？」

「…五月蠅え。」

「だから—」

「五月蠅え！とっとと失せろ、このガキ！」

「……」

「だから、失せろって言うて—」

「……」

（なっ…こいつ、どうして…）

「どんなに誤魔化そうとしたって…凄く悲しそうな目、してる…どうしたんですか？本当に…」

~~~~~

はっ…結局、あれ以来…ずっとこうだ。

あいつだけには、勝てねえ。
戦闘でも 言葉でも
体でも、心でもな。

その姉を殺す？

確かに、その姉と俺の関係性は薄い。
躊躇いもなく、彼女の元までは行けるだろう。
だが―その後、止めを刺せるだろうか？

俺は、人を殺す時は基本的に何も考えない。
いや、考えれば失敗する可能性が発生する。 僅かでも情けを掛けれ

ば、その瞬間終わりだ。

―そして、何も考えないからこそ、一度の失敗もなくこの地位まで上がってこれたのだから。

どうする...？

間章2 この感情

~~~~~  
「どうしたんですか？」

「…五月蠅え。」

「だから―」

「五月蠅え！とっとと失せろ、このガキ！」

「……」

「だから、失せろって言うて―」

「……」

（なっ…こいつ、どうして…）

「どんなに誤魔化そうとしたって…凄く悲しそうな目、してる…どうしたんですか？本当に…」

~~~~~

何があつたのかは、私も知らない。これだけはジンからも聞いていない。

ただ、一つだけ言える。本当のジンは、無慈悲で冷酷な人間なんかじゃない。感情を表に全く出さないだけで、心の中は本当は人の事を思いやる気持ちがある。

何度も、お姉ちゃんと私は守られてきた…ライ騒動の時も、ジンは必死に私の事を守ってくれたし、お姉ちゃんだって失敗しかけた作戦をフォローして、組織に処罰されるという危機を救ってくれた…

それに―ある晩、一人で泣いていた彼を見た事がある。机の上には、かつての彼の同僚の写真。

その時に分かった。人を殺す時だって、彼が本当に殺したいと思つて殺してる訳じゃないって。

それ以来、少し辛そうな表情を見せる時もあるけど…そんなに心配して無いな。私は…

…それと、この思い。一体何だろう…ジンに対する、何とも言えない、不思議な感情。

何か…感じてる。良く分からないんだけど…

―絶対にジンにも、幸せになってほしい。組織から、3人で抜け出

して…楽しく暮らしたい。全てを忘れて。

だから、私…もう3ヶ月。耐えるよ。私は…

18 コナンの病(1)

「大丈夫？江戸川君…」

「う、うん。大丈夫だよ…」

2月末日…俺も徐々に毛利家に慣れてきた頃だった。

時刻は8：15―そろそろ志保も行かなくては遅刻という時刻、そして俺に至っては始業10分前だと言うのに…未だに布団から出ていない。

当たり前だ。風邪を引いてしまったのだから。

「ちゃんと薬飲みなさい…」

「う、うん。ありがと…」

容態はさほど悪くは無い。熱も37度台後半だった。だが、志保は病気の人間には非常に過保護、心配性になる。いわゆる保健室の先生タイプだろうか。

「本当に一人で大丈夫？私がついてあげようか？」

「ううん。大丈夫だよ…それに、志保お姉ちゃんだって学校あるでしょ？」

「そうね…とりあえず、お父さんが仕事で出て行っちゃってるから…熱が上がってきたらすぐに私に電話して。いい？」

「う、うん。分かった…」

「それじゃあ…行って来るわね。」

「う、うん。行ってらっしゃーい…」

さてと…これからどうすっかな…

流石に推理小説を工藤邸に取りに行くと…後で志保にばれかねないし。

じゃあねえか…寝てよ…

~~~~~

「ただいま…大丈夫？江戸川君…」

ん…志保か。

「寝てたのね…大丈夫？」

「う、うん。」

まあ…大丈夫だな。大分楽になってきたみたいだし…

「とりあえず、もう少ししたら熱測るから。そのまま起きてなさいね。」

流石に起きてすぐには測れねえか。

ん…あれ？

何かおかしいような…

「はい…それじゃあ、測りましょうか。」  
「うん、うん。」

っ  
…

くそっ  
…

ボタン  
...

意識が  
...

「江戸川君!!!!!!」

## 18 コナンの病(1)(後書き)

コナン、容態悪化の原因は...？

## 19 コナンの病(2)

「っ……もつと私がしっかりしてれば……」

~~~~~

「大丈夫！？江戸川君……」

「う、うん。平気だよ。少し目眩がしただけ……っ」

「ちょっ……凄い熱じゃない！大丈夫なわけ無いわ……とりあえず、寝てて。」

~~~~~

そして、測ってみれば39・2度。相当な高熱だった。

志保は後悔した。今のコナンの様子からすればインフルエンザか……

「……とりあえず、病院連れて行かないと……保険証……どうせ博士、持つて無いでしょうし……」

と言いながらも、一応電話を掛けてみる。僅かなその可能性に掛けてみる。

プルルル

「博士？ちょっと江戸川君が大変で……ええ、ええ……保険証何ただけど……ええ、ええ。分かったわ。それじゃ。」

ガチャン

（やっぱり…持ってなかったわね。）

志保は知らないので仕方ない。コナンには保険証があるはずがない…戸籍すら無いのだから。

「とりあえず…様子を見て、それでも熱が下がらなかったら…病院に連れて行くしかないわね。」

一人で呟いて、一人で頷いた志保は、父へと連絡を急いだ…  
—しかし、それでもコナンの容態は悪化する一方—

~~~~~

「……どうだ、志保？」

こういう事についても、やはり志保の方が知識量が多い…父親として、やや情けなさを痛感しながらも志保に聞く。

「ダメね…今、39.9度…本当に、一気に熱が上がっちゃって…やっぱりインフルエンザかしら…」

「とりあえず、病院に連れて行こう…このまま放っておいても危ない。」

「そうね―最悪の場合、42度まで上がったら終わりだから…」

志保が、ぼそつと呟く。

「終わりって…」

「人間の体内のたんぱく質が固まる大体の温度よ―絶対に、その前で食い止めないと…」

19 コナンの病(2) (後書き)

話が重くなってきました…

20 コナンの病(3)

「熱が下がらない？」

鎮熱剤がまるで効かない、と医師は説明した。2時間ほど前から、コナンの熱は40度の辺りをうろついているらしい。何故、ここまでコナンの容態が悪化したのだろうか？

その理由が推定できるのは、今コナンの正体を知っている阿笠、有希子、優作、そして朋子（偽名）の4人だけだ。

そして、その原因は志保のある行動にあるのだが…コナンの正体を知らない彼女を責めるわけにもいかない。

そう思った阿笠に出来るのは、コナンが何とか無事である事を祈る事だけだった。

「どう…お父さん？」

「ダメだな…熱はさほど変化が無いとは言っても、表情が徐々に苦しそうになって来てる…」

(っ…)

志保は自分の爪を噛んだ。自分の行動に、何か問題があったのかと思っていたのだ。

そんな志保を思いやってか、小五郎と阿笠が言葉をかける。

「志保君…今、後悔しても仕方ないじやろう。」

「ああ…とにかく、このガキが回復するのをちゃんと見守ってやるのが、今お前に出来る事だろう？」

「…そうね。」

「ぐああ…」

コナンが、悲鳴を上げる。

「おいおい！やばいんじゃないか！？」

「うわああああ！！！！！！」

~~~~~

3分ほどで、その悲鳴は鳴り止んだ。  
次に測った時は熱は何故か38度台まで落ちていた。

「ふう…ひやひやさやがる。」

「まあしかし…このまま熱が落ちていくといいんじゃないか…」

「そんなに甘くは行かないかもしれないわね…」

「「え？」」

志保が、低い声で話し始める。

「今、思い返してみればあまりにも熱の上がり方が急激過ぎたのよ。」

「あまりにも？」

「ええ…私が帰って来た時、この子の表情からして熱は37度台程度だったはず…なのに、次に私が着替えて戻って、測ろうとしたら…この子が倒れたの。そして39.2度…という事は、僅か数分の間に1.5度程度上がった事になるわ。いくらなんでもおかしすぎる…そう、何かがおかしいのよ…ねえ、博士。」

いきなり、志保は博士に聞く。

「な、何じゃ？」

「あの子の親御さんから、何か聞いてない？この子の体質の事とか、何か医師に伝えた方がいい事とか…」

## 21 コナンの病(4)

「あの子の親御さんから、何か聞いてない？この子の体質の事とか、何か医師に伝えた方がいい事とか…」

博士は、勿論この質問に答えるわけにはいかなかった。そう、それこそが朝志保が与えた風邪薬が効かずに、逆に熱を跳ね上げさせる効果を与えた原因だと推定されるからだ。勿論、志保も薄々、使用した風邪薬に何かしら問題があると分かっていた。だからこそ、この質問をした。

「さあ…特に何も聞いておらんが…」  
「…そう…」

志保は、悲痛そうな表情を見せる。

そうこうしているうちに、再びコナンの熱は上がり始めていた…

~~~~~

「おい、志保…お前、そろそろ帰らねえと…」

腕時計を見て、小五郎が言う。既に9時を回っていた。

「そうね…でも、江戸川君が…もう少しなら大丈夫…」

「なら、わしがちゃんと見ておこう…小五郎君も、もう帰ったらどうかね？」

「それじゃあ…任せます。」

「……そうね。博士なら。」

志保と小五郎は頷いて、部屋を後にした。

「……大丈夫かの。」

阿笠も、その場で小さく呟いた。

~~~~~

「新一！」

志保か……？

「しっかりして！新一！！」

しっかりしてって…？

俺は、ここに…立ってるじゃねえか。普通に…

「新一！お願い…起きてよ！！新一！！」

だから、起きてるって…

「新……」

な、何で……何でお前、さっきからずっと叫んで……

あれ……

消えた……？

「志保！」

居ない。

「おーい！！！」

居ない。

「誰か！誰か居ないのか！」

居ない。

「おーい！！！」

誰も…いねえだと!?

さっきまで、そこに志保がいたし…

普通に、周りをいろんな人が歩いてたじゃねえか…

どういう事だよ…

なっ…

「フン、工藤新一…まだ生きていたとは、な。」

黒ずくめの…男！

「  
テメエ…」

ぐっ  
…

くそっ…体が動かねえ…

「さてと…では、今度こそ、死んでもらおうか。」

くそっ  
…

何で…

「ん？あれは…お前の親友か？」

志保！そこか！？

来るな！志保！

「新一！」

来るなって言ってるだろ！！

「フン…こいつから始末してやるっ…」

来るんじゃないええ！

くそっ…声が出ねえ！

志保！来るな！志保！

パ  
ア  
ン

あ  
…

うわああああああああああああああ

「はっ  
…」

~~~~~

（くそっ…とんでもねえ夢見ちまった…ってあれ？）「ここは…」
「おお！新一！やっと目を覚ましたか…」

コナンが、ふと辺りを見渡すと…病室だった。

「あれ…俺、あの後…」

目眩がした後に、志保に言われて寝てから、コナンの記憶は飛んでいた。

「ずっと寝てたのか…俺。」

「ああ…さっきは凄まじく魔されておったが…とりあえず、一安心じゃな。熱も下がつとるようじゃし…」

そう言いながら、博士はコナンに体温計を見せる。

「36度…か。」

「ああ…しかし、新一。後で志保君には感謝するんじゃないぞ?」

「え?」

「わしが帰るように言った後に、1時頃にもう一度やって来てな…丁度、わしが早くも寝かけてた時じゃった…『もう仮眠は取ったから、後は私が付く』と言って…」

ガチャ

「博士!?!江戸川君は…はっ…良かった…」

扉を開けるなり、志保は一気にコナンの元へ駆け寄り、強く抱きしめた。

「大丈夫…？江戸川君…」

「う、うん…」

そして、志保はしばらくずっと、コナンの事を抱きしめ続けていた。
（こりゃ、正体バレたら…殺されるな…って！ちよっと待て、今日、
志保は学校じゃ…）

「ね、ねえ。志保お姉ちゃん—」

「何？まさか…『学校行かなくていいの？』じゃないでしょうね？」

いきなり志保が表情を変える。

「べ、別にそうじゃなくて…」

呆れたように、志保は肩をすくめる。

「まあ、いいわ…今日、学校がない事に気がついたのは家に帰って、
すぐだったんだけど…お父さんが寝るようになってしつこいから…3
時間だけ寝て、こっそりと抜け出してここまで来たの…」

「へ、へえ…そうなんだ。」

返事をしながら、コナンはベッドを下りる。

「お父さんには『宿題があったから、もう学校に行きました』って
伝えておいたわ…」

「へ、へえ…」

と、また微妙な返事をコナンがした所で、志保がよろけた。

「し、志保君！」

「…ちよつと、無理し過ぎたかしら…」

すると、志保はそのままベッドに倒れこむようにして、横になつてしまった。

「はあ…まあ仕方ないかのう。あの後、本当に大変じゃったみたいし…」

「え？」

「…わしと志保君が交代した時から、新一はずっと魘されておつたらしいんじゃない…1時頃から、付きっ切りで、志保君は面倒を見ておつたようじゃし…41度台に熱が達した瞬間もあつたようじゃぞ？それに、志保君が新一の元を離れたのは、さっきトイレに行った一回きり…とにかく、後で礼を言っておく…」

「あ、ああ…わーってるよ…それより、今何時だ？」

阿笠は、腕時計を見ている。

「11時じゃな。」

「そつか…とりあえず、志保はこのまま寝てるだろうし…昼飯までは、ゆっくりしてつか…」（にしても…10時間もついててくれたのか……）

コナンの表情には、元気が戻っていた。

21 コナンの病(4)(後書き)

最初の部分の補足を見ると、コナンの体にはAPT-X4869の影響があつて普通の薬品は効かないという事です。

熱が跳ね上がったのもそれが原因です。

間章3 潜入捜査

「潜入…捜査？」

「そうだ…蘭ちゃん。」

シェリーの目の前には、分厚い書類が1つあった。
そして、ピスコがそれを説明していた。

「私が君のご両親と知り合いだったという事は知っているだろう？
そのご両親が開発していた、APTX4869の試作品を、私の知り合いが動物実験で試してみたらしい…すると、一体のラットが―
―なるほど、幼児化したってわけね。」

ピスコは驚く。

「おお！知っておったのか…」

「すると…潜入先は、もしかして…」

「そうだ―今日を以って、帝丹高校2年生として転入してもらいたい…既に、あの方には許可を取ってある。捜査対象は勿論…工藤新一。引き受けてくれるかね？」

勿論、シェリーは頷いた。

「勿論OKよ。」（そう、後3ヶ月間は…）

「そうそう、君はそういえばその学校の生徒の一人と面識があると

聞いたが…」

「ああ。志保さんね。でも大丈夫よ。あの時は変装で行ってたから、流石にばれないと思うわ。」

「そうか…とにかく、頼んだぞ。蘭ちゃん。」

シェリーには、ピスコの意図は読み取れた。『ジンの失敗を証明し、株をまた上げる』事にあるのだ。

あの方の信頼は、最近ベルモットが大きくなっている一方、ピスコの信頼は少しずつ落ち始めている。

だからこそ、ここで回復をしておきたいという所なのだろう。

だが、そんな事をさせるつもりは、シェリーには毛頭無かった。

普通に帝丹高校で3ヶ月過ごし、見つからなかった事にして、ジンと、姉と一緒に組織を抜ける事に決めていたのだから。

しかし、この3時間後に悲劇が起きていたとは、シェリーには知る余地も無かったのである。

間章 4 狙撃

もう、殺すしかなくなっていた。

「……来ちまったか。とうとう……」

裏路地に潜むジン。道を挟んで、反対側には組織の監視付きながらも、普通に親友達と会話し、ショッピングに出かけている明美…

その距離、約80mを切る。ジンならば、軽々と撃てる距離だ。

組織に命じられて、この日に明美を殺す事になったジン…

誤魔化す事は不可能だ。明美の監視をしている黒ずくめの男達は、ジンが撃たなかった場合、自ら止めを刺した上で、ジンの失敗を報告するのだろつ。

ゆつくりと、いつものようにライフルに手を掛ける。しかし、手馴れているはずが、思うように掴めない。

「クソツ…」

それが、ますますジンを苛立たせる。

だが、その時ジンは携帯からメールを一通送信した…

それで落ち着く事が出来たのか、何とか、構えるとジンは静かに一呼吸置いた。

「あばよ……」

パン…

~~~~~

頭部を丁寧に打ち抜かれた明美は、左手で開いていた携帯電話をすぐに落としてしまう。

その携帯電話を、もう一撃撃って、ジンは破壊した。

ブルルル

「……はい。」

「良くやった…お疲れ様だったな。それと、携帯電話は破壊しただろうな？」

「ええ。勿論…」

「よし…それでは、後でまた来てくれたまえ。」

「…はい。」

ピッ

その携帯を、ジンは乱暴に地面に叩きつけた。

「クソがああああ！！！！！」

叫び声が、住宅街に響き渡る…

しかし、同刻—付近で、もう一人の少年が、嘆いていた事にはジンは気付かなかった。

## 間章4 狙撃（後書き）

このもう一人の少年とは…？

## 22 西の探偵と…その姉？

3月―いよいよ、春を迎えようというこの季節―

しかし、探偵事務所には春<sup>依頼人</sup>なんて来る気配すらない。  
代わりにやって来たのは…変な来客だった。

「工藤を、出せ！」

~~~~~

ピンポン…

「はい…」
ガチャ

志保が扉を開けると…
そこには、野球帽を被った、色黒の男が…

「おい、姉ちゃん。」

「…え？」

「工藤を出せ。」

「…は？」

「もう知ってるんや…あんたが、工藤の女っちゅう事はな。」

いきなりその男は、とんでもない言葉を志保にぶちかました。
しかし、それでも相変わらずのポーカーフェイスを志保は崩さない。

「何処から手に入れたのよ…そんな情報。」

「鈴木っちゅう姉ちゃんからや。工藤のいる高校の奴に当たってみたら、『毛利探偵事務所と妻と同棲中』言ってたで？」

志保は呆れた。と同時に、後々園子にはお仕置きが必要だとも思った。

「あのねえ…同棲なんて嘘に決まってるじゃない。」

「誤魔化したってあかん…とにかく、早よ工藤を―」

「それに、あなたには言われたくないわね。高校生探偵服部平次君と、そのお連れ…いえ、恋人と言った方がいいかしら？」

「なっ…」

「ほら、早く上がってきなさいよ…いるんでしょう？そこに…」

事務所の階段の影に隠れていた女性が、驚いた様子で階段を上がってくる。

「和葉！お前、顔出したな！？」

「な、なわけないやん！ずっと、見えない所に隠れてたんやから…」

「そうね。確かに見えなかったけど…一度だけ、様子を見ようか見まいか迷っていた時に、少しだけ足が見えた…って所かしら？」

和葉も絶句した。あまりにも観察力が凄すぎる…

「ちょ待て。やったら、どうして俺の名前が…」

その質問にも、志保はあつさりと答えた。

「礼儀をわきまえない辺りを考えると…高校生よね。そして新一を探してて、わざわざ先にそんな変な情報まで仕入れて来てる…そして色黒で関西弁と来たら…最近、結構関西の方では有名になってる高校生探偵君しか有り得ない、って思っただけよ。」

平次は感服する。と同時に…

「でも、やつぱりあんた、工藤の女やな？」

「え、な、何を…」

「ここまでの推理力…あの工藤の女やったら十分に考えられる…」

流石の志保も、表情が崩れる。

「ちょっ！そんな…」

「あっ…顔赤くなってる！」

和葉も追い討ちをかけ…

「おい、お前ら…」

「「「え?」「」」

「玄・関・前・で・そ・ん・な・下・ら・な・い・話・を・す・る・な・あ・あ・あ・!・!・!・」

小五郎の声は、帰り道の途中のコナンにまで聞こえていたとか…

~~~~~

「それで、服部君は新一を探しに来たってわけね。」

「ああ…そうや。『東の工藤』が、どれほどの実力か、どんな奴かを見に行く為に、な。」

すると、志保はもう一つ質問を投げかける。

「ねえ、じゃあどうして遠山さんを連れて来たのかしら？」

「あ、いや—」

「ちゃうちゃう！うちが付いて来ただけやって。平次のお姉さん役として、な。」

「なっ…おい！和葉！」

「へえ…そうだったの…てっきりもう良い関係なんだと思ってたんだけど…」

志保はいたずらっぽい笑みを浮かべる。

ピンポン…

「ん？誰や…」

「帰って来たのよ。あの子が。」

「あの子…？」

「ま、まさか—工藤！？」

ガチャ

「ただいまー…あれ？」

帰って来たのは、工藤新一にやや似てるような…小学生。

## 23 銃声

「ただいまー…あれ？」

扉を開けた途端に飛び込んできたのは…3人の高校生が、テーブルを挟んで向かい合っている姿。

「志保お姉ちゃん…？」

「ああ、お帰りなさい。江戸川君…」

「さつき、何だかおじさんの声がしたけど…どうかしたの？」

「別に大したことじゃないわ。とりあえず、さつさと手洗いなさい。」

志保は冷静に誤魔化する。

「おお、ボウズ。お前がコナンっちゅうこの家の居候やな。わいの名前は服部平次や。まあ、よろしく頼むで。」

(…平次！居候なんて言葉…1年生には分からないんとちゃう？)

「あ、うちは遠山和葉。平次のお姉さん役や。よろしゅう。」

「う、うん。よろしく…」

とコナンが言いかけた時には、もう二人による漫才は始まっていたのである。

「やから、何度も言ってるやろ！お前にそない役割、任せられつかい！」

「何言うてんの！？無鉄砲なあんたが、まだ死んでないのは、うちのお陰やんか！」

「…仲良いんだね。二人とも。」

「違うわ。江戸川君…二人は、将来漫才コンビ志望なのよ。このぐらいは出来て当然―」

「「漫才コンビやない!!」」

「ほらね。」

にこつと笑って、志保はコナンの方を向く。

（ははっ…息ぴったりじゃねえか。）「ね、ねえ。平次お兄ちゃん？」

「お、何やボウズ。」

「えっと…ここに、何しに来たの？」

「ああ…それはな。工藤新一っちゅう高校生探偵探しててな…」

（俺じゃねえかよ!!!!）

心の中で、大きくコナンは叫ぶ。

「そんで、ここまで来たんやけど…手掛りは0。まあ、一から調べなおしやな…こりゃ。」

「でも、平次。折角東京まで来たんやから…どっか寄ってかへん？」

「うーん…まあ、ええやろ。とりあえず…姉ちゃん。この近くで、

何か有名な所とかあらへんか？」

「そうね…シヨッピングくらいなら、米花百貨店とか―」

パン…

「銃声！？」

平次と、コナンの声が重なった。  
と同時に二人は走り出す。

「ちよっ…遠山さん！追うわよ！」  
「そ、そやな。」

しかし、志保は事務所を飛び出ようとして、反転する。

「お父さん―あ、いいわ。やっぱり…」  
が、すぐに再び走り出した。

よって、この部屋に取り残されたのは、酔い潰れ始めた中年オヤジ  
一名である。

## 24 こいつが、あいつなら

探偵事務所の階段を下りて、右を向いたコナンと平次の目に入ったのは…

「……………おいっ！……………」

「どう？平次兄ちゃん…」

「…ダメや。もう亡くなってる…」

コナンもくそっ、と舌打ちする。

「とりあえず、警察と救急車や。おい！ボウズ、頼めるか？」  
「うん。分かってる…」

すると、コナンは携帯電話を取り出して、電話した。

~~~~~

「いやー！噂には聞いていたよ…西の高校生探偵服部平次君か…つと！それより、志保君まさか―」

しかし、言葉が続かなくても志保は答えを返す。

「大丈夫…お父さんは、飲んでますよ。使い物にならないので放置してきましたけど…」

目暮は胸をなで下ろす。

「そうかそうか。まあ、前はまぐれだろうし…やはり、君の方が役に立ちそうだな。」

「…なんや。姉ちゃん、やっぱり推理出来るんかいな？」

「かじってるって域にも達しないわよ…新一の助手なんて、なりたくもないわね。」

「へー…まあ、あんたには審判してもらおうか。」

「…審判？」

「工藤と、どっちが上か、な。」

「……帰るわ。私。」

すると、本気で志保はコナンを掴み上げて帰ろうとする。

「わー！待て！」

すかさず、平次は呼び止める。

「え？」

「とりあえず、この子の面倒は和葉が見るから…手伝ってくれへんか？」

「…嫌よ。帰るわ。」

「やったら！この子だけでも構へんから…和葉、結構大阪について詳しく知ってるし…なんやったら、あんたも聞いたらどうや？審判の話は無しでええから…」

「…何で私を呼び止めるのか、知った事じゃないけど…まあ、いいわ。やる事も無いし…」

志保は、コナンを下ろして、戻ってきた。

そして、平次は心の中で呟く。

（そう…こいつが、あいつなら…あいつなら…黙ってはいないはずや。）

24 こいつが、あいつなら（後書き）

…平次の目論見は？

25 犯行現場

「拳銃で頭部を一発、ほぼ即死…か。」

「はい…犯人は、凶器の拳銃と、コート、手袋などをここに脱ぎ捨てていつています…このコートから硝煙反応が出れば、ほぼ確実にコートの所有者が、犯人だという事でしょう。」

「そうか…しかし、まず取り調べるのが女子大生とはな…」

そして、被害者は教授の氷室雅彦（33）。第一発見者はその大学の、生徒である3人。

「取り敢えず拳銃とコート、手袋を鑑識に回せ…まあ、手袋は指紋は残っていないだろうがな。」

「はっ！」

「さてと…」

「なあ、ボウズ…何かおかしくあらへんか？」

「ああ…確かに。このコートが…え？」

そう言った後に、いきなりコナンは子供へとスイッチを切り替えた。
「でも、僕やつぱり良くわかんないや〜！」

（……）

（やつべー！あんまりでしゃばりすぎると志保にも、この探偵にもば

れちまうぜ…」「ねえ、それより平次お兄ちゃん。」

「何や？ボウズ…」

「この拳銃の名前、何て言うの？」

「ああ、これは―」

しかし、コナンの質問に平次が答える前に、志保が素早く答えてしまふ。

「M360J…M360の日本警察向け特注モデルのリボルバー拳銃ね。それにしても…これを持つてゐる事は…警察の関係者で、これを盗られたか、あるいはその3人中、若しくはその両親とかに警察関係者がいるか…そうよね？服部君？」

平次は少し顔をゆがめたが、「ああ。」と返事をした。

目暮警部は、「相変わらず、よく知っておるな」と一言。

コナンは、いつもの表情のまま、「志保お姉ちゃん、凄いね！」と無邪気に言う。

そして一番啞然としているのは和葉だった。

~~~~~

「まずは…綾さん。ここに来ていた理由は？」

「わ、私達、さっき米花百貨店に寄ってきたばかりで…それで、教授を見つけたんで、呼びに行こうと近寄ったら…いきなり、教授が撃たれて…」

今にも、高嶺は泣きそうな表情を見せる。

「それでは…撃たれた時、あなた達が犯行現場から離れていて、拳銃を所持していなかったというアリバイは？」

「―アリバイなら、私達3人の間ではダメって事ですよね？」

広田が、目暮に尋ねる。

「あ、ああ。そうだな…」

「それじゃあ…美歩。確か、私達が先に教授に気付いた時にまだその店の中にいたでしょ？その人が見てないかしら…」

「あつ…多分見てると思います。」

榊が大きく頷いた。

「ふむ…そうか。それじゃあ、あの店の店員に聞いてみるとするか…」

~~~~~

和葉が、平次の元に近付いて来た。

「なあ、平次？」

「何や、和葉？」

「あの宮野さん…一体何者なん？拳銃の事とか、よう知ってるみたいやし…」

平次は手を上に上げる。

「さあな。でも、何かの拳銃マニアなんとちゃうか？まあ、そんな事より…今は事件や。事件。」

「ああ…あのコートの謎を解かねえとな…」

「はあ…もうええわ。宮野さんに聞いてくるわ。」

「お、おい！ちよ待て！和葉！」

「なあ…宮野、さん？」

言いづらそうな和葉を見て、志保は小さな声で言った。

「別に『志保』でも構わないわ…そうしたら私も『和葉』でいいかしら？」

和葉は呼吸を整えて、再び言う。

「ええうちもそれで…じゃあ、志保。どうしてさっき、あんなに拳銃の事知ってたん？」

25 犯行現場（後書き）

今回は新一と志保の思い出の回です。お楽しみに。

やっぱり志保と和葉ぐらいは名前で呼び合ってもらった方がいいですね。

間章 5 記憶の中の二人（1）（前書き）

志保の過去がメインです。

間章5 記憶の中の二人(1)

「…物心付いたら、一直線だったわ。まあ、もうそんな事知ろうとも思わないけど…」

「え…?」

「まだ私が小学校3年生の時だったわ…」

『分かってるわよね? 今日、ファッション雑誌一冊…』

『へーへー…買えばいいんだろ買えば。』

「ストップ!」

和葉が止める。

「え?」

「なあ、何で小学校3年生がファッション雑誌を…?」

「別に…興味あったから。」

そっけなく答える志保。

「ふーん…」

「で、続きいかしら?」

「あ、ええよ。」

「丁度その時、毎週水曜日の午後7時から2時間放送の推理ドラマがあつたのよ…だから、先に犯人を推理して新一が正解したら私が1000円程度の推理小説を一冊、私が正解したら新一が500円程度のファッション雑誌を一冊買う、って約束したのよ。」
しかし、和葉が気付く。

「え？それやったら、明らかに志保不利やん…」

「そこがポイントなのよ。最初は二冊買ってもらうつもりだったんだけど、11連勝した所で1冊でOKにしたわ…まあ、そもそも彼が企画した勝負だし、途中からは貰わなくなっただけだね。」

（11連勝…）「志保、凄いやね。」

ゾツとした。あの高校生探偵に、11連勝。

「別に…彼、小学校3年生の時はそんなに凄くなかったし？…まあ、唯一喫した1敗が、私を変えてしまったんだけどね。」

「1敗？」

「ええ。42勝1敗よ。確かあれは32戦目…」

~~~~~

ガチャ

「おーい、志保！来たぞ！」

「はいはい、開いてるわよ…」

冬休みに差し掛かっていた為、新一は志保の家に泊まりに来ていた。

「で、今日って2時間半だろ？」

「ええ、そうよ…それより、500円持ってきた？」

定番の一言を志保は新一に浴びせる。

「うつせーな…今日こそ勝ってやる。覚悟しとけ！」

「はいはい…」

7時からドラマは始まった。

「お前達…また勝負か？」

小五郎が呆れたように言葉をかけてきた。

「あら、お父さん。お父さんも参加する？」

「遠慮しておきます…」

勿論、勘弁である。負ける可能性の方が遥かに高い。

「にしても…今日はやけに設定に凝ってるわね。」

「そうだな……ん……あ！分かった！」

（えっ！？）

「へっ……犯人は……」

~~~~~

「それで、彼見事に言い当てた上、証拠も完璧。この時、彼が目をつけたのが拳銃の型だったのよ……」

和葉も、理解した。

「それやったら……まさか……」

「ええ。二度とあんな負け方をしなくなかったから……まあ、本当にあの頃は幼稚だったって今頃思ってるけど。後はひたすらインターネットで調べまくったわ。そのお陰で、40戦目は勝てただけどもね。」

（なんや……そんな理由やったんか……）

「まあ……事件現場で、見慣れるようになってからは怖くなって調べた事は無いけど。とりあえず、新一にこの勝負の話、聞いちゃダ

メよ。多分ショックで寝込んでるから…特に最終戦についてはトラウマね。」

「へえ…」(志保…怖いなあ…)

少し、志保に恐怖心を抱いた和葉であった。

と同時に、僅かに尊敬したいような存在であるとも感じた。

「でも、それやったら新一君は志保が育てた…ちゅう事になるんじゃないの?」

「別に…そんなつもりは無いけど。でも小6の時はほぼ互角だったわね。中学生になってからはそんな勝負しなくなったわ。だって私勝てないもの。」

「でも、凄いなあ。うち、そんなに頭良くあらへんもん…」

「…代わりに私、それまで勉強以外してなかったから。」

「え…」

少し、志保の表情が暗くなる。

「どんどん彼に色々な事に付き合わされていったわ。親に何かと色々誘われても、ほとんど断ってばかり。気づいたら母親は別居…周りの遊びの誘いも、レベルが低いつて断ってただただ勉強しかやってなかった私に、小学校3年生になった時から彼は色々話を持ちかけて来たわ。断っても、強制的に連行していった…そう。推理対決だつて。」

~~~~~

「お前、凄えな。テスト全部満点なんて…」

「…あんなつまらない物…それに、あなただってほとんど満点じゃない。流石は推理小説家、工藤優作さんの息子って所かしら？」

「（本当に…いつもつまねえ奴…お、そうだ！）なあ、今晚うち来ねえか？」

「え？」

「面白い事やつからよ…」

~~~~~

「まあ、今人並みに人づきあいが出来てるのは彼のお陰ね。そういう意味では感謝してるんだけど…本当に、どこをほつつき歩いてるのかしら…」

寂しげに、語る志保。

しかし、その横でコナンが悲しい表情を浮かべていた事には、誰も気づかなかった。

間章5 記憶の中の二人(1) (後書き)

こついう関係だったらいいな、って妄想。

26 眠りの…(前)

「警部！」

「どうした、高木？」

「遺体の、足元からですね…硝煙反応が…」

「何！？すると犯人は…まさか…」

「ああ—恐らく、目の前で銃弾を放ったんやろな…やけど、この3人はちゃうって事やな…」

店員の証言で、3人が怪しげな態度を取る様子は無かったと言う。そして、犯行現場までの距離は3人の先頭に立っていた高嶺が150m、並んでいた広田も同程度、そしてまだその時、代金の支払いに手間取って店の中にいた榊が250m。

一般的に、拳銃の最大射程距離は1000m程度ある。だが、対象を狙って撃つとなれば、どんなに腕が良くても50m〜60m程度が限界になる。

そう考えると、3人の犯行はかなり厳しい。

しかし、一つ平次にも引つ掛かる点があった。

「ん…おい、高嶺はん、ちよつとええか？」

「え…何か…？」

「ここからあそこまで大体150m…やのに、どうしてそんな簡単にあそこにいるのが教授だと分かったんやろか？」

「そ、それは…」

高嶺が戸惑う。

しかし、それを広田がカバーした。

「そうね。確かに不自然かもしれないわ…だけど、高嶺さん、視力非常に良いのよね…確か3・2だったかしら。まあ、そんなに無くても、あの特徴的な服は目に付くんじゃないかしら…それに、教授を呼びに行ったとは言ったけども、人違いだったかもしれないじゃない？…まあ、本当に教授だった事が非常にショックなんだけど…これでいいかしら？視力に疑いがあるなら、後で身体検査でもななりと。」

すらすらと答える広田に、どちらかというと平次が押され気味になる。

「あ、ああ。良く分かったで。」

「それで…高木。コートの硝煙反応はどうだった？」

「それが…反応は無いみたいですよ？」

「何い！？」

（…すると、このコート…犯人の物じゃない…っ！そうか…分かったぞ！！）

コナンはすつと笑みを浮かべる。
だが…流石にここで推理ショーを披露するわけにもいかない。
―それでは、どうするべきか？

（誰か眠らせつか…そうだ。志保…頼むぜ、女子高校生探偵、毛利志保ってな。）

ピシュ…

~~~~~

「ねえ、警部さん？さっさと教授について、私達に聞かないんですか？」

「あ、ああ…そうだな。それじゃあ、本庁へー」

「もう少し待ってくれるかしら……目暮警部。」

「なっ……」

「志保君！？まさか……」

「ええ。一応…閃いたわよ？ま、この高校生探偵君も、気付いてるみたいだけど…やや自身薄って所かしら？」

服部は、やや言葉を詰まらせる。

「あ、ああ…まあな。」

「それで、志保君。早速話してくれんかね…この事件の犯人は一体……」

「そうね…ところで、高木刑事…手袋の硝煙反応、出ませんでしたよね？」

いきなり、高木に志保は聞いた。

「え、ああ…まあ。」

「そして…その手袋…表側の指紋の確認取りました？」

「えっ…」

「いや、しかし…流石に表側に指紋をつけるなんて真似は…はっ！」  
「そう…そこが盲点だったのよ…恐らく、氷室さん自身の指紋が付いてるでしょうね…手袋を逆にはめたんだから。」

「待てよ…氷室さん自身、だと？」

「ええ…もう分かるんじゃないかしら…目暮警部。」

「ま、まさか…」

志保が暴き出した真実は――

「そうよ―これは、氷室さんの自殺…至って初歩的な、拳銃自殺。」  
「――！――！」

しかし、平次は驚かない…いや、驚くはずは無い。  
そして視線の先は、別の場所を捉えていた。

彼女の背後に潜む、一人の少年を――

## 27 眠りの…（後）

「嘘…本当に!？」

「ええ。でも…何故、あなたが驚く必要があるのかしらねえ…そう、彼を自殺へと追い込んだ広田雅美さん？」

「なっ…」

「「えっ!？」」

「ちよ、ちよつと待ってくれる?そもそも、彼が自殺だつて断定するのは早いんじゃないかしら?まず、彼が手袋をつけて自分の頭を撃ったなら…手袋がその手に残ってるんじゃないかしら?」

「あら?撃った後に、意識が朦朧としてる中で、放り捨てるのは可能じゃないかしら…最初からそう意識していれば、ね。」

「で、でも…それじゃあ、私が犯人だつていうのは?私じゃなかった、そんな事彼の知り合いなら誰だつて…」

「そうね。誰でも可能よ…でも、警部…何故、彼は財布を持っていなかったと思います?」

「財布…?」

広田が、とうとう青ざめた。

すぐにコートへと近寄り、中身を回収しようとするが―

「待て…警部はん。そのコートのフードの部分に不自然に空いた小さな穴…調べてみてくれへんか？」

そして、中から取り出されたのは…

「マサミデザイン…そういう事が…」

デザイン会社のロゴが入った、小さな紙。

「そう…これが彼のメッセージ。まあこれで確定ね。」

「…そうね。私が指示、脅迫したわ。彼の事を…警察に私が脅迫した事をばれないように自殺しなければ…家族の命は無い、ってね。」

静かな笑みを浮かべて、広田は認めた。

「ところで…あなた、どうして私と気付いたのかしら？その財布見なくても分かったんでしょ…？」

「そうね——番気に掛かったのはあなたの言葉…『特徴的な服』っていうのに引ッ掛かったのよ…意外と強いこの陽射しの中で、150mの距離をおいて彼の服のこの見えづらい白っぽい服が分かるかしらね？そして、あなたの立ち回り方…本当に、こういうのに慣れているって風よね…嘘の付き方も完璧。これまで、一体何人の人をこうして殺してきたのかしら？」

コナンは少し志保の声を低くして、広田に聞いた…

「…ふふっ…流石ね。そうよ。私はこれまで沢山の人を殺してきた…この二人はただの付き添いなんだけど。」

そして、少し間をおいて、言う。

「今回教授を殺したのはとある目的の為よ。私が所属している…そう…こういう手法で、ピンチまでもを切り抜け、決して正体が公に明かされる事が無い組織の為のね!!」

彼女は、隠しポケットから筒状の物体を取り出し、栓を外して、地面へと叩きつけた…

「閃光弾!?!」

## 28 絶対絶命江戸川コナン（前）（前書き）

ジンが射殺した明美。間章はジン視点でしたが、第三者視点で書きました。

## 28 絶対絶命江戸川コナン(前)

「どう…明美？大丈夫？」

「もう追っ手…来てないよね？」

「—ええ。もう、解いてOKよ。」

「「ふう…」」

三人は、綺麗に変装を解いた。

「にしても、ベル姉に頼んで良かったわね！」

偽名、高嶺が元気に言う。

「そうだね。でも、本当に快く承諾してくれるとは思わなかったけど…ところで、明美。これからどうする？」

偽名、榊が聞く。

「そうね…とりあえず、まさかあれが偽名だとは思ってないでしょ

うし？このまま普通にこの辺から立ち去りましょう？それで、報告しましょ。」

ブーブー…

「ねえ、バイブ鳴ってるの明美の携帯じゃない？」

「あつ、そうみたい…（カチャ）えーっと……ふふっ…」

「どうしたの明美？何か良い事でもあった？」

「そうね…嬉しい事があったわ…皆、今までありがとう。」

「「え？」」

次の瞬間、乾いた銃声音と共に――明美は崩れ落ちていた。

そして、男の叫び声で残りの二人も気付く――撃ったのはジンだ。

しかし、二人は逃げ出していた…この後、どうなるかが不安だったのだ…

そして、手遅れの警察達は――遅れる事30分で、到着。

明美は帰らぬ人となった…

――その表情は、一体何を悟ったのか、全く分からないまま。





「…にしても、後味悪い事件やなあ…」

~~~~~

ぶつぶつと、平次が呟いている。

コナンも向く方向は真下……

和葉とコナンと平次の三人は、歩いて毛利探偵事務所へと帰ろうと
していた…

が、ようやく和葉が気付く。

「あーっ！！志保、まだ現場にいるんとちゃう！？」

（やべっ！！忘れてた！！）

「あら、私がどうかした？」

志保が、後ろから声を掛ける。

驚いたのは―和葉とコナンだけ。

「わっ！志保、いつからそこにいたん？」

「いつから…って、さっき追いかけて来たばかりよ。ところで…江
戸川君。あなた一体何者？」

志保の声が、明らかに低くなる。

「え…」

コナンが徐々に硬直を始めた。

「…ただの小学1年生じゃない事はよくわかったわ。そう、信じら
れないくらいの推理能力―その阿笠博士の作った蝶ネクタイ型の変
声器で…私を眠らせて推理するなんて。」

「！」

28 絶対絶命江戸川コナン（前）（後書き）

...これは...

間章 6 5番目の選択肢（前書き）

第三者視点です。注意して下さい。

間章 6 5 番目の選択肢

「あなた、一体何者？」

何者

「何言ってるの……？僕は、ただの……子供だよ？」

その言葉には、力はもう無い。

志保も感づいている……ただ、確証が持てていないだけだ。

——もう、工藤新一＝江戸川コナンという等式は、志保の脳内で成り立ちかけていた。

そして、コナンもまた志保が感づいていると感づいている。

じゃあ、どうするべきなのだろうか？

次のような選択肢が、上げられるだろう。

？このまま「子供」である「江戸川コナン」を演じ続け、志保の質問にも全て「江戸川コナン」として答え、冷酷に接し続ける。

―危険であり、かつ厳しい選択だ。志保がもし、もうコナンを新一だとして疑ってないのならば…隠し続けるのは、無意味。ただ彼女を傷つけるだけ。

さらに、自ら墓穴を掘る可能性だって決して0とは言いつねないだろう。この時言った事を覚えられたら、後々志保に追い詰められる可能性だって高い…彼女の驚異的な記憶能力ならば、十分に有り得る事だ。

？全てを志保だけに明かし、周りへと広まらないように努める様言う。

―一見、正しい選択にも見える。確かに志保に言った所で、彼女ならばそれを秘密にしてくれるだろうし、大した影響も無いのではない…ように見える。

だが、これには大きな落とし穴がある。「志保と新一の関係」だ。万が一、その組織が「工藤新一が生きている」という事だけを感じいたとしたら…恐らく、その関係者を当たっていくだろう。その中に志保が含まれる可能性だって0ではない。

そうすれば、その接触時にばれる危険性がある。組織がどんな手を使ってくるかは分からない上、後先が不透明だ…そして、後に彼女が殺されるかもしれない。

他にも様々な方法で、彼らに伝わる可能性がある…志保に言うだけでも、その可能性は上昇を起こすのだ。

？阿笠博士の持つ、スピアの蝶ネクタイ型変声器を操って、志保に電話をかけさせる。

―しかし、もう二度は通用しないだろう。今回の件によって、変声器の正体を知ってしまった為に、志保ならば阿笠の電話が蝶ネクタ

イ型変声器による物だという事は、すぐに分かってしまう。

？平次に正体を明かし、誤魔化すのに協力してもらう。

―確かに、それもまたありかもしれない。だが、？同様の理由…巻き込む人間は少ない方がいいというのがある為に、あまり得策でもない。

…考えていけばざっと、こんな選択肢を挙げる事ができるだろう。だが、この男は数秒でそれらの選択肢を全て切り捨てて、5番目の選択肢を選んだ。

「ね、ねえ。志保お姉ちゃん？僕、ちよつと阿笠博士の家に行つて来る――！」

？その場から離れ、再度対策を立て直す。

―何も考えられなくなってしまった、コナンの編み出した答えだった。

微かに、運命が揺らぎ始めている。

29 絶体絶命江戸川コナン（後）（前書き）

自ら、コナンが平次に正体をバラします。

29 絶体絶命江戸川コナン（後）

「ちよっ！江戸川君…」

志保が追いかけようとするが、平次がそれを止めた。

「大丈夫や。わいが追いかけるから…和葉と一緒にゆっくり事務所
に帰ればええやろ。」

「でも…」

「ほな、和葉を頼んだで…アイツ、方向音痴やし。」

無理矢理平次は区切りをつけて、コナンを追いかけて行った。

「どないしたんやろ…平次…」

「……ねえ、服部君に聞いたけど…本当にあなた、方向音痴？」

「…まあ。」

「そう…」

一瞬、志保は疑った。平次がコナンと何か関わりがあるのではない
かという事。

その為に、適当な嘘について、志保を追いかけさせなかったのでは
ないかという事…

だが、嘘でもなかったしそんな事をわざわざする必要があるだろう
か？

（嘘じゃ…ないみたいね。まあ気にしてもしょうがない、か…どっ
ちにしても、後で新一を問い詰めればいいんだし…）

そう考え、平次の後を追わずに和葉とゆっくりと事務所へと戻って行った…

~~~~~

ガチャ

「ただ、いま…」

「ん？ああ、コナンか…」

途中で経路を変えて、一度事務所へと戻って来たコナン…平次がこっそりと尾行しているのに気が付き、撒いて来たのだ。

そして…小五郎は泥酔している。

（よしっ…これなら…）「それじゃあ、僕博士の家に行つて来るね  
！」

「お…」

と言いながら、台所の陰に隠れる…扉すら開けてないのに小五郎は  
気付かない。

すると、また一人…

ガチャ

「おーい…おっちゃん、コナン君は帰つて来てへんか？」  
撒いたはずの、色黒男が。

「ん…あー…あいつなら、博士の家に行つて…ヒック…」

勿論、すぐに大嘘だと分かってしまう。

「そうか。」

そして…

「見いつけた。」

「あ、平次お兄ちゃん…」

台所の陰から、コナンを摘みあげる…

「とりあえず、何とかこの絶体絶命の危機を乗り切らんな…」

「え？何が？」

「…おい、まさか工藤—あの姉ちゃんに正体、バレかけてる事、分かっ  
てないんか？」

平次は、コナンをゆっくりと下に降ろす。

「……え？」

あまりにも唐突すぎる質問。

だが、それ以上に平次が正体に気づいている事に、コナンは驚いた。――それと同時に、誤魔化さなくてはならない危機がさらに大きくなった事も。

「誤魔化そうとするんじゃないで。もしそうするなら……お前の努力は水の泡になると思った方がええ。」

「水の泡って……ゴホッ、ゴホッ……な、何が言いたいのか？」

子供の口調で誤魔化そうとするコナンを、平次は力強く睨みつけた。

「工藤。お前…何があるのかは知らんが、絶対に誤魔化さなアカン  
みたいやな？自分の正体を、周りの人間に…」

「……はは…そんな…何を言っているの？平次お兄ちゃ…」

コナンは崩れ落ちた。

そして、悟る。もう誤魔化しきれないと。

「知りたいか？」

「…は？」

そして、眼鏡を外し平次の方を逆に鋭く睨みつけ、強い口調で言った。

「真実を知れば、命を危険に晒すかもしれねえ…俺の周りの人間で無いとは言っても、有り得ない真実を知るんだからな」そして、それがバレれば周りの無関係の人間にも必ず被害が及ぶ…お前の両親、親友…勿論、和葉ちゃんもな。本当にそうなっちまってもいいのか

「？」

平次も、また覚悟を決める。

「ああ―協力するで。隠し通す事にな。」

~~~~~

「すると…その黒ずくめの男達に、小っこくされたっちゅう事やな？」

「ああ…にしてもお前、あれ演技だったのか？一瞬本当に志保よりも推理出来ねえのか、って思っちゃったぜ…」

「何やと！？この…って、そんな事を言ってる場合ぢやうやろ。」
「まあ、そうだな。」

事情を、包み隠さずこの男に話してやった。
もう仕方ない…

「それで…これから志保をどうするか…ゴホッ、ゴホッ…」
「何や、お前…風邪ひいたんか？」

そういえば、さっきから可笑しい。熱が出て、時折頭がふらつく…
この前の病気がぶり返したのだろうか？

「ほんなら、風邪によう効く薬…飲み物があるで？そこに…」

服部が指差す方向…紙に包まれた何かがある。まあ健康飲料か何か
だろ…

「本当か？って…そんな事してる場合じゃ…」
「ええからええから。ほんなら、お前はトイレに入つてればええや
ないか。後は上手く誤魔化しとくさかい、気にせんとき。」
（大丈夫か…こいつ…）「ああ…」

「ほい。」

しかし、この時こいつが渡したのは…

「おい！こら…これ酒じゃねえか！！」

「まあ、ええからええから。トイレに入るとき。」

「たく…こいつ…悪戯心旺盛な奴め…」

「絶対に声とか出したらあかんぞ？バレてもうたらお終いやからな

…」

「わーってるよ…オメーこそ変な事言っなよ？」

にしても…何だか変だぞ？

…あれだけの量で、いきなり酔う物なのか？

そんなに俺って…酒に弱いのか？まあ志保より弱い事は当たり前のようにわーってるけどよ…ぐっ…

ガタッ…

「おい、どないした工藤？」

ガチャ

「工藤…へえ…帰ってきてるのかしら、彼…」
「なっ…」

「平次！どついう事が説明せえ！」

何やってんだよこの色黒男！！

くそっ…やべえ…

このままじゃ…

耐えろ…変な悲鳴を上げたら…それこそやべえ！

ぐっ…

29 絶体絶命江戸川コナン（後）（後書き）

Next Conan's Hint!「工藤新一」

コ「次回、久々に工藤新一が…？」

志「戻ってこないわよ。だって…」

コ「ストップ！ストップ！！」

30 交わされた約束

「ねえ、服部君…その中にーいるのかしら？彼は…」

志保のポーカーフェイスからは、どこまで気づいてるかは分からない。だが、間違いなく「コナン」新一「はバレている…」

「し、知る訳ないやろ。」

「それじゃあ、さっきの『工藤』って何？」

「そ、それは…」

しかし、天は僅かに平次に味方する。

「これや、これ。」

中のページをペラペラとめくり、顔写真付きの記事を志保に見せる。

「平次、これ誰？」

横から和葉が入り込んできた。

「ああ、優作さんね…」

「え！？志保、知ってるん？」

「ええ。だって彼、新一のお父さんだもの…それで、これを見て何に驚いたの？」

「い、今な、優作さんの推理小説にはまってるんや…たまたま、あの高校生探偵と同じ名字やったからな、かなり驚いて…でも、父親やったんか。」

さも、初めて知ったかのようにふるまう平次…何とか誤魔化す事は出来た。

だが、危機が過ぎ去ったわけではない。

「まあ、いいわ…それより、江戸川君なの？このトイレに入ってるのって…」

志保がドアをコン、コンとノックする。

「江戸川君？」

「変ねえ…お父さんがあの体たらくだから、お客さんでもなさそうだし…」

志保はそう言いながらも、表情はもう確信しきっていた。

（くっ…アカン…）

「それじゃあ、中で江戸川君が寝てるのかもしれないし——開けてみ

ようかしら。」

ジャー…

志保が、鍵を外す用意をしようとしたその足を止め、反転する。

「あら…誰かしらね…」

（アホか、工藤！！お前…この状況で出てきたら…100%バレてまうやろが！！！！）

ガチャ

「っ」

「バーロオ…トイレぐらいゆっくりさせてくれたっていいだろ？」

目の前には、志保の推理通りならばこの世界に存在するはずのない人間が――

「新…」…？」

そして一番啞然としているのは…平次。

~~~~~

「志保、久しぶり。」

「久しぶりって…本当に、あなた…新一？」

驚きの色を全く隠せない志保。

「お前…もう俺の顔忘れちゃったのか？」

「ええ…そうね。どうでもいい事は忘れる主義だから。」

（デメエ…）「へーへー…相変わらず可愛くねえ奴。」

しかし、心の底では志保はほっとしていた。自分のおとぎ話のような信じられない―しかし、十分有り得る仮説が、成り立たなかった事に。

これまで何度も疑ってきた仮説が、成り立たなかった事に。

まず、正体を隠し通したいのならば今わざわざ戻るなんて危ない真似はしないはずだ。

「私がかかり疑っている時に戻る」という行為は有り得ない―そう、志保は考えた。

そして何より―もう、こうして戻って来たのに変な疑いをあまりにも酷いのではないか―

志保の正常な精神が、逆に真実への道を塞いでしまう事になるとは。

そして、一番驚いている平次。いきなり小学1年生から高校2年生の姿になったその探偵の姿に、驚くしかなかった。

（おい、工藤…一体何が…）「わっ！」

和葉にいきなり首元を引っ張られた平次は、いきなり素っ頓狂な声を上げる。

和葉の目的は…

（お邪魔虫は退散、退散！志保と新一君、ええ流れなんやから！ほら、行くで！）

（おいこら！和葉！！）

そのまま平次は和葉に連行されていった。

~~~~~

「ね、ねえ…新一？」

新一は何も言わない。私の次の一言を待っているらしい。

「…今、何してるの？」

「いや…厄介な事件に巻き込まれちゃって…毎日、日本中を巡ってる所だよ…今日は、たまたま帰ってきたんだぜ…」

言いたい。

「そう………」

言いたい。

今こそ、言いたい。

『新一は私の事、どう思ってるの？』

『好きだよ…私は。ずっと…ずっと…』

あの時は、あなたの命の危機だった。

だから、多分聞こえてなかったんだと思う。

だから、面と面で向き合って、今こそ言いたい。

しかし、それを私の心の中の何かが邪魔をする。喉をその言葉が通ってこない。

代わりに別の言葉を選び、時間を稼ぐ。

「厄介な事件…って事は、また行くの？」

「ああ…学校には休学にしてもらったよ…ごめん。いきなり行っちゃって…」

だが、その時間稼ぎは逆効果だった。

喉を、言いたくなかった言葉が通ってしまった。

「ふふっ…」

微笑する私。

「な、何が可笑しいんだよ。」

こう聞かれて、答えざるを得なくなる―喉を通った言葉は、口から発せられてしまった。

「いいじゃない。行きなさいよ…平成のシャーロック・ホームズさん…周りの目なんて気にしないで、全て事件を解決して見せなさいよ。あなたからして、それほどの大事件なら、解決したらマスコミが大騒ぎでしょうね……楽しみにしてるわ。あなたが戻って来て、いつものように推理してる姿をね。」

バカ…何言ってるのよ！

今それを言ったら、本当に新一、何処かへ…

きやつ…

「ありがとな…志保。」

「ちよつ…新一…」

~~~~~

（うわっ…大胆やな！…新一君…）

強く、新一は志保を抱きしめた。

志保が自分を待ち続けてくれる事。行って欲しくないと思っているのに、それに耐えて接して、さらに気遣ってくれる、その優しさを感じたから。

そして、その優しさを感じて思わず口から全ての真実を漏らしそうになってしまったから。

だから、強く抱きしめた。

「……わーってるよ……ちゃんと、全て解決して戻ってくつから……」  
暫く間を空けて、静かに言った。

死んでも戻ってくつから、待っていてくれ……いいか？

「……勿論よ。」

### 30 交わされた約束（後書き）

翌日、阿笠邸―

コナンは、探偵事務所を新一の姿で抜け出した後、博士の家に行き平次に正体をバラした事、志保にバレかけた時に元の姿に一度戻った事を伝え、その日は博士の家に泊まると志保に連絡し、次の日の朝、平次が一人で迎えに来た。

「しっかし…昨日は本当に、ようやったなお前…」

「うっせーな…」

「しかし、これで良かったじやろ。あれぐらいやつとかんと…多分、新一が元の姿に戻ったにも関わらず疑いを深めたと思うんじゃが？」

しかし、コナンは首を横に振った。

「バーロオ…んなわけねえだろ。もうとっくに大丈夫だっと思ってたからな。」

「「え（何やて）？」」

「あいつの眼だよ。ま、博士も、大阪の色黒探偵兄ちゃんには永遠に分らないと思うけどな。」

「何やと…ボウズ！」

「まあまあ…それより平次君。酒の名前は分かったかね？」

すると、平次が思い出したように手を叩く。

「ああ。工藤を元の姿に戻した不思議な酒やな…確か、名前はパイカルっちゅう中国酒やったで。」

「ふむ…すると、その酒の成分に、解毒剤となり得る物が含まれていそうじゃな…」

「そうか…」（一歩前進、か。）

小さくガッツポーズをコナンは手元で作った。

## 間章 7 組織の影

「おい…志保お。酒持ってきてくれ…」

「何言ってるの？何杯目よ一体…」

そう言いながらも、呆れて志保は台所へと向かう。

「何がいい？」

「そうだな…この前買った、パイカルってのがあるはずだけどよお…」

「…パイカル、パイカル…」

志保は隅々まで素早く探していく。

「無いわね。」

「本当か？じゃあウイスキーでもいいけどよお…早くしてくれえ！」

パン！

BB弾、炸裂。

「す、すいません。」

（にしても…さっき一度だけ来た園子に持っていかれたのかしら？博士の家に泊まってる江戸川君は流石に持ってかないでしょうし…

和葉と大阪の色黒探偵は関係ないでしょうし…)

~~~~~

隠密に彼の家の周りを搜索してたら…見ちゃったのよ。

工藤新一
彼が小さな姿に戻るのを…そして、名前は『江戸川コナン』。

彼の居候している『毛利探偵事務所』で、何か反応して彼の体を変異させた物を彼女の親友の姿に化けて探してみたら…少しだけ飲まれている、パイカルを見つけたってわけ。

さてと…これだけデータがあれば、少しずつピスコの方に流していけば、調査をしてないのではないかと怪しまれる事もないし、もう3ヶ月は安泰ね。

それにしても…興味深いわね…彼。

転入ついでに、少しお近づきになろうかしら…なんてね。

間章7 組織の影（後書き）

N e x t C o n a n ' s H i n t ! 「転校生」

コ「今回は帝丹高校に転校生！」

小林先生「転校生って変な子が多いのよね……」

コ「え？そうなの？」

小林先生（あなたよ。）「べ、別にそうとも限らないんだけど……」

3 1 二日間だけの転校生・1日目(1)

「初めまして。宮野蘭です。」

清楚で、とても顔立ちが良く、スタイルが優秀―そして

「何？あなた達…『こんな女より目つきが良い』とでも？」
誰もが惹かれる程の、優しそうな女性。

「宮野さんは…その席に。」
「あ、はい。」

そこが、志保の隣だった。

「よろしくお願いします。」

蘭はペコリと、志保に向けて小さくお辞儀をした。

「ええ、よろしく。」
ぶっきらぼうに返す…相変わらず、男子生徒の視線が気に入らないらしい。

（にしても…あんな美人が横に二人並ぶなんて…）
（あー！B組で良かった…）

すると、その様子を察したのか、担任も言葉を発する。

「さあさあ、男子生徒も毛利さんと宮野さんに見とれてるのはいい加減にして、出席取るわよ…阿部君…」

~~~~~

クラス内は、たちまち蘭の話題でもちきりになった。

実際に話しかけてみるととても話しやすく、志保ほどではないがとても頭も良い。

そしていつも笑顔で、天真爛漫な女性「男子生徒は大げさに「天使」とまで表現した。

たった1日で大人気の蘭。だが、対照的に…

「どうしたの、志保？さつきから少し元気がなさそうだけど…」  
園子も心配に掛ける程の、志保の元気の無さ。

「いいえ…別に。何でもないわ。」

すると、にやつと笑ってふざけたように園子は言う。

「もしかして…志保。宮野さんに嫉妬してるんじゃない？」

「馬鹿ね…そんな事するはずもないでしょう？彼女だって意識してるわけじゃないと思うし…でも、何だか気になるのよね。」

「え？」

「…似てるのよ。この前、自ら放火して、自殺した彼女に…立ち振る舞いも、体つきも。まさか…」

しかし、話を脳内で発展させようとする志保を、園子は止める。

「そんなわけないでしょ！だってその女の人、死んじゃったんでしょ？」

「…そうね。考えすぎか…宮野さんと、彼女が同一人物だなんて…」  
「あの…呼びました？」

「…！」

志保が振り向くとそこには—  
「すいません…驚かせて。」

蘭がいた。

「いいえ…こちらこそ、ごめんなさいね。あなたの名前をいきなり会話に出したりして…聞こえてました？」

「えっ…まあ、一応。」

「…そう。」

これ以上話をするのが面倒くさくなった志保は、学生鞆を持った。

「それじゃあ、私早退するから。」

「えっ!?!」

「気分悪いのよ。さつきから。」

「どうか…なさったんですか？」

志保が去ってから、蘭は園子に聞く。

「ううん、大した事じゃないのよ。機嫌悪いと、たまーにああなるの。まっ、なれっこだから仕方ないわね。それより、学校の中、案内しよっか？私、鈴木園子。よろしくね。」

彼女の最大の特徴である、綺麗な笑みを蘭は返した。

「うん！よろしくね！」

――偽りの笑みでは、無かったと思われる。

### 32 二日間だけの転校生・1日目(2)

公園のベンチに、学校もまだ終わっていない午前中から一人の女子高生が座っている光景―想像しただけで、異様に思える。

それを、ふと一人の少年は見た。

~~~~~

放課後、その少女はまだベンチに腰掛けていた。

美しい少女のその表情は虚ろで、透き通る様な瞳は輝きを失いかけている。

そう…

「志保お姉ちゃん？」

志保は無邪気な少年の声が掛かってきた方向に顔を向ける。

「江戸川君…どうかしたの？」

「ううん。帰ろうとしたら、志保お姉ちゃんを見つけたから。」

実は嘘だった。4限目の校外散策の時に、志保を見かけていたのだ。公園の前の道を通り過ぎただけなので、気付いたのはコナンだけだったが。

「そう…」

「でも、志保お姉ちゃん…まだ学校じゃないの？」

「いいのよ…もう。」

「え？」

「放っておいて。」

志保が、冷酷な瞳でコナンの方向を見る――

コナンの姿になってからは初めて見るその瞳も、新一の姿で見慣れていた為さほど驚きはしなかった。

ただ、この瞳をしている時の志保は、新一からすればとてつもなく悲しい。最も、彼女が暗闇の中へと放り込まれている時。

それを見ているのは、とてつもなく辛い。

だが、どうしてそんな瞳をしているのだろうか？

聞きたい。

だけど、聞けない。

この姿では、何を言っても無駄だろう。

唇を噛み締める。こういう時に、この姿である事を悔やみ、自分が黒ずくめの男達に気づかなかった事を後悔し、その男達を強く憎みたくなる。

全ての感情が、負の方向へと向かっていく。

「もう少し…こうしていたいから。江戸川君は先に帰っててくれる？」

「で、でも…」

「帰っててくれる？」

静かに、志保は繰り返した。

コナンも、静かに頷くしかない。

「う、うん……」

「あつ……こんな所にいたんだ。毛利さん。」

33 二日間だけの転校生・1日目(3)

異様さが更に増した光景だ。

最初からベンチに座っていた女子高校生が、歩いてきたもう一人の女子高校生の頬を強く引つ叩く姿。

―それも、喧嘩してるような関係ではなくて。

―それも、まだお昼過ぎで。

どちらも早退してきたようだが、近付いてきた方の女子高校生は、叩かれた後も静かに笑顔を浮かべている。

近くには一人の少年もいるが、こちらは速過ぎる展開に全く付いていけないようだった。

「放っておいてって…さっきから、何回言えば分かるのよ!!何で…どうして…」

「ねえ、毛利さん…何も、気にしなくてもいいと思いますよ?男子生徒も悪かった、って謝ってますし…あんなおちよくって来る人達なんて、相手にしなくても大丈夫です…」

「っ……」

それでも、志保は俯きっぱなしだった。

「…私だつて、分かります。どれだけ毛利さんが苦しかったかだつて…」

（何よ…この人。『分かります』？そんなはず、あるわけが…）

「あのクラスの一番端の席に空いていた、工藤新一さんが、いきなりいなくなつて…あなたの掛け替えの無い、大切な親友…いえ、恋人さんがいなくなつて、どれだけ辛かったかつて…そして、それを知っている人達に、あんな事を言われたら…軽蔑されているように思つてしまいますよね…」

次の瞬間、志保は蘭に泣きついていた。

単純に、園子に説明された訳でも無さそうだった彼女…転校生の彼女が、いきなり自分の心中を察してくれていた事が、嬉しかったのか、それとも…

「…大丈夫。見てませんから…思う存分に泣いて下さい…」

とにかく、周囲の視線には目もくれず、志保は暫く泣き続けた。

~~~~~

「本当に、ごめんなさいね…宮野さん。」

小さな声で、志保は言う。

「そんな…気にしないで下さい…あ、落ち着きました？」  
「ええ。一応…」

志保の表情も、段々と元に戻ってきていた。

「それより…宮野さんも、抜け出してきたんですか？」

「まあ…ふふっ…後で怒られちゃいそう…ごめんなさい。」

「『ごめんなさい』って…あなたのせいじゃないでしょ？最初に抜

け出した私が悪いんだから…」

二人の話が盛り上がっていたが、ふと蘭はコナンの方向を見た。

「ところで…可愛い弟さんをお持ちですね。」

「あ、いや…僕は…」

「弟じゃないわ。この子、親戚の子らしくて…居候してるのよ。」

すると、しばらく間を空けて、蘭は「ふーん…そうなんだ。」とだけ返した。

そして、また二人で話は盛り上がっていく…

だが、その返答は、間違いなく何かを知っているような…そんな答え。

（何か…あるのか？）

だが、それを考える間も無く、また次々と小さき親友達はやって来た。

「コナン君！」

ふと、その方向をコナンが向くと、3人の子供達が立っている―歩美、光彦、元太だった。

### 33 二日間だけの転校生・1日目(3) (後書き)

実は、探偵団も結成間近です。

次回を挟んで、いよいよ「緋色の流れ星 (シューティングスター)

」編に突入します。お楽しみに。

### 34 二日間だけの転校生・1日目(4)

「コナン君!」

三人は駆け足でコナンの元へと近付いてくる。

「あれ、そちらは志保お姉さんと…」

一応、三人は志保とは面識はあるが…勿論、転校してきたばかりの彼女の事は知らない。

「宮野蘭です。よろしくね。」

「なあ、それよりお前ら。何か用があるように見えたけど…急いで走ってきたんだろ?」

「あっ!そうでした…って、コナン君こそ、何校外散策サボってるんですか?」

「あら、江戸川君?どういう事かしら…」

(あはは…やっちゃった…)

「歩美。話そうぜ。」

元太に促されて、歩美は小さく頷いた。

「うん…ちょっと。」

~~~~~

「歩美ちゃんの荷物入りのポーチが取られた？」

「うん…怖い男の人と、その先の倉庫でぶつかっちゃって…落としちゃったポーチを、返してくれないの。」

「その先の倉庫って言うと…厄介なヤクザの溜まり場ね。でも、どうして吉田さんはそこに？」

志保が冷静に尋ねる。

「それが…元太君…」

「転がってく1円玉追いかけてたら…」

（…おいおい。何してんだ？）

「と、とにかく…落としちゃって。」

「そう…それじゃあ、取り返しに行きましょうか。」

「…えっ？」「」

いきなりの志保の爆弾発言に、コナンを除く子供達3人は目を丸くした。

（でも…やっぱり警察を呼んだ方が…）

（でも、蘭お姉さん。警察もそんな簡単には取り合ってくれないと思うよ？）

（そういう事ね。まあ…私を取り返しに行けば、間違いなくあつちは反撃してくるでしょうけど…そうすれば警察沙汰に出来るから。それで行きましょう？）

「それじゃあ、行ってくるから…あなた達は危ないからやめておきなさい。」

「あ、私も行きます。」

志保に、蘭がくつついて行った。

「心配だよな…志保お姉さん。」

「そうですね…」

「やっぱり…私達も行った方が…」

~~~~~

「ここでいいのかしら？」

志保は、一人どんと溜まり場へと入り込んで行く。

「ああ？お前、何の用だ？」

「あら…ごめんなさい。さっきあなた達が拾ったって言う女の子物のポーチ…持ち主が見つかったから返してほしいと思って来たのよ。」

「…は？」

「だから、さっきあなた達が女の子物のポーチを拾ったでしょう？持ち主が見つかったから、あなた達に返してほしって言ってるのよ。」

物怖じすらせずに、志保はヤクザへと立ち向かっていく。  
蘭はその後ろにいた。

「拾っただと？笑わせやがる…俺達がそんな物を拾うわけが―」  
「あら？別に今返さないのなら…こちらも黙っちゃいけないわよ？本当は盗ったの間違いでしたに変えてもいいのかしら？それに、あなた達がそんな下らない問題を起こしたら…上の人達からどう処分されるか…」

「五月蠅え！！この…」

一人の男が、志保に殴りかかるうとする――

「待て！」

「何！？」

だが、それを別の男が止める。

「どうしてだ！お前…臆病風にでも――」

「違う！」（よく後ろを見る…あの女、空手の全国大会チャンプだぞ！？）

（おい…本当か！？）

（ああ…間違いない。特徴的な髪型、体型…この辺に転校して来たとは…とにかく、分かったか？今こいつを殴ったら…後ろの奴に…）

「ねえ、何話してるの？さっさとしてくれない？」

志保が催促して、一歩踏み出すと、「チッ」と舌打ちして、男は志保に向けてポーチを放り投げた。

「ほらよ！お前から返しておけ！分かったらさっさと立ち去れ！」

「ありがと…それじゃあ。」

そして、志保と蘭はその場を立ち去った。

~~~~~

「良かったー！ありがとうございます！志保お姉さん！」

5分も経たずに、志保と蘭は戻ってきた。

「気にしないで…それに、簡単に取り返せたのは私のお陰じゃないわ…彼女のお陰よ。」

「「「え？」「」」

「そ、そんな…私は、何も…」

「謙遜する事無いじゃない…ヤクザがビビってたのよ？あなたが何かしら威圧したんだと思ったけど…違うかしら？」

「そうなんだ…蘭お姉さんも、ありがとうございます！」

歩美が笑顔で、蘭にも礼を言った。

「…うん、どういたしまして。」

小騒動はこうして幕を閉じた。
——っただけ、疑問を残して。

（まさか…いや…それは…）

34 二日間だけの転校生・1日目(4) (後書き)

予告編

「…クロス…アノオンナ…ゼツタイニ…」

巷で噂の殺人鬼・スカーレット。死体は常に十字に切り裂かれ、一夜で何と100km以上を移動しながら殺していくという―正に、流れ星のような殺人者。

そして、その被害者は常に女性―それも、学生が主だ。

殺人鬼は西日本を中心に活動していたのだが、いきなり帝丹大学で事件が発生する―コナンは犯人を突き止める事が出来るか、そして―志保にも悪魔の手が忍び寄って…？

名探偵コナン・「緋色の流れ星 (シューティングスター)」―いよいよスタート！

~~~~~

どうも。予告編でした。

二日間だけの転校生の2日目にも当たります。そこまでの長編にはならなおい予定です…

次回からスタートです。お楽しみに。

## 緋色の流れ星（シューティングスター） - 0

俺は高校生探偵、工藤新一。幼馴染で同級生の毛利志保と、遊園地に遊びに行つて、黒ずくめの男達の怪しげな取引現場を目撃した…  
見るのに夢中になっていた俺は、後ろから忍び寄るもう一人の男に  
気付かなかった…

俺は殴り倒され、毒薬を飲まされ、気がついたら…

―体が縮んでしまっていた。

工藤新一が生きていると奴らにバレたら、周りの人間にも危害が及ぶ。

阿笠博士の助言で正体を隠す事にした俺は、志保に名前を聞かれ…  
咄嗟に

「江戸川コナン」と名乗り、度々志保に正体がバレかけながらも、  
何とか父親が探偵をやっている志保の家に転がり込んだ。

―以来、何だか奇妙な事が多い。  
志保に何度も正体を感じかけながらも、上手く誤魔化してきたが…

まず、謎の女子高校生。彼女は二人の男を空手で殺害した後に、事務所に来ておっちゃんを何とか味方につけようとしていた…  
俺はそれを見破ったが、彼女に撃ち込んだ麻酔針は…振り向きもされずに掴まれてしまった！  
さらに、俺の正体までそいつは知っていた…  
そして、彼女は火に包まれ、行方不明…

次に、俺が一度だけ元の姿に戻った事。  
西の高校生探偵、服部平次に正体がバレた後に、パイカルっていう酒を飲んだら…

一度だけ、元の体に戻ってしまった。  
ま、そのお陰で志保に正体がバレるのを防げたんだけどな…

そして、今日初めて会った転校生…宮野蘭。  
彼女が…何だか、あの時の女子高校生に似ている気がする…

しかし、そんな事を考えながら家まで帰ってきたら…  
驚愕のニュースが、俺らを待ち構えていた。

小さくなっても、頭脳は同じ  
迷宮なしの名探偵

真実は―いつも一つ！

緋色の流れ星（シューティングスター） - 1

そろそろ、こうして俺の家ではなく事務所に帰ってくるのにも慣れてきた。

志保は勿論、手を繋いでくれるような奴じゃないけど、時々微笑みかけながら、さほど会話もしてないけど楽しくこうして帰ってくる。

ガチャ…

「只今。」

志保が、素っ気無く帰宅を父親に報せる。

「おー…帰ってきたか…」

でろんでろんに泥酔した、素晴らしき迷探偵が軽い声で返事をする。  
「ったく…まだ夕食前じゃない。そんなに飲んでどうするのよ…あら…？」

小五郎に向けて、一発BB弾を放とうとした所で、俺に止められた志保が、次に視界に捉えたのはテレビだった。

「何だか…凄く大きな事件があったみたいだね。大阪で…」

だが、聞けば聞くほどただ事ではない事は良く分かった。

~~~~~

『…昨晚のみで、死者は102名。午後6時…周りがうす暗くなり始める時間から、仮面を被り女子高生、女子大生を切り裂いていくという…』

「怖いわね…」

ただの殺人のニュースなら、さほど怖がりもしない志保だが、流石に震えていた。

「うん…そうだね。」

『…なお、犯人は身長155cm程度、巨大なマントに身を隠し、鋭い刃物を所持している模様…』

「155cm？何だか凄く小さな人ね…」

「まさか…女性かな？」

「…なわけねえだろ…ヒック…そのぐらい背の低い男だって…ヒック…」

パン

銃声―

ただし、志保の放ったBB弾…一度、コナンに止められたのに…

「…酔いながら色々言っの、止めてくれる？」

静かな笑みを小五郎に浮かべながらも、その奥の瞳は怒りに満ちていた。

「は、はい…」

『…さらに、犯人は約6時間で100km程を移動している物と思われる…今晚も、何らかの事態が発生するのではないかと推定されており、警察側は犯人の狙いである、女子高生や女子大生に絶対に出歩かないよう、呼びかけています…』

「…ちよっと心配ね。」

「そうだね…それに、これだけじゃあんまり分かんないな…そうだ。志保お姉ちゃん。」

コナンが、ふっと何かを思いついた。

「何かしら…江戸川君。」

「あのさ、平次お兄ちゃんと和葉お姉ちゃんに電話したらどうか？平次お兄ちゃんなら何か知ってるかもしれないし、和葉お姉ちゃん少し心配だし…」

「そうね…この前さほど頼りにならなかった大阪の探偵君に頼るのもどうかと思うけど…まあ、父親が大阪府警本部長の彼なら何か知ってるかもしれないわね。」

志保も了解して、まずはこの前電話番号を教えてもらった平次に電話を掛ける事にした。

しかし、中々繋がらない。

「何かあったのかしら…」

「学校行事とか？」

「あら…繋がったわ。もしもし…服部君―」
「姉ちゃん！大変や…和葉が…和葉が…」

「えっ！？」

緋色の流れ星（シューティングスター） - 2

『和葉が…和葉が…大怪我してもうて…』

珍しく、志保が大きく舌打ちする。

「ねえ、服部君？それで…和葉は、和葉は今何処に…」

『アホオ！！大怪我したのはあんたのせいじゃんかあ！！』

和葉のとんでもない大声。

「……服部君。和葉に何したの？」

『……いや、それがなあ……』

~~~~~

「おい、和葉！早よたこ焼き買いに行かんと、売り切れてまうで！」

「ちょっと……待って、平次……うわっ！」

~~~~~

『つるつと滑って……右足骨折や。で、今和葉の家にお見舞いに来てるうちゅうわけや……』

（何よ……ただのドジじゃない……）「……ねえ、服部君。和葉には後で代わるとして……それより、今どうなってるか教えてくれないかしら？」

それだけで、平次は文意を掴んだ。

『ああ……あの殺人鬼の事やな。分かった……ちょっと待ったとき……その間、和葉に代わっとくから……』

~~~~~

15分程して、平次が戻ってきた。

『あつ、平次戻ってきたよ。』

「そう…それじゃあ、代わってくれるかしら。」

『……代わったで。何か聞きたい事あったら、大体は答えられると思うで。』

「そう…ねえ、その犯人が最初に人を切りつけたのは何時？」

ペラ、ペラと平次が書類をめくる音が聞こえた。

『えーっと…あつた。1週間前やな…高校2年生の、3人組が被害に遭つてゐる…』

「…傷跡とか、何か特徴は無い？」

『傷跡…十字やな。昨日の102人も、ほとんどが背中を十字に切りつけられてゐるで…』

「それで…今晚、まだ被害者は出てないのかしら？」

『さあ…それは分からへんけど、まだ午後4時やしな。その内何かあるかもしれへんな。』

「…ねえ、その切り付けられた人に、何か共通する特徴は無い？学生だという事を除いてね。」

『うーん…制服も全然違うし…特に無いと思うで。』

この後、しばらく志保と平次はやり取りを続けていた。

「…大体、事情は分かつたわ。それじゃあ。」

『ちょ！待ち…何で、姉ちゃんそんな事聞いたんや？』

「え？」

『…この前、推理には興味無い言うてたやないか…』  
さつきから、平次には不思議でならなかった。

もしかして、コナンが何か聞いたのだろうか？

だが、答えは―

「決まってるでしょう？その殺人犯…こっちで出る気がするのよ…  
恐ろしいような、直感がね。」

直感であつた。

『そ、そうか。ほんなら、氣い付けとくんやな。』

「ええ。それじゃあ。」

ガチャ

「ねえ、志保お姉ちゃん？何か分かった？」

「いいえ…別に。だけど、私危ないかもしれないわね。」

「「え？」」

「…次に、一体どこで事件が起こるやら…」

薄気味悪い笑みを、志保は浮かべた。

―何かを、平次との会話で得ていたかのような…薄気味悪い笑みを。

緋色の流れ星（シューティングスター） - 3

プルルルル…

『おう、工藤。もう大丈夫か？』

「ああ。志保もようやく寝たぜ… ったく、夜行性は本当に困るんだよな… のくせして、朝早いし…」

と言いながら、携帯の右上方の時間表示をしてみる… 2時。  
（起きねえな… 今日は…）

しかし、平次が気にしていたのは別の事だった。

『何や。お前、姉ちゃんの事が心配で心配で…』

「うっせ… それより、どうだ？ 流石にまだ情報は入って来てねえか？」

『いや… 1時半頃のテレビの速報で、また7人死んだっちゅう連絡が入って来てるで… そして、やっと見つけたで。狙われる傾向をな。』

「本当か！？」

『ああ… まず、簡単に説明するから、メモでも取っとけ。』

この晩は、全国的に呼びかけを行ったお陰で、被害者は一気に減った。

だが、それ以上に奇妙な事があつた―移動範囲だ。

この1週間で、毎日100kmぐらいのペースで近畿地方をうろつろしていたこの殺人者だったが、今日最初に被害が発生したのは6：27、奈良県。

そして、最後に被害が発生したのは：0：12、静岡県。  
何と300km近くを移動してきたのだ。

「…流石、直感王。明日にでも襲いかかれる位置まで来てやがる…」  
『そやな…あの姉ちゃん何者なんや？一体…』

「普通の高校生だよ…少し頭が切れすぎる、な。それで？傾向って何だ？」

『ああ…髪の色がな…茶髪だけが狙われてるんや。染めてる奴は被害者0つてのが気に掛かってな…』

しかし…

「おいおい…服部。それだけじゃ流石に対策すら立てられないんじゃないかねえか？」

だが、返答が無い。

「おい、服部？まさか寝ちまつたんじゃ…」

『いや…工藤。これは俺の推測やけど…この犯人、女やないか？』

「何だよ…いきなり話変えやがって…で？根拠は？」

『…10年前、伝説として語り継がれた殺人鬼―『切り裂きジャック二世』と対極に置かれた…『ブラック・クイーン』…知ってるやろ？お前も…』

コナンが、少し声を荒げた。

「ちよつと待て…お前、まさかあいつがまだ生きてるって言うんじやねえだろうな？10年前に、両方とも姿すら見せない謎の人物に殺されたって…」

『…ああ。やけど、まだ女の方は死体、見つかってないんやし…考えられん事も無いやろ。何たってこの死者の数や…よっぽど手際がええとしか思えへんやろ。』

「…確かに、考えられねえ事もねえけど…だとしたら―復讐…」

「ああ…偶然にしては出来すぎてるやろ…」

『「その人物については茶髪だって事しか分かってねえなんてな。」

』

声が重なって、思わず二人は吹き出したが、すぐに冷静になる。

「それで？分かってんのはそれだけか？」

『ああ…もう近畿出てもうたしな…工藤。何や知らんけど、姉ちゃん狙われるかもしれへん…氣い付けるんやで。』

強く、言い切った。

「ああ—分かってるよ。」

緋色の流れ星（シューティングスター） - 4（前書き）

ひな祭りですね！

…別に何のエピソードもありませんが（笑）

緋色の流れ星（シューティングスター） - 4

…江戸川君…

…江戸川君…

「…ん…？」

「江戸川君？」

目を開けると、真上には志保の姿。

そして、時計を見やる。

丁度、9時。

「今日、文化祭を見に行くのは11時ぐらいだけど、そろそろ起きた方がいいでしょう？……っと、それよりお友達よ。」

「え？」

そつ、今日は帝丹大学の文化祭を見に行く事に決まっていたのであ

る。

（…嫌な予感。  
）  
ところが、予感が的中する事となるのであった…

…て事で、俺は今喫茶ポアロにいる。  
『…て事で』というのは、つまり…

~~~~~

「博士から暗号を貰って…その宝探し？」

「うん！あ、そうそう…博士からバツジ貰ったから、コナン君にもあげるね…はい！これ、離れていてもお話できるんだよ！」

「いや、そういう事じゃなくて…」

「おい、コナン。行くよな？」

「行きますよね？コナン君？」

「で、でも…僕は…」

「行って来なさい、江戸川君。お友達は大切にしないと…後々苦しむわよ。」

~~~~~

上手く乗り切るはずだったのだが、志保の一言が止めとなっちまっ  
たってわけだ…

くそお…推理物の面白い劇があるって言ったから…見に行きたかつ  
たのによ…

それがガキのお遊びだなんて…

ま、さつさと解決して、行けばいいだろ…

にしても、今更だけど博士ってこんな凄かったんだな。

「時計型麻醉銃」、この前作って貰った「キック力増強シューズ」、そして今日渡された「探偵団バッジ」…

うーん…でも、こんなに凄い物作ってるんならもっともっとましな物で凄いのを作れそうなのになあ…

…で、それよりこの暗号…ま、さ、か…

そう、そのま、さ、か…

~~~~~

「…ま、結果オーライ…だな。」

博士の暗号は結構厄介な物で、それ自体は難しくないのだが、ずっと市内をうろろする羽目になった。

そして現在、11時10分。暗号を解いて辿り着いたのは…

「ここか…」

「『からたん』大学？」

「違うよ、元太君。『ていたん』大学よ。」

てかよ、『帝丹』小学校に通ってる奴が、『帝丹』大学を『辛丹』
大学と間違えるか？普通…

「それより、最後の文章…コナン君、分かりましたか？」

「さあ…入ってみたいと分からねえ…」

『箱を見下ろす一人の仇^{みお かたき}』

こいつらの為に、ちゃんと振り仮名まで振ってあるこの文章…

…何の暗号だ？これ…

「仇って何だ？」

「恨みのある相手って事だよ。」

箱…箱…

それに、仇…

…ダメだ。何だか頭に引っ掛かって…そう…

…何か忘れてるような…あっ！！

「おい、オメーら！早くしないと、面白い物見逃すぜ！！」

「「「え？」「」「」

「いいから…ついて来い！！」

そうだ…まだ、間に合う！

緋色の流れ星（シューティングスター） - 4（後書き）

作中が今、春なので、帝丹大学の文化祭は春にあったという事になります。

… あんまり春に文化祭って聞きませんよね。 しかも3月となると…

緋色の流れ星（シューティングスター） - 5

直線的に飛ばせる射程は約20m。

―かなり本格的な射的が、毎年帝丹大学では大人気だった。

20mの距離から、8発全てを直径5mmにも満たない中心部どころか、直径10cmの全体に当てる事すら困難な事である…しかも、一回しか出来ない。

外側から1点、3点、5点、10点の点数が付けられているが、12年前…一人の少女がやって来るまでは、最高記録8点（3点一発、5点一発）であった。

その人にしても、次の年からは4年連続で0点…かなりの難儀な事なのだ。

しかし、それはいきなりやって来た赤みがかった茶髪の少女の、見事なまでの8連続的の中によって破られる事となる。

1 , 3 , 1 , 3 , 3 , 3 , 1 , 5 の20点…あつという間にハイスコアだ。

小4の時には史上初の10点に的中し、3 , 5 , 5 , 3 , 5 , 3 , 5 , 10 で39点。

とうとう去年は6連続10点的中を果たし、5 , 10 , 10 , 10 , 10 , 10 , 10 , 10 , 10 , 5 で70点。

そして、今年こそは―そう思うギャラリーの中には、12年前から続けて11時代の彼女の一発勝負を見に来ていた者も多い。

「やっぱり…ギャラリー出来てる、出来てる…あれ？」

「どうしたの、コナン君？」

「いや…まだ、志保お姉ちゃん出てないのに…やけに集まってるな、って。」

良く見ると、志保はまだ列の後方に並んで、園子と一緒に前の方を見ている。

「…あ！蘭お姉さんじゃないですか!？」

「「えっ!？」」「」

…おいおい!!

3 回目	1 0
4 回目	1 0
5 回目	1 0
6 回目	1 0
7 回目	1 0
8 回目	

沢山の声援が、彼女に沸き起こり…

最後の一発
8発目も、中心部に吸い込まれるようにして当たった。

歓声に沸くギャラリー。
だが…

「5点！惜しいねえ…お姉ちゃん。」
あっという間に、沈みかえった。

彼女も、残念そうな顔をしていたが、こっちに気付くとすぐに顔を明るくした。

「あら…コナン君達じゃない。遊びに来てたの？」

「う、うん…でも、凄かったね。蘭お姉ちゃん。」

「そうかしら…でも、彼女には敵わないと思うけど…」

「え？蘭お姉ちゃん、志保お姉ちゃんが射的得意だって知ってたの？」

「ええ。そうよ。」

「誰から聞いたの？」

「―誰からだっただけ？忘れちゃった…ごめんね。」

表情が…変わった！？
やっぱり…何かある…

「おい、それよりコナン！」

「え？」

「『え？』じゃありませんよ！志保さん、4発連続までの中しちやいましたよ！？」

「えっ！？だつてまだ後ろの方に…」

ふと見ると、前に並んでいた人達が、列から離れて、志保を見守っている。

―譲ってしまったらしい。てか、さっさと志保のを見たかったってわけか…

パン

「10点！」

また、大歓声。

でも…それより、今は…

げっ…あの人、何処へ…

…あそこか。体育館の方に…

走っていきやがったな。追いつけねえよ…もっ…ん？

箱…

体育館…

そうか！

「おい、オメーら！志保が撃ち終わったら、皆であの校舎の屋上に
行け！そこにある銅像を探せば、宝があるはずだから！！それじゃ
あな！」

「えっ！！コナン君待つて！！」

「…ったく、コナンの奴…」

「それに、志保お姉さんの事を『志保』って呼んでましたよ？」

とにかく…志保には悪いが、今はあいつらに確かめねえと…！！

「なあ、平次？」

放課後…和葉が、平次に声を掛ける。

「何や和葉。」

「…この前、ニュースで大騒ぎだった人…まだ捕まってへんから…」

「ああ…どんどん東に進んでるみたいやから、もう大阪には来おへんと思うけどな。」

何故か、和葉は少し俯いている。

「…あの姉ちゃんの事が心配なんか？」

「…うん。」

確かに、志保も赤みがかったはいるが茶髪。心配になるのも分かる。だが…

「まあ、大丈夫やろ…まさか、制服着て夜に外出歩くような自殺行為はせえへんやろし…」

志保はその辺りはしっかりしているだろうと、平次は考えた。

「確かにそやね…」

「それより和葉。これ、何て言う髪型なんや？」

平次は、今朝の新聞に載っていた、被害者の写真の切抜きを、和葉に数枚見せた。

「それって……ウェーブ…」

~~~~~

『志保、ウェーブ掛けてるんやね。』

『へえ…珍しい奴っちなあ。』

『そうかしら…』

~~~~~

—そして、内の二人は……制服を着ていない。

「「あ!—!」」

「なあ—和葉、まずいんとちゃうか?」
「…急ご!平次!—!」

「…これでいいか、ボウズ。だったらさっさと出てけ!!」
「うん、ありがとう。」

…やっぱり、な。

あの殺人者と同一人物で…確定だろう。

~~~~~

「ねえ、おじさん達…昨日、来たお姉さんの事なんだけど…もしかして、格闘技やってない？」

「あ？ああ…あいつ、空手の女子全国チャンプで、去年、あの京極真を絶体絶命の所まで追い詰めた奴だよ…知り合いに空手に詳しい奴がいて、そいつに聞いたのさ…」  
「たく、あの茶髪の女…あんな奴連れてきやがって…」

「ねえ、そのお姉さんの事…もっと詳しく教えてくれない？」  
~~~~~

ほぼ、確実だ。

「早野朋美≡宮野蘭」の等式は、成り立っている。

だったら、もうこの町に存在させるわけにはいかねえ。

…警察側に、提示できる「早野朋美」宮野蘭」の証拠を何とか吐かせて、逮捕させる。

—今、噂の殺人犯より遥かに危ない存在だからな。

あいつの家で、待ち伏せて眠らせてやればいい。

まあ、とりあえず…今は帝丹大学の文化祭に戻らねえとな。

劇の開演時間が14:00だから…あと30分…タクシー使うか。

…でも、何だか…妙な胸騒ぎがするのは…何でだろうか？

緋色の流れ星（シューティングスター） - 6（後書き）

色々同時進行でございます。

次回、事件発生です。

緋色の流れ星（シューティングスター） - 7

「何！？昨日の犯人の狙いは……制服じゃなくて髪型！？」

「ああ…そうや。」

伊丹空港から電話してきた平次。

「…って事は…」

「ああ。一昨日までは、大量にひたすら学生を殺人していたんや…
何らかの理由で髪型から特定出来る事を知ったとしか考えられへん。」

「…そうだな。」

「とにかく…お前、今何処や？」

「あ、ああ…俺か？帝丹大学に向かってるよ。」

「…大学やて？お前…」

「知らなかったか？帝丹はエスカレーター進学なんだよ。それより
お前、さっき学校が終わったばかりだって言っただけ…今日日曜日
なのにあつたのか？」

「あ、ああ…まあな。」

実は平次のクラスだけである…説教が厄介な某教師に、就任以来行
っている「学年末説教」をされていたのだ。

そのために何故登校させられなくてはならないのだろうか？そして、
何故5時間も説教されなくてはならないのか？頭が痛くなりそうだ

った。

「まあ…どうでもいいけど…それより、そろそろ時間じゃねえのか？」

「っと…そうやった。ほんなら、またな…工藤。分かってるやろけど」

「ああーわーってるよ。絶対に傷一つ付けさせねえ…」

ピッ…

（ホンマに…大丈夫なんやろか…）

「平次ー！！早くせえへんと、乗り遅れてまうよー！！」

（…工藤。しっかりするんやで…）「おう！今行く！！」

~~~~~

「箱って…体育館の事だったんだね！」

階段を上がって、息を整えてから歩美は言った。

「ええ…そして、『仇』というのは『硬き』という事で…この銅像の事なんですネ！」

「博士も面倒な事するよな…でも、この何処かにお宝があんのか！？」

元太の目が、キラキラと輝きを増した。

―出題者が博士だという事を忘れてしまっている。

「きっとそうです…探してみましよう！」

「うん！そうだね…って！二人とも、それより志保お姉さんを上から応援するんですよ！ここからなら志保お姉さんにも見えるし…」

最初の目的を完全に忘れかけてた二人に、歩美は言う。

「そ、そうでしたね…って！もう8発目みたいですよ！？」

階段を上ってる間に、もうラストまで来ていた。そして志保のスコアはちゃんと70点である。

—あと1発で、80<sup>満点</sup>点。

「ほ、本当か！？」

元太、光彦、歩美の三人は、屋上のフェンスにくっつきながら応援する。

「頑張れー！志保お姉さん……」

しかし、数秒後—歩美のとてつもない悲鳴が響き渡っていた。

—志保の8発目を撃った先で、一人の人が少し離れていても分かるくらいに大量の血液を流して…死んでいる。

緋色の流れ星（シューティングスター） - 7（後書き）

事件、発生。

緋色の流れ星（シューティングスター） - 8（前書き）

思ったより長引いてきました…

15 / 16 辺りで終わらせたいですね。

体育館裏――

「――え？昔に裏切った組織の殺し屋……『キャロル』が……その殺人鬼と同一人物なんですか？」

『そうなんだよ……蘭ちゃん、何とかしてくれないかね？』

「で、でも……そんな人、私じゃ……」

『何を謙遜しておる……幼くして『切り裂きジャック？世』と呼ばれた『マグノリア』を簡単にこの世から葬り去ったのは……何処の誰だい？……変装までして、既に殺しておいた彼の息子になりきって――あの男が何とか彼女に伝えた言葉メッセージですら、ただそれが『学生』だったという事――』

しかし、シェリーは……

「あれ？知らないんですか？『キャロル』は夫を殺したのが茶髪だという事はもう知ってるみたいですよ？」

ピスコは驚く。

「何！？それは本当かね、蘭ちゃん。」

「ええ……多分。昨日殺された7人は、全員茶髪だったそうです。」

ピスコが思案顔になっているのは、蘭にも分かった。

『ふむ……そうか。分かった。とにかく……速急に処分してくれるかな。』

その近くに潜んでいるみたいだから……」

「はい、分かりました……」

どうせ、ピスコの目的はまた自分の株を上げる事だ。

―シェリーには協力する気すら起こらない。

だが、ここで思わぬ事態が発生した。

―沢山の悲鳴が、聞こえてきたのだ。

『おや……どうしたのかね？ 蘭ちゃん……』

「あつ……何だか、本当に現れたみたいですよ……昼間なのに……」

『本当かね！？ それじゃあ、早く見つけ出してくれるかな。』

「はい、分かりました。それじゃあ……バックアップをお願いします。」

「

ピッ……

（……面倒ね。）

空に向けて、一言シエリーは眩き、イヤホンを耳につける。

『ああーわーってるよ。絶対に傷一つ付けさせねえ…』

（よっぽどこっちの方が面白いわ…今はこっちに向かっている最中…面倒だから、彼に特定してもらいましょうかーふふっ…小さな名探偵さん。）

~~~~~

勿論、死因は志保の放った射的の弾丸ではない。
数分後に、警察が到着し現場検証が始まった。

「亡くなったのは…女子大学生の鹿取優花（20）…私服だが、切り裂かれた痕は―」

「はい。やはり…『スカーレット』の仕業かと。」

しかし、その言葉は小五郎達からすれば初めて聞く響きだった。

「スカーレット？」

「おや…毛利……はあ。君か。」

「『はあ』…じゃないですよ警部！―」

「悪い悪い…」

そして、一度咳払いをして話し始めた。

「大阪の方で付けられた名でな。わしも昨日初めて聞いたんじゃないが

…」

（大阪…服部君、知らなかったのかしら？）

話を聞いていた志保も、思考を張り巡らせてみる。

どうしてわざわざそんな名称があるなら…平次はそう言わなかったのだろうか？

だが、この疑問は数秒後に解決した。

「というより警部。大阪でそう呼ばれるようになったのも昨日ですよね？それに警察の機密情報じゃ…」

（ああ…昨晚の電話の後だったのね。）

「いや…もうそれぐらいは30分ほど前からテレビで流れておるよ。取り敢えずそれより今は事件…毛利君。誰も遺体には触らせていな

いだろうな？」

「はい！勿論ですとも警部殿！」

「それで…犯人を特定しようにも…人が多すぎるな…取り敢えず、この大学内の客全員の身体検査を、その体育館内でしろ！！そして大学内に誰一人入れるな！！」

（この事件…相当厄介だな。これは…）「高木。今日は帰れないかもしれないな。」

「勘弁して下さいよ警部…」

「目暮警部。ちょっといいですか？」

「何だ。佐藤…」

「凶器の事なんですが…」

警察によって、慎重に捜査が進められていく。

その一方で…

（なんだかこの事件…嫌な予感がする…彼もいないし…）

既に、彼女の直感は予測していた。

—この後、彼女に襲い掛かる悪魔の手がある事を。

そして…中に入れなくなった事で、コナンの助けも借りられなくなっていた。
名探偵

（江戸川君…役に立つとは思ってたんだけど…）

終極へ――

「あなた！あなた！」

あいつらの仕業……？

「あなた！あなた！……っ……」

許せない……

絶対に……

あのクソガキたちだけは……！

そうして、生きてきた私。

一昨日に一人消したから……残すは、あと、一人……

長かったけど、見つけ出して……殺す。

元の小学校で唯一見つからなかった二人の写真……半年前にようやく見つけ出したんだから。
絶対に殺してやる……

もう、写真と同じ顔だとは思えない。8年という年月が経った。
—だから、全員殺す。可能性があれば、誰であっても……

なりふり構ってられないの……

組織に動きを掴まれてしまうまえに—必ず仕留めて、あなたに『魅せる』わ。

そう、全てはあなたの為……

見ててよ……あなた。

恨みを全て……晴らして見せるから。

そうしたら、あなたの元に逝くね？

— 待っていてね、あなた。もう終極^{おわり}は近いから……

終極へ―（後書き）

いよいよ、ここから後半戦です。

それでは、次回もよろしくお願いしますm――m

緋色の流れ星（シューティングスター） - 9

「はい、次……」

佐藤の目が、次の男の所で大きく見開かれる。

銀色の長髪、瞳の色は深緑……

黒のロングトレンチコート、ノーネクタイで白のハイネック、黒帽子……

そして、何より威圧感が凄い。

「……さっさとしろ。こっちは急いでんだ。」

「は、はい。分かりました。」

思わず、改まって佐藤は返事をしてしまう。

「……はい。いいですよ。」

プルルル…

「シェリー？俺だ。」

『ジン？入れた？今入り口が封鎖されちゃってるみたいだけど…』

「…ああ、なんとかな。それよりさっさと手短に用件を話せ。」

『分かった。えつとね…ピスコが………って事なんだけど。』

「くつくつく…」

『ジン？』

「……ああ。良くやった。取り敢えず―俺に先に撃ち殺されたって事にしておく。早めに特定して、捕縛しておけ。俺が撃ち殺してあの方の元へ連れて行く……そうすればピスコには何の利益も無い。」

『特定……』

「分かってるさ。相当時間が掛かる事ぐらいはな…最悪、今日中でなくても―」『30分。』

「…何だと？」

『犯人を特定する、小さな名探偵が、あと30分で到着するわ…多分、1時間もあれば特定してくれるでしょうから…そうしたら私が捕まえて、隠密にあの路地へ追い込むから…後は殺してくれる？』

「……ほう。外部から来るといふ事は…」

『うん。取り敢えず上手くその子を入れてあげなくちゃ…それじゃあ、ジン。待っててね。』

「…ああ、分かった。」

ピッ…

（フン…面白くなってきたな。）

ニヤリと口元に薄ら笑いを浮かべ、ジンは茂みの中へと入っていった…

~~~~~

「やはり…この中から特定するには無理があるか…」

学内全員の所持品を調べようにも、凄まじい人の数だし、そう簡単には調べられない。

「しかし、警部…それでも、今回はチャンスですよ…犯人は流石にこの警備の中で殺人を犯すわけにはいきませんから…凶器を隠し持っているはずです。絶対に見つけ出さないと…」

「分かってる…だが…全員をこうして完璧に調べきれるわけではないだろう……」

ふと、目暮の頭に高校生の、一人の男の笑みが浮かぶ。

（工藤君…）

しかし、すぐにその警察の救世主を頭から消し、事件へと向き合おうとする…

―だが、その男は変わり果てた姿で門の前に立ち尽くしていた。

~~~~~

「ねえ、おじさん。中に入れてよー…」
「ダメだダメだ。今、中で……」

言葉に詰まってしまう。

「中で？」

「……とにかく、ダメな物はダメー」「充くん!!」

「~~~~~へ?」「~~~~~」

門の前で警備を固める、5人の男と1人の小さき名探偵はその声の

方向を向いた。

「もう…心配したじゃない…ねえ、お願いですから…この子、中に入れてあげてくれませんか？私の弟なんです…ダメですか？」

すぐに男は断ろうとした…だが。

男に向けて懇願する彼女の表情を見て、世の男性に断れる人などいるのだろうか？

「…いいですよ。（ガシャン…）はい、どうぞボウヤ。気をつけるんだよ。」

「うん！ありがとう！-！」

10mほど歩いて…

「―凄いいね。蘭お姉ちゃん。」

「そうかな？でも、よかったね。コナン君…」

「へへっ…それより、どうしたの？大騒ぎになってたけど…」

すると、蘭もすぐに表情を変える。

「…人が、一人死んだの。」

「…そうなんだ…っ！まさか…」

「そう、傷跡は…やはり、スカーレットがつけた物みたいよ。」

スカーレットという語は、既に平次から聞いていた。

「…それで、園内にその人が？」

「うん…ふふつ…もしかして、コナン君…その犯人を探すつもりなの？」

「…そうだけど。」

素っ気無く応える。

「そうなんだ…でも、気をつけてね。特に宮野さん…狙われてるみたいだから…」

言いかけたその時—コナンの一言が、落ち着いて話していた蘭の動きを止めた。

「分かってるさ。工藤新一として、ゼツテーに捕まえてやるよ…首洗って待っていやがれ。全日本女子高校生空手チャンピオン、宮野蘭—偽名・早野朋美。」

「…っ！！…どうして…」

「バー口オ…待っていやがれつつたろ？ちゃんと吐いてもらうぜ…もう外には出られねえよ…あんたは余計な言葉を言っちゃった。

俺を弟だ、ってな。そうしたらどうなると思う？次出る時に、一緒に俺がいなかったら…警備員は怪しむだろうな。まあ自慢の空手でまとめて殺してもいいけど…そんな大掛かりな事は出来ねえだろ？それに、この辺りの警備は相当強い…他の所から抜け出そうとすれば、それもまた捕まる…もうお前の将棋は詰みなんだよ…わーったら、学内でおとなしくしてな。後で俺が迎えに来てやつから、よ。」

勝ち誇ったように、コナンは蘭に向け笑みを浮かべて、その場を後にした。

「――この血の海を作り上げる、犯罪者を捕まえるシヨ―を繰り広げた、後でな。」

緋色の流れ星（シューティングスター） - 10

やはり、ここで殺人事件が発生したらしい。

傷跡は今まで同様に、スカーレットがつけてきた物だ。
そして、狙われた人物は、やはり茶髪でウェーブ…

…ちょっと待てよ。

どうやってそれを知ったのだろうか？

数日前までは、茶髪だという事しか知らなかったのに…やはり標的ターゲット
から情報を得たのか？

それにしても不自然すぎる…標的ターゲットがそんな簡単に脅迫に应じるか？
仲間を…売るか？

恐らく、彼女の標的ターゲットはあの『切り裂きジャック？世』を殺害した奴
だ…だとしたら、恐らく彼女はそこから何かを得たに違いねえ…

殺した奴から、何かデータを手に入れたのか？

…だとしたら、まだ持ってるかもしれない。何かしら、暗号の紙とかを…

恐らく、俺の推理が正しければ…まだ捨ててはいないはずだ。だから今すぐに…目暮警部に確かめねえと…

ブルルルル…

~~~~~

大学内は、徐々に騒然となつて行つた。

「まだ帰してもらえないのか!？」

「もういいじゃない!身体検査は終わつたんでしょう!？」

そう、全く捜査が進んでいないのだ。

「も、もう少しだけお待ち下さい。」

犯人の候補すら絞り込めていない。

「くそっ…本当にとんでもない山にぶつかつたな…(プルルル…)  
つたく…こんな時に電話とは…(ピッ)はい、捜査一課目暮—」

『お久しぶりです。目暮警部。』

「おお！！工藤君！！ちょっといいか」

『分かってますよ…スカーレットについてですね。私も知り合いから聞きましたか…』

「そうなんだよ…何か、分からないかね？」

『そうですね…警部。今、身体検査してらっしゃいますよね？』

「ああ…そうだが、それがどうか？」

『…その中に、何か変な文字がプリントされた物が無いか、探してほしいんです。』

「変な文字？」

『ええ。何か書いてあればすぐにメールで送ってもらえませんか？その中に、犯人が残した確かな証拠があるはずなんです…この学内に犯人が居る限りね。』

すると、目暮は頷く。

「ーそうか、分かった。今すぐ佐藤に聞いてみる。」

ピッ…

15分後、すぐにコナンの元にメールが届けられた。

「へえ…どれどれ…『ジャック・ザ・リッパー』のTシャツ…『死神の刺青』…しかも結構深いな。こりゃ…それに文字で『S・K・A・E↓S&amp;A・K』って書いてある…次は『文字と数列の書かれた青のTシャツ』…裏表両方にあるのか。『551A1A』『3FDDFE』…何かの暗号かな…それともただの印なのか…？それで、次が『変わった形状のナイフ』で…『11,6,893』…ただし、毛血液反応は無し…そして最後が『緑色のお守り』で、中身は本人が拒み続けた為に空いていないが、中からチャリン、チャリンという音がしたと…」

しばらく、ディスプレイとにらめっこを続けていたコナンだが、途中で諦めて普通に考え直す事にした。  
だが、考えれば考えるほど全てどつぼにはまるばかりであった。

（なんなんだ一体…この暗号は…3つ目は多分、年月日なんだろうけど…）

しばらく、コナンは考えていた。

―勿論、この後小さき名探偵は閃いてしまうのである。

## 緋色の流れ星（シューティングスター） - 10（後書き）

これまで暗号はどの作品でも簡単（or大した事ない）な物ばかり出して来ました。しかし、今回は次の2つの中で、後者はかなり厄介だと思います。

『S・K・A・E↓S&amp;A・K』∴こっちは複雑に考えない方がいいと思います。

『551A1A』『3FDDFE』∴1つ目は2桁毎で、2つ目は1桁毎で区切りましょう。すると何かが見えてくるかもしれません

∴

プルルル…

知らない番号から、電話がかかってくる。

「はい、もしもし…工藤です。」

「工藤君？ちよつといいかしら…」

佐藤だった。

「はい、構いませんよ。」

「…さつき、ちよつと変な人を見かけたのよ…」

「変な人？」

「ええ…銀色の長髪、瞳の色は深緑…服装は黒のロングトレンチコート、ノーネクタイで白のハイネック、黒帽子…」

「よ、良く覚えてましたね。佐藤刑…事…」

コナンは、イメージしてはっとした。  
—黒ずくめの男。

「工藤君？」

「は、はい…取り敢えず、情報ありがとうございます。」  
「え、ええ……楽しみにしてるわよ。後で推理を聞かせて頂戴ね。」

ピッ…

大チャンスにして、大ピンチだ。何とかして捕まえたい所だが、先に気付かれれば……死が迫る。

（くそっ…取り敢えず、さっさとこの暗号を解かねえと…ん…そうか！！）

—小さくなくても、この名探偵の頭脳は同じ…とうとう閃いた。

一体、誰が犯人なのだろうか…？

~~~~~

プルルル…

ピッ…

「工藤君か？」

「ええ…目暮警部…犯人の方、分かりましたよ。」

「ほ、本当かね！？工藤君！」

「ええ…しかし、目暮警部…恐らく、今その人物はその人混みの中で見つけるのは厳しいでしょう…」

それは、そうだ。学園内には人がこった返しており、もう一度見つ

けるのは困難を極める。

「そこで…この携帯を、放送室の席に置いて頂けませんか？」

「あ、ああ…構わないが…お、おい…まさか、工藤君―」

フツと息を吐いて、落ち着き払って言った。

「―ええ。この学園全員に―私の推理を披露させて頂きますよ。目暮警部―」

自信に満ち溢れた新一の笑顔が、目暮の脳内に浮かんだ。

~~~~~

ピン、ポーン、パーン、ポーン…

『あ、あー…校内に残っている皆様方にお知らせする…只今、犯人が判明した。』

「な、何だって!？」

「この学園の中に犯人が…!？」

「何処に証拠があるんだよ!？」

（へえ…意外と早かったわね。解決…ま、早ければ早いほど助かるけど…にしても、来なかったのね…江戸川君…）

『落ち着いて下さい…皆さん。その犯人は今、逃げる事に必死です…あなた方を刺し殺してしまえば、ますます逃げづらくなるでしょう……しかし、もう逃げられませんかよ。自ら、犯人だこの血の海を広げようとする殺人者は、周囲に証明してしまっている…残念ですが、チェックメイトです。』

学園内で、大歓声が沸き起こる。

「お、おい…もしかして…」

「いや！もしかしなくても…あの有名な高校生探偵の、工藤新一だ  
！！」

「本当か！？」

…一部を除いて。

（あ、あの探偵ボウズ…！）

（な、何やってるのよ…工藤君…）

そして、いよいよ――新一の推理は始まった。

緋色の流れ星（シューティングスター） - 12（前書き）

いよいよ終盤です。

まず、この事件は今、西からやって来た殺人鬼「スカーレット」の仕業である事は間違いないでしょう。

この「スカーレット」は、狙いをちよくちよく変えている…共通するのは、被害に遭った人達が全員学生である事。そして、「スカーレット」が昨晚殺したのは、全員「茶髪のウェーブ」の髪の毛を持つ人達です。

しかし、犯人はその直前までそれを知らなかったか、何者かを殺したが為に目的を変えたか…これはここまでのデータだけでは分かりません…ですが、前者であるという証拠―それを所持しているんです…

「そうですね？ゴルフプレイヤー…里崎清香さん…」  
「っ…！」

~~~~~

気付くと、一人の女性の周りを警察官が囲っている。

「あんたは、2枚の紙で、確実に証拠を残していた…そう。あんたが標的を茶髪のウェーブに変えた、原因となる紙をね…」

「な、何言ってるの？あれは―友達のメモで…」

「『551A1A』と『3FDDFE』の事ですか。友達じゃなくて、夫でしょう？それは…」

「……」

「続けますよ？『551A1A』と、『3FDDFE』…これを解く鍵は、32進法にある…前半は2桁ずつに区切って読むと…『165,42,42』となり、後半は1桁ずつに区切り、10進法に直した物を―アルファベット順に置き換えれば『common』という意味になりますよね？」

「だから…だからそれがどうかしたの！？『common』は確かに『並み』↓『波』って連想できるかもしれないわ。だけど―前半の数字は何も関係が無いじゃない！！まさか、それが『茶色』を示してるとでもいうわけ！？」

そして、コナンは静かに笑い―「そもそもそんなの関係ない！」という犯人に、止めを刺した。

「―X11の色名称。X Window Systemにおいて、色を表すのに用いられる文字列…色成分の赤、緑、青の数値としてその3つの数字を見ると…『茶色』になるんですよ―メッセージを

隠すにはもってこいですよね?。」

しかし、まだ食い下がる。

「待って…それじゃあ、凶器は? 凶器はどこに―」

「ああ、凶器なら…」

高木が、清香のゴルフバッグを取り上げる。

「その中の…ゴルフドライバー内に収納してるんでしょう?。」

「くっ…」

小さく、清香は舌打ちする。

―おぞましいぐらいの血を帯びた、剣が露出した。

「…ふふっ…まさか、この下らない拘りで…見つかったやうなんてね。」

「…認めるんだな?。」

小さく、スカーレットは頷く。

「…あれは、生前の夫の、私が持っている二つだけの筆跡なんです…
…夫が殺されると同時に、私の家は、燃やされてしまいました…
信じられないようなクソガキ達によってね!。」

「その翌日に、まとめて転校したという少女達がいた…何かの仕掛けで、夫を殺したに違いないそいつらの足取りは、まるで掴めない…そこで、私は一計を考えた。彼女達が成長し―8年後ぐらいにまた私が暴れれば…」

「ちよつと待て―!」

話を目暮が遮る。

「『また』と言ったが…」

「あら？聞いた事無い？8年前に一斉を風靡した…『魅せる』暗殺者の二人組…『切り裂きジャック？世』と―『ブラック・クイーン』…しかし、男は既に死体が見つかっており、死因は飛び込み自殺と言われている…ま、そのニュースが流れる度に、捜査不足の警察が憎くなってくるんだけどね。」

そして、また続ける。

「話を戻すけど…私が暴れれば、成長した彼女達なら、また殺そうと企むはず…だから、私に立ち向かおうとしていて、情報収集の段階で手に入れた写真6枚を参考に…こここの所、事を起こしてたってワケ…」

目暮も、言葉すら出ない。

「そうそう…言うの忘れてたけど…あいつを殺したのは、あくまで『ブラック・クイーン』時代に仕留め損ねた奴がいたから…って事なのよ。最後の一人はまだ殺せてはいないわ―見つけたけど。」

次の瞬間、目暮の腹は貫かれた。

（くそっ…もう一本隠し持っていたのか！？）

飛び込む、警察。だが―

「ふふっ…哀れ哀れ。自ら死にに来るなんて…」
それを軽く薙ぎ払うスカーレット。

一瞬にして、全ての首が…胴体から離れた。

大量の悲鳴。その中で…スカーレットは、一人の女性の腹を殴り、
気絶させて運んでいった。

「くそがああああ!!」

1秒ほど遅れて、一人の少年が茂みから飛び出す。

入り口の警官も、まとめて薙ぎ払っていくスカーレット。

―恐ろしいまでの量の血の中を、滑ってしまわないのかという程の速度のスケートボードで、コナンは追う…

―最後の追跡劇が今、幕を開けた。

緋色の流れ星（シューティングスター） - 13

驚異的な速度で、邪魔する者を薙ぎ払いながら走り去って行く姿は正に――緋色の流れ星。

その前では、何もかもが無力と化す――

コナンは祈る。その流れ星が抱える、女性が――宮野志保で無い事を。他ならいいのか、と言えばそういう訳ではないが、単純に志保で無い事を祈っていた。

――だって連れ去られたのが、コナンには志保に見えたから――

そして、コナンのスケボーとすれ違った…一台のタクシー…

「あれ？…コナン君とちゃう？」

「何！？ホンマかそれ…おい！！運転手はん！！車止めてくれ！！」

「あ、ちよつと…平次！？」

「和葉。支払いは頼んだで！！」

車を飛び降りて…和葉の必死の叫びを聞く事もなく、走り去って行く…

—もう一人も…動き出す。

「ジン？予想通り動き出したよ…うん、うん…狙いはやっぱり、彼女…うん、うん…大丈夫だよ。だってあっちも私の事には気づいてたから…流石に、私から離れた所で殺ろうと思うはず…だとしたら、絶対に、そこに行くから…私はゆっくり追いかけるわ…うん、うん…それじゃあね。」

ピッ…

（さてと…その前に小さな探偵君。彼女を…宮野さんを、助けられるかしら？）

不気味な笑みを口元に浮かべ、彼女も歩き出した。

~~~~~

ふふっ…ようやく、ここなら…この路地なら、バレずに殺せそう…

全てを…地獄のような8年間を、この女にぶつけてやる…

「どうやって死にたい…？」

苦痛に…悶えなさい。

そう、じっくりと、じっくりと…

「……」「っ、いいかしら?」

…何よ。今さら。

「あなた、小さい頃の写真を6枚持つてる…そう言ったわよね?」

「ええ…そうだけど」

「だったら—わざわざ、どつしてあの暗号に頼る必要があったのかしら?」

くっ…

「…それが、何だっていうの?」

「もう一つ。一番不可解だったのは一夜で102人を、一気に惨殺した時…顔写真を持っているなら、ピンポイントで殺すはず…一晩でその顔写真に合う人物を探してまとめて殺すのは―不可能よ。」

…

「そろそろ…とぼけるのもいい加減にしたら？貴女ほどの恨みを持つ人間なら…もっとその人間に苦痛を与えてから、殺るはず…気づいているんでしょう？そんな6人の子供達には…何も関係がないってね。」

「ふざけるな！！」

「っ」

クソが…

「あの人は…あの人は…あんたの両親の車で…私達の息子を車で轢かれたから…」

「その…恨みを持って、殺人者になった…？ふざけるのも、いい加減にしないよ…何人の関係ない命を、あなたが奪い取った…つて、言うの…？」

「ふざけてるのはあんたでしょうが！！…あんたでしょう！？あの人を惨殺したのは！！…そして、転校して…仲間を連れて逃げやがって！！…もういい！！消えてしまえ！！」

死ねえええー

パキン…

な…

ナイフが、砕けた！？

「そこまでだぜ？ スカーレットさんよお…」

「あ……………」

な…

さっきの…探偵だと!?

「新、—…あ…」

その声は、確かに工藤新一の物。  
今、行方不明の…あの高校生探偵の物。

その高校生探偵が、ナイフにサッカーボールを命中させ、砕いた。

『確かに、あんたの夫を殺した奴は、誰であろうと…絶対に許される人間じゃねえ……だけど、あんたが犯した罪だって、絶対に許されるはずねえんだよ…』

強く、工藤新一は言う。

「な、何なのよ…一体…ふざけないで！！私は、ただ…ただ…」

『復讐の為？笑わせんな…あんたのやつてる行為はただの八つ当たり…真犯人は、ちゃんといるんだよ。他にな。』

「な…じゃ、じゃあ！誰なのよ！！その真犯人って―」

新一は大きく、息を吸い込んだ。

「教える必要もねえよ…あんたみたいな八つ当たりで殺人を犯すよ  
うな奴は…刑務所に入ってから知りな！！」

鋭い弾道で、犯人の顔面に――もう一発のサッカーボールが、直撃した。

「志保お姉ちゃん!!」

それと同時に、コナンは路地へと飛び込んで行く。

「江戸川、君」

「志保お姉ちゃん……大丈夫!？」

呼吸を確認する――異常は無い。

「え、ええ……な、んとか……ね……」

「良かった……」

「……それより……新一……は……?」

(っ……)

志保は続けた。

「声が……した……んだけど……江戸川、君……見なかった……?」  
「……」

どう答えるべきか、ひたすら迷った。  
迷いに―迷った。

「…いた、よ…また、事件だから…って言って、すぐに行っちゃったけど…」

「…そっか。やっぱ、り…ふふっ…分かってた、のに…私…なんか、…眼中に…な―」  
「違う―!」

コナンは叫んでいた。  
「え…」

―静かに、志保に言った。  
「新一お兄ちゃん…言ってたよ。絶対に…絶対に…戻ってくるから…待ってて、ほいって…」

『「志保に、一番大切な…幼馴染に、死んでも戻ってくるから…待  
つてほしいって…」』

しばらくの、沈黙が流れ去った。

「……馬鹿、ね。」

先に、口を開いたのは志保。

「え……」

「……死んだら……意味無い……じゃない……」

「あ……」

静かに、目を閉じながら……誰に向けてでもなく、志保は言った。

「死なないで……絶対、に……」

「ああ……！」

最後のコナンの言葉が――目を閉じた志保には、新一が放った言葉のように……聞こえた。

脈を確認する……何も問題は無い。

（さてと……取り敢えず、目暮警部を呼ばねえと……っ……っ……！）

携帯電話を叩き落され、コナンは気付けば壁に首を押さえつけられていた。

「くっ……はな、せ……」

「ふふっ…何を言ってるのかしら？工藤新一の声真似なんかしたりして…」

「…っ！！」

妖艶な笑みを浮かべながら、スカーレットは徐々に力を強くしていく。

「あら？驚く事なんてないんじゃないかしら？陰から小さな足が見えたから…どうかとは思ったけど。ま、あの程度で…私を倒せたと思ったのが、あなたの最大の誤算だったようね…ふふっ…それじゃあ、逝きなさい―地獄へ。」

一気に力を入れた。

コナンの表情も、あっという間に―苦しくなっていく…

「ぐあああああ！！」

「ぐはっ……はあ、はあ……」

呼吸を少しずつ整え直す。

何があったのか―スカーレットは、壁に頭部を強打。

「はあ…… やっっちゃった……これじゃあ、私が殺ったってバレちゃうじやない……」

「つ！！！！……テメエ……！！！」

その場に立っていたのは、宮野蘭―あの化け物。

「ご苦労様。探偵君……中々やるじゃない。スカーレットの正体特定して、凶器も見つけて……ま、詰めが甘い所は……これから頑張れば？」

くそっ  
…  
体が…

「それじゃあ、止め刺すから……退いてくれる？」

くっ…

「させつかよ……絶対に、罪を償わせてやる……！ お前も、捕まえー  
がはっ……」

何で…あの女、軽く頬を打ちつけただけで—3m近く飛ぶんだよ…！？

「関係ないわ—この女は、邪魔だから…消す。残念だけど、これだけは—譲れないから。」

徐々に、緋色の液体が広がって行く。

「さてと…表向きは自殺かな…？ま、あなたの証言で—どうにでも覆るかもしれないから…一つだけ言っておくわ。」

ダメ…か…

くそっ…情けねえ…こんな奴に、脅迫されてるなんて…

「あなたの言った通り—脱出時に私は怪しまれた。だけど…そんな事、気にしてる余裕は無いわよね？早く彼女を捕まスカーレットえなくちゃならないんだもの…それに、あなたは全く立場を分かってないわ…あなたは、脅迫される側なの。もう正体バレバレなのよ？…今、この世界でああなたの正体を知っているのは、私とピスコ…まあ、今日中にピスコも死ぬでしょうから…私だけね。だから、言っておくわ—あなたは、私に生かされているの。希少な薬品の被験者として…私の

目的の為にーね。」

…くそっ…たれ…

「分かったら…まずこの女性が自殺したと、報告する事。そして、これからも潜伏し続ける私を、見て見ぬふりする事ね。逆らったり、あんまり邪魔したりすると…この子の命がないから…<sup>ガールフレンド</sup>気をつけなさいよ?」

ーそれじゃあ、お休みなさい…高校生探偵、工藤新一君ー

緋色の流れ星（シューティングスター） - 16

クソッ…あのスケボー…早すぎるわ…

どこや？工藤…何処へ…っ！！

「工藤！？おい…工藤！？」

~~~~~

「工藤！？一体…それに、姉ちゃんまで―」

平次が、コナンと志保の元に駆け寄る…と同時に、もう一方からも

女性が駆け寄ってきた。

「僕、大丈夫!? それに、あなたも!!」

「それより……っ！あの子……まあええ、とにかく警察呼んでくれへんか！？」

「え、ええ…分かった。すぐに電話する。」

携帯を取り出して、女性は電話を掛けた。

そして、平次はすぐにスカレットへと駆け寄る。

「いや、連続殺人犯——自殺か？ いや…… ちゃうな。これは…… 自殺やない。多分——」

パシツ
:

「――残念やったな。あんたやろ？こいつ殺したの……」

「っ！！」

きつちりと、平次は蘭の蹴りを受け止めている。

「結構痛いな… まあ、一応俺も剣道やってるし… 動体視力はええ方やったからな。あんたがしてくる事も大方読めたし…」

「へえ…あなた、この子のお友達だったの…本名、工藤新一—今は江戸川コナンね。」

薄ら笑いを浮かべる蘭を、平次は強く突き飛ばす。

「あなた…一体、何者や。」

「答える義務は無いわ…それより―ガールフレンドの心配をした方がいいんじゃないかしら？」

「な…」

さらに、蘭はフツと笑う。

「足を怪我していながら、必死にここに向かって走ってた、女性―あなたと一緒に来た人でしょ？―ここまでくれば、命は無いわよ？」

「くっ…お前！和葉に手出したら―」

「だったら、私の言う事…聞いてくれるかしら？」

「ぐっ…」

そして、蘭はコナンの時のように、平次を強く蹴り飛ばし、言った。

「この死体を回収した事を―誰にも言わない事。私の事を、綺麗さっぱり忘れる事。そして―周りに江戸川コナンの正体がバレないようにする事―これが守れば、しばらくは生かしておいてあげる。」

そして―数分後、大きな悲鳴が響き渡る―

「平次―！！」

~~~~~

…じ…

…へ…じ…

…平次！平次！！

「ん…」

18時間後―病室で、その男は、目を覚ました。

「あ…平次！！」

和葉が、平次に飛びついた。

「か、和葉！お前…」

「良かったじゃない。服部君…」

志保が、クスツと笑う。

「ちよ、姉ちゃんまで!!…痛っ!」

「ご、ごめん!平次…大丈夫?」

腹の辺りを、平次は自分の手で摩る。

「ああ…大丈夫や。それより…」

「大丈夫よ…江戸川君が、詳しく目暮警部に話しておいてくれたから…スカーレットは自殺したわ…殺人の動機は、夫の恨みの復讐…それも八つ当たりだったらしいわ。」

「そう、か…」

ほっとした。コナンが、変に目暮警部にあの女の事まで話してしまったら…そう考えたからだ。

だが―それは、同時にコナンもあの女に脅迫された事を意味する。

(何者なんや…あの姉ちゃん。)

後でコナンに聞きに行く事を決めた平次は、あくびをして、もう一度布団の中へと潜り込んでしまった。

~~~~~

ガチャ…

「志保お姉ちゃん…あれ？」

コナンが、志保の病室に入ってきたが―誰もいない。

（おっかしいな…さっきまではいたはずなんだけど。）

部屋を出て、平次の病室にも行ってみる。

ガチャ…

「お、どうした？ボウズ？」

だが、和葉と小五郎しかいない。

「志保お姉ちゃん、知らない？」

「ああ、志保は…さっき、トイレ行く言つて…それにしても遅い気もするね…」

「—ま、変な所には行つてねえだろ…」

だが、コナンの記憶は—一つの場所を、弾き出した。

緋色の流れ星（シューティングスター） - 16（後書き）

次回、一応決着です。

緋色の流れ星（シューティングスター） - 17

― 2 年前 ―

~~~~~

「お前、いつも病院行きになると……ここ来るよな。」

「何？悪い？」

「別に……悪かねえけどよ……」

「……嫌なのよ。」

「え？」

「縛られるのが……周りに制御されるように生きるのが……それだけ。」

「

~~~~~

あれ以来だろうか。

幼い頃は病弱で、何度も病院へ連れて行かれた志保にとっては、ベッドでの時間がどれほど退屈かは言うまでもなく分かっていた。

誰もいない病院の屋上で――特に意味もなく、外の景色を眺める。それだけで、十分志保の心は満たされていた……

「志保お姉ちゃん。」

急に後ろからかかって来た声に、志保は振り向きかえる。

「…江戸川君…」

「やっぱり…ここに居たんだね。」

「『やっぱり』…?」

失言だ。

「あ、いや…ははは…屋上以外、どこ探してもいないから…」
「…そう。」

だが、志保も特に気にする様子もなく、また空を眺めている。

(ふう…)

息を吐き出し、コナンも志保の隣で大空を眺めていた。

「……………つたく、こんな物残して…何になるっていうのよ。」
ボソリと志保が呟いたが…コナンにも聞こえた。

「…え?」

「―新一の血が、私の服の袖についてたのよ…江戸川君の言った通り、スカーレットが自殺だとしてら…あの辺に死体が無いと言う事は、彼女の血液より―工藤君の血液の可能性が高いわ。大阪の探偵君は血は流していなかったみたいだし…」

―コナンは、さっと自分の左手の親指を見た。

（…そつか、さっきまた広がったんだな…後で絆創膏貼ってもらわねえと…）

「あら？…そこ、切れてたの？」

コナンの傷に気付いた志保が、コナンの指を凝視していた。

「う、うん…」

「…そう、じゃあ後で見てもらいなさい…でも、あなたの血ならまだいいわね。」

「え？」

クスツと笑って、志保はコナンの手を掴み―階段へと向かった。

「だって…」

スカーレットは、大量殺人を犯しながら、あっという間に散って…

新一は、血を流しながら、あっという間にまた消えて…

―縁起悪いじゃない？どっちも「シューティングスター緋色の流れ星」みたいで…

緋色の流れ星（シューティングスター） - 17（後書き）

ここまでお付き合い頂きまして、誠にありがとうございます。
一応、「緋色の流れ星」完結ですが…次回に続きます。

間章 8 真実

「ま、待ってくれ…蘭、ちゃん…」

たった2、3秒前までは…立場は逆であった。

自分を裏切って、ジンに協力したシェリーを呼び出し…撃ち殺す予定だった。

―だが、3mの至近距離で銃弾を放った次の瞬間、ピスコは一瞬意識が飛んだ。

そして、意識が戻ったら…シェリーに首を絞められていた。
―銃弾の跡は何処にも見当たらない。

「あれ…知らなかったっけ？私、ライフル弾も避けられるのよ…そんなのろのろした銃弾で、当てられると思ったたら大間違いよ。うふふ…」

「ま、待ってくれ…今、ここで私を殺したら―」

「ああ…それは大丈夫。あの方にちゃんと許可を貰ってあるから…」
「な…」

「―明日の朝刊に、あなたの写真が載るのよ…私の部下の撮影した写真。危険物を積んだ車の中に、あなたがいる写真がね…だから、処罰するの…ふふっ…残念ね。それじゃ―」

「黙れ！！小娘が！！―亡き姉の後をそこまでして追いたいのか！！」

―蘭が、一瞬で硬直する。

「な、き、あ、ね？」

残虐にも、ピスコは―軽く力を入れた蘭によって、2秒後に息絶えた。

「ははっ…嘘よ。何で…」

蘭は、近くに置いてあるノートパソコンを開く。

―調べるのは、コードネームを与えられない、下っ端の構成員のデータ。

「宮野、明美…明美……」

―無い。

ピスコの所属下にあるはずの彼女の名前が…無い。

「ははっ…そう、だった…んだ……」

ゆつくりと、彼女は席を立ち―部屋を出る。
何かを求めて…誰にも分からない、何かを。

間章 9 記憶の中の二人（2）

「…それじゃあ、お大事に。」

「おい…行くぞ。志保。」

「うん…」

高熱にかかって―病院で、最悪の誕生日を迎える羽目になった私。そして、3日後、退院した。

「帰ったら…お祝いするか。」

それだけで、何をしてくれるかはすぐに分かった。

「あり、がとう…」

けど、お母さんがいなくなっただけからは―お祝いと言っても、お父さんと私だけ。

強がってたけど、本当は寂しかった。

でも、もう慣れてた―お母さんが居なくなっただけから…そんな誕生日を2年続けたら、もう気にならなくなった。

自分の年が一つ増えても、気にするような事は無くなった。

タクシーに乗り込んで、事務所の前まで運んでもらい、そこで降りた。

「あれ…」

―鍵が開いてる。

「ちょっと！？お父さん…まさか！」

「あ…いや…そんなはずはね…って、おい！…！どうしてお前がそこにいる！？」

お父さんがドアを開けたら―そこに…いた。

「有希子ちゃんのとこの…ガキじゃねえか！」

「何言ってるの。小五郎のおじ…」

「新一？不法侵入とは…流石に頂けないわね。」

「あ、いいえ。私、先程、小五郎おじ様に『そこで待っていないさい』といわれた為、ここに座っていた次第であります。」

…馬鹿？

「あれっ…そういえば、そんな事を言ったような…言わなかったよ
うな…」

…大丈夫。こっちは最初から馬鹿。

「まったく…しっかりしてよ？お父さん…で？何の用？」

「あ…いや、ほら…相当高熱だったみたいだから、心配でさ…はい。これ…」

「えっ…」

~~~~~

「はい、志保お姉ちゃん。」

「えっ…」

熱を出して―他の人より入院が長引いた私を、出迎えてくれたのは江戸川君だった。

あの時の新一と、同じプレゼントを持って。出迎えてくれた。

「……キャンディー？」

「うん、うん……」

「ホワイトデーのお返し？」

そう聞くつもりだった。新一の時は「退院祝い」と取ったけど、この子のそれは、あくまでそう取れた。けれども――

「……ありがとう。」

……いいえ、ここから先を考えるのは……野暮ね。  
どうであれ……感謝するわ。

「……ありがとう。」

## 間章10 視点

「被害状況は？」

「…まだ、把握しきれてない…余りにも、死者が多すぎる…」

幹部達が、かなり焦った様子で会議を進めていた。

「しかし…予想外だな。これは…」

「ああ―しかも、たかが一人に…」

「―たかがじゃないだろう。」

鋭い声が、端から飛んでくる。

「あ、ああ…そうだな。ジン…」

「奴は、はつきり言って天才―拳銃の扱い程度しか知らない奴らが、数十人でかかったところで太刀打ち出来る相手じゃねえ…しかも、<sup>トラップ</sup>罠にまったく引っかけからず、破壊している事を考えれば―手の打ちようがない事ぐらい、誰にだって分かるだろうが。」

「馬鹿にしないでくれるかしら？こっちは、もう既に手は打ってあるんだけど…」

一人の女性幹部が、静かに笑う。

「―まさか、あのリッキーを駆り出したんじゃないだろうな？」

「―ええ、その…まさかよ。」

~~~~~

沢山の死体が転がる中、彷徨うのは―シェリー。

目の前に現れる人間を、銃弾を避けつつ確実に仕留めて、床に転がしていく。

その単純作業の繰り返し―気付けば、1000は超えただろうか。

「待ちなさい…シェリー。」

「…あなた…」

その時、一人の女性が―シェリーの前に現れた。

「そう―リッキー。聞いた事はあるでしょ？」

「…組織内で、有数の戦闘技術を持つと言われる―」

「…まあ、そういう事―諦めて、投降すれば、私はあなたを庇ってもらいだけど…」

「―その必要は無いわ。」

「あらあら…即答…えー」

次の瞬間、異変に気付く。

「っ!?!」

「あなた、遅すぎ―退いてくれない?ま、どっちにしても…」

―右腕から大量出血して、死ぬけど。

「ふっ、ふざけ―」

そして、軽く首が刎ねられる。

「―自業自得…あなたなら、一番手にまではなれたでしょうに…
私なんかには歯向かうからよ。」

静かに、シェリーはその場を立ち去った。

「あそこ―ね。」

そして、視点を―一つのビルに合わせる。

35 少年探偵団・最初の事件(1) (前書き)

結成のあの暗号は事件には入れられませんね(笑)

蘭の事は、一時放置です…どうなるのやら。

35 少年探偵団・最初の事件(1)

「幽霊屋敷？」

―よくありがちな、下らない噂から…この、1・B内部騒動は始まった。

「この前、住んでいた人が、幽霊に殺されたんだって…」

「中の家具も、ぐちゃぐちゃだつてさ…」

「怖いよね…」

下らないデマが、昼休みの教室を駆け巡る。

―小さく、溜息をつく。

流石に、こうして2ヶ月経てば…最初は、僅かに懐かしさを感じた小学校生活も、飽きてくる頃になっていた。

「早く、戻りてえ…」

「え！？コナン君、早退しちゃうの！？」

「あ、いや…そうじゃなくて…」と、弁解してる間に…光彦と元太が、何と教壇に上がっていた。

「皆さん！静粛に！」

小学生1年生にも関わらず、「静粛」なんて単語を使う光彦に、またコナンは溜息。

「いいか！皆！…この、幽霊騒動に―俺達、少年探偵団が！終止符を打つ！」

「おゝ…」と、クラス中から拍手が沸き起こる…1名様、例外。

「コナン君、頑張ろうね！」

「え、え？」

はつと気づくと、横からオーラを発する二人が…気付いたら、教壇から降りてきていた。

「コナン君…まさか、歩美ちゃんに誘われて…行かないなんて言いませんよね？」

「あ、いや…」

「明日、6時半…絶対だぞ！」

―めでたく、翌日の夜の予定が、埋まったのであった…

~~~~~

「ただいま……」

この言葉を、積み重ねる時も――かなり長くなってきた。

もう演技には慣れたし、志保も「やけに推理力のある男の子」ぐらいにしか思っていない。

だが、そんな事より――志保は、本棚の前で突っ立ったまま、何も言わない。

「志保、お姉ちゃん……?」

その声を掛けて、ようやく志保が反応する。

「あ、あら……お帰りなさい。」

「う、うん……ただいま……」

少し、沈黙が流れる。

「ね、ねえ…どうしたの？」

「……何が？」

疲れてるというわけでもなく…何か、志保が可笑しい。

しかし、もう一度聞く前に―志保が答えた。

「―ちよつと…気がかりな事が、あったのよ。」

「気がかりな…事？」

「―二日前に転校してきて、学校に一日しか来ていない彼女が、いきなりまた転校しちゃったらしくて…」

久々に、コナンは大きく驚いた。

監視の彼女が―いきなり、この町から…姿を消した？

「ちよつと、不思議すぎる…そう思って、ね。」

「へ、へー…」

とはいえ、いなくなったのならば―意外と、ヤバイ。

彼女が調査した結果が…組織側に伝われば…絶対絶命だ。

（くそっ…もう、もたもたしてられねえか…？）

「それより…明日の夜、どうする？」

「え？」

「私、帰るの遅くなるけど…7時頃には夕食作るから…何がいい？」

「あ、ちよっと…」

すると、途端に志保は…睨むわけでもなく、怒っているわけでもなく…新一には見せた事もないような表情を、コナンに向ける。

「あら…何か、食べられない理由でもあるのかしら？」

「あ、ハハハ…ちよっと、奴らと…幽霊屋敷の探検に…」

パン

コナンの、右耳のすぐ横を―久々のBB弾が通り抜けた。

「ごめん…もう一回、言ってくれるかしら？」

―夜に、出歩くななど…この家の、実質的な亭主の彼女に…許可してもらえないはずがない。

ちなみに、こういう脅迫、交渉は、新一の助手である志保曰く「相手の方が萎縮している時は、笑顔でやるのがポイント」らしい。

「あ…いいです。何でもありません！」

まあしかし、これで行かなくて済む口実が出来た…志保がダメだと通告した、それで十分だろう。

そして明日、探偵団に報告すれば、行く必要はない。

『分かったら…まずこの女性が自殺したと、報告する事。そして、これからも潜伏し続ける私を、見て見ぬふりする事ね。逆らったり、あんまり邪魔したりすると…』

—こんな脅迫をした彼女の事は、今はあんまり考えたくないから…コナンは、脳内からその彼女の姿を、一度消し去って…ソファへと寝転がった。

そして、自然と—飽きてきた小学校生活から離れて、静かに…高校生の工藤新一を、描き始めた。

35 少年探偵団・最初の事件(1)(後書き)

感想、お待ちしてますm——)(m

間章 1 1 記憶の中の二人(3) (前書き)

無茶苦茶短め… 36 には、入れずらい話なので…という事です。

## 間章 11 記憶の中の二人(3)

「―二人とも、不思議だよね。」

―周りから、そんな言葉を掛けられた事がある。

今、俺が程々の推理力を（流石に全力全開は無理だが）発揮しても、志保に怪しまれない理由はそこにある。

―志保もまた、かなりの異端な存在だったから。

中学の間、体育を除く全科目で評価5を取り続けたのはアイツだけだった。

それに、試験も全部満点。

…アイツのアドバイスのお陰で、俺は何とか音楽3を保つ事が出来たくらいだ。

だから、周りの女子、男子からはかなり尊敬されていた…というか、上の学年の人間とぐらいまで思われていた。

…男子のラブレターなんか、「ごめんなさいね」一本で、全て冷静に弾き返してたし。

女子の輪の中に加わる事なんか、一度も無かったし。

それこそ、園子なんかはレアだ。志保が恐らくまともに話し合えた女子は…園子だけだろう。

……でも、今思つと…あの環境が、高校が…懐かしく思える。

…行きたい。

早く…元に戻って。

### 36 少年探偵団・最初の事件(2)

『そういえば…近くに、美味しいパスタのお店が出来たんだってさ』

…』

『そう…それじゃあ、そこにしましょうか？江戸川君…』

『う、うん…そうだね。』

駅前に出来た、新しいスパゲッティの専門店。  
味は結構良いらしくて…意外と楽しみだ。

…楽しみだ。今も。

― 6時半を過ぎた、今も。

…別の所に立っている、今も。

~~~~~

「な、なあ…頼むよ。電話くらいさせてくれって…」

「ダメですよ！どうせ志保さん呼んで…逃げ出すつもりでしょう！？」

「それに志保お姉さん呼んじゃったら、私達も戻されちゃうよ！！」

…放課後、素早く抜け出したコナンは、急いで自宅まで戻ろうとした。

この辺の地理に詳しいのも、やはりこの町に長く住んでいるコナン
「工藤新一である。」

…だが、詰めが甘かった。

「早く帰ってきすぎた」

小五郎は、浮気調査。
志保は…まだ学校。

…3人に捕まって、携帯を回収されて、志保に会わないように連行されたコナンは…大きく溜息をついたのだった。

「さてと…陽も完全に堕ちましたね…うつ…」
「こ、怖いよ…で、でも！歩美頑張る！」

…むしろ、一番びびっているのは元太…次が光彦。

「…こ、怖くなんか…怖い。」
「…たく…情けねえなあ…」

コナンは、取り敢えずさつさと奥まで行き、何も無い事を確認して、帰る…そうプランを立てた。

「ほら、入らねえのか？そんなら俺帰るけど…」
「あー！もう、分かりましたよ！入ります！入ります！」
「…よ、よし……しょ、少年探偵、だ…団！出動だ！」

「…「おーっ！」」」

大中小…三段階の掛け声が、響き渡った。

36 少年探偵団・最初の事件(2) (後書き)

次回、ようやく本編突入です。

37 少年探偵団・最初の事件(3) (前書き)

探索終了? なわけないですよ…w

更新沈黙、申し訳ありませんでしたm(――) m それでは、どうぞ
っ！

37 少年探偵団・最初の事件(3)

「しっかし…この家、電気点かねえんだな？」

―懐中電灯を片手に、コナンはゆっくりと前へ進んでいた。

(こんぐらいでブルブル震えやがって…誘ったのはお前らじゃねえかよ…)

5分程経ったが、ずっと三人は震え続けている。

「取り敢えず、広い家でここ数年は使われてねえって事はよくわかったけど…何かあるわけじゃあるまいし……」

ふとコナンが振り返ると、後ろは相当震えている。

「……帰るか。うん。それがいいな。」

「だ、ダメだよ…まだ、全部探検してないんだし…」

「―けれど、これ以上探検したら…何が出るかわからねえぜ…」

よしよし、この調子…)

「お、おい…歩美。帰ろう、ぜ…?」

「そ、そうですよ…歩美ちゃん。」

震え上がった二人の言葉に、歩美も足元がぐらついた。

「こ、コナン君…。」
「え？」

「…か、帰ろう。」

ほっと一息つくと、コナンは頷いて、先導を切って戻り始めた。

—その時。

『カツン、カツン、カツン…』
(…あれ？)

何者かの足音が、徐々に強さを増して…近付いてくる。

「コ、コナン君!？」
(しっ、静かに—…くっ…)

進むしかない—と頭の中では理解しながらも、もう逃げる猶予が無い事を、コナンは同時に悟る。

(くそっ…)「誰だ!—」

コナンが大きく叫ぶ—

「…え？」

拍子抜けしたコナンの表情が、懐中電灯で照らされたその女性には印象的だった。

「まったく…こんな所に探検に飛び出て、好奇心旺盛なのは良いけど、ちよつとは自重しなさいよねえ…。」

「し、志保姉ちゃ…ん？」

「ほら、とつとと戻るわよ。」

溜息を一息つくと、志保はすぐに逆方向に歩き始める。

「わっ、ちよつと…待ってー！って、お前らも行くぞ！本当に追いてくんだぞ！？」

コナンは駆け出した。

「…光彦君？」

「えっ？」

「―今、『綺麗な女性だ』って思ったたでしょ？元太君は『ツンツンしてそう』って。」

「そ、そんなはず…」

「ん、んなわけあるかよ！」

二人が明らかなごまかし口調になっている事に、歩美は小さく溜息

をついた。

（志保お姉さん相手じゃ敵いつこないよ。）

三人は後を追って、走り出した。

~~~~~

「しかし…良かったわ。追いかけてきてて。」

「えっ？」

志保はコナンの高さに合うように屈むと、コナンの頬を指でつついた。

「あなたが子供達に連れ去れてく所を見たから、追いかけて来たのよ…感謝しなさいよ？これからならまだ、夕食時としては丁度良い

し、そんな混雑してる店でもないみたいだし…さ、行きましょうー  
ってあら？」

ふと、志保は周りを見渡した。

「どうしたの、志保お姉ちゃん？」

「誰も居ないじゃない。」

―探偵団の姿が、そこにはない。

「あいつらなら帰ったんだよ、多分。」

「そっ…なら良いけどね。」

小さな不安が、志保の頭の中を過ぎった。

「…どうしたの？」

すると、志保は返した。

「―不安じゃない？何か匂うのよ…」

ゆっくりと志保は立ち上がり、扉に近付いた。

―悲鳴は、すぐそこに…迫る。

### 38 少年探偵団・最初の事件（4）（前書き）

最初の事件に半年かかったwww

本当にすいませんですm（――）mここからはポンポン進めます。

（自信のない声で）ますます展開は面白くなります。（はっきりしない声で）どうかご期待ください。（寝惚けながら）

### 38 少年探偵団・最初の事件（4）

「―本当に、帰ったのかしら？」

「……え。」

ドアの取っ手を掴んだ志保は、扉を開けようと回そうとする。

「…ねえ、まさか。」

「……そのまさか、みたいよ？江戸川君……」

溜息をつき、「まだ当分夕食にはありつけないわね」と小さく志保は呟いた。

「…可笑的い。あいつらが入ってたとしても、扉が閉まってる筈が……」

「…そうね。まさかあの子達が『扉の鍵を閉めて中を搜索する』筈ないもの…ね。」

コナンと志保はその不気味な屋敷の周りを一周する。

「…思ったより、小さい…わね。」

（でもあいつら、一体何の為に…？）「……あ。ねえねえ、志保お姉ちゃん。」

コナンは、一つの窓の鍵が開いている事に気付いた。

「……ここ、開いてるみたい。」

「そう………って、入る訳ないでしょ。」

「え？」

「当たり前じゃない……どっかの好奇心旺盛な探偵じゃないんだから……警察呼ぶわよ。まあこんな事で呼ぶのも馬鹿馬鹿しいけどね……」

携帯を開き、志保はポンポンと電話番号を打ち込んでいく。  
——その時だった。

「……あれ。」

「どうしたの？」

「灯り、ついたみた……」

『ぎゃああああああつ』

「っ！」

「歩美ちゃん!？」

窓を開けて、コナンはその中へと飛び込んでいく。

「待つて！江戸川君！」（っ…）

志保も少し躊躇いはしたが、小さく舌打ちして遅れて飛び込んでいった。

~~~~~

コナンが飛び込むと、すぐに部屋の灯りが見えて、その方向へとコ

ナンは急いで走った。

「どうした！？皆―」

「こ、コナン君っ！」

3人は怯えた様子で、その方向を指差していた。

「なっ―」

―横たわる死体。

それも、素人目から見ても、真新しいと分かるものだった。

「……ぼ、僕達、元太君が忘れ物をしたみたいで…ここに取りに来たんですけど…」

「そ、そしたらよお…この部屋に入ったらいきなり灯りがつい、て…」

「―それで、突然灯りがついて、そしたらこれが置いてあったって―」

『ブッン』

「きゃっ……」

思わず、その再びの停電に怯え、歩美はコナンに飛びついた。

「…また停電か。」

「おい、どうなってんだよ…」

「まさか僕達…」

「どうしたの？」

4人とも思わず、はっとしてその方向を見ると、そこには志保が懐中電灯を持って立っていた。

「え…」

「―外に落ちてたから…死体その話とか、説教は後よ。ひとまず、さつさとここを出しましょう。」

また溜息をついて「不気味でしょうがない…」と呟いて志保は部屋を一步出た。

「危ない！志保っ―」
「え―」

『パァン』

少し離れた所から銃声が鳴り響くと、志保とコナンが倒れこみ、懐中電灯は地面に強く叩きつけられた。

「あっ！…っっ…」

「「「志保お姉さん！？」」「」」

「大丈夫か！？志保！？」

「だ、大丈夫よ…だから、呼び捨てになんか…しないで頂戴。」

（やべっ…）「う、うん。でも良かった…」

二人は急いで中に入り、コナンが部屋のドアを閉め、懐中電灯を拾い上げ、志保の身体を照らす。

「―足元だけど。本当に大丈夫？」

「ええ。歩けるし…でも…」

誰か居る。そう5人は確信した。

39 少年探偵団・最初の事件(5)

(おっかしーな…)

ふと、コナンにはさっきの死体の違和感が残っていた。

(あれ…どこにも銃痕は無かったし…切り裂かれたって感じでもなし…いや、むしろ…そう、何かしっくりくるような…表現があるような…)

「…誰も来ないね。」

小声で、歩美が言った。

「な、なあ…コナン。懐中電灯つけちゃ…」

「ーダメだ。今つけたら相手に居場所がバレちまう…仲間が居たらそれこそ…今志保お姉ちゃんが電話してっから、待ってる。」

「け、けれど…じゃあ、僕達はここで警察を待ってるしか…?」

小さく、コナンは頷いた。

「ああー今志保お姉ちゃんが警察に連絡してっから…つつても、来てもサイレン鳴らしては来ないけどな。」

「え?どうして…」

歩美の疑問に、はっと光彦が気付く。

「そうか。まだこの状況じゃ…」

「そういう事。」

「おい、お前ら…勝手に話合わせてんじゃ…」

「ー元太。俺らが今犯人にバレてる事ってなんだ?」

「え…ん?俺らが…ん?」

元太の必死な思案顔に、思わず歩美は吹きそうになるが、笑いを堪えて自分も考えてみる。

「…わけわっかんねーよ！」

「じゃあ歩美ちゃんは？」

「うーん…」

ものの1分ほどで放棄してしまった元太だが、歩美はそれなりに答を出した。

「…志保お姉さんがここに居る…事？」

「ー大体正解。そう、それだけ。正確には…」

「誰かがここに居る、って事…だけですよね。」

コナンが光彦にグーサインを出す。

「そゆ事。確かに俺らが置かれてる状況は結構ヤバイ。でも、あっちからすれば俺らがまだ何人いるか、何を持ってるか、何をしようとしているか…そして、もっと言えば『今どこにいるか』も全く分かんねえって事。」

「ん、ん？なんか分かったような…」

「ーま、それぐらいで良いだろ。とにかく、いつまで経っても相手は仕掛けてこない（来たら麻醉銃で眠らせるだけだ）。って事は、全くこっちに来る自信が無い…とも考えられるけど。」

真剣な眼差しで、一番現状考えられる可能性を提示した。

「ーもしかすると、警察が来るのを待ってるのかもしれないな。」
「け、警察がですか!？」

「ああ…来たら俺らを捕まえて、ってな…お前ら、どつちから来ても大丈夫なように、逃げる用意だけはしとけよ。」

「うん!」「はい!」「おう!」

3人の掛け声が重なって、コナンも苦笑する。

(何やってんだろな。俺…)「志保お姉ちゃん、どう?」

電話を終えた志保に、コナンは尋ねる。

「大丈夫よ。一応警察は呼んでおいたけど…入ってくるかの判断は気をつけるようにって。それと、一応ここまでの道順もね…にしても。」

つんと志保はコナンのおでこをつつく。

「…へ。」

「幾らなんでも感心しないわね。(私の方がもっと不自然だったけど)小学生にしては…随分と推理ドラマの見すぎなんじゃないかしら?」

「あ、ははっ…」(へえへえ、申し訳ございませんでした…って…あ……)

ふと、哀しそうな志保の瞳を目に映して、コナンは何かを思う。

(そうか…あいつは……)

だが、そんな余裕もすぐに途切れ、思わぬ形で襲来は訪れた。

『パァン』

「きゃっ……」

拳銃の音と共に、何か崩れ落ちる。

「チッ……時間がねえ。おい！」

（何処だ……！？方向しかわかんねー……まだ麻醉銃撃てねえじゃねえかよ……！）

「隆平！出て来い！時間がねえ！」

（隆平……って、仲間が居んのか！？）

「ねえ……もしかして。」

「え……」

「……私達の事……敵だと思ってない……？」

「……おい！早くーえ。」

もう一つの懐中電灯の光に、コナン達が照らされる。

「……………」

そして――

「志保君！大丈夫――」

途端に、灯りが点灯する。

部屋の中には、コナン達、目暮警部、高木刑事、そして……謎の男。
「確保だっ！」

「ちよっ、ちよっと……待っ――」

男は慌てて、拳銃を投げ捨てて高木に抵抗する。

「―待て待て！お前ら、何でここに来てる！？」
「決まっているだろう。お前が拳銃でその女性を撃ったんじゃ―」
「―違う！思い違いだ！俺はこの屋敷に友達が『宝物を取り返しに行く』って入ってって……つれてかれたんだけど見失っちゃって、そしてやつと誰が見つけたと思ったら……なんか変な人が……」
「―変な物で悪かったわね。」
「ひっ……」

志保がジト目でその男を見る。

「つまり、私が幽霊にでも見えた……って事かしら？」
「は、はい……」
「しかし……幾らなんでも実弾を撃つ事は無いだろう。ひとまず、署まで……っ！」

男の腕を掴んだ目暮が何かに気付く。

「―待て！何度も言ってるが何処かに俺の友達が……」
「おい……まさか。その友達というのは……」

その方向を、目暮は指した。

「……なっ……！おい、隆平！隆平！しっかり……」
「―待って。触らない方が良いわ。」
「……ああ。もう息が無い。」
「でも……これって……」

「……なあ、光彦……俺のバッグ。まだ見つかって……ねえんだけど。」

「……あれ。確かに……」

「どうしたの？元太君……」

「あつれ……この辺に置いて……うわああああ！」

突然大きな声を元太が上げた。

「どうしたんだよ……元太。」

「あれっ、あれ！」

「あれって……きゃああああっ！」

「わあっ！？」

「なっ……」

子供達の反応に遅れて、死体の方に目をつられていた大人達も次々と「それ」に反応する。

「！」

「ちょっ……」

「これは……」

「お、おい……」

「それ」はうなりもせず、ただこちらを見守るだけの……番犬——というよりは凶暴な肉食獣。

「まさか……」

「——その、まさかだよな。」

コナンは男の元に歩み寄る。

「…隆平さんは多分、あの犬に暗闇の中で無意識に近付いちゃって
…食い千切られたんだろうねーいや、無意識ってわけじゃないか。
あの犬は多分…隆平さんの物だからね。」

「え…」

「―『取り返しに行く』って言ってたんだよね？」

「ああ…」

「多分、あれを隆平さんは売り捌くつもりだったんだよ。珍種としてか、本当に番犬としてかは知らないけど。ルート次第では凄惨な入になると思う。けれど…」

残酷に引き千切られた死体の方向に、コナンは一瞬目をやる。

「…もう覚えてなかったんだ。その犬は……」

「……そういう、事か。」

「ねえ、お兄さん。その拳銃って、隆平さんに借りた物？」

「え…ああ……くそっ、俺が迷ったり…してなけりゃ…」

顛末を最初から最後まで理解したコナンは、疲れから小さくうな垂れた。

（…組織関係者かもしれないね……こりゃ…あとで工藤新一の声で聞いておくか…）

~~~~~

「じゃあ、コナン君またね！」

手を振って今日の別れを告げる探偵団達に、コナンも返事を返す。  
彼らは、高木刑事の車で、各家まで送ってもらった事になった。

「またなーお前ら………」

だが、すぐに元気の無い彼女の方へと視線を向けた。

「どうしたの？志保お姉ちゃん？」

「……ちよつと、ね。」

「足？」

「もうこっちは大丈夫よ……けど。」

大きく溜息をついて、おぼつかない足取りで志保は歩いて行く。

「……色々ありすぎちゃって、ね。」

「……」

「あんなの……あんまり過ぎて。ちょっと哀しくなっちゃって。」

~~~~~

『いいじゃない…動物って。人間と違って素直で。』

『どういふ事だよ、志保。』

『そのままよ。下らない妄想とか、そういう物に支配されない……
良いじゃない。』

~~~~~

「…居るのよね。たまにああいう動物も…人を殺めてしまうような  
のも……道を見失ったものも。」

「……志保お姉ちゃん。」

「ーけど。」

「え？」と声をあげてコナンは反応する。

「…嬉しかったわ。二人も私を守ってくれたんだもの……あなたが  
その一人よ。ありがとう、江戸川君。」

「え…あ、うん。」（二人…？）

~~~~~

「あーあ…帰ったら怒られっかな…」
車の中で、ポツリと元太は呟く。

「仕方ないよ……怖かったな。最後の…」
「でも、あんな動物なんて全然居ないからね…君達が心配する事はそんなにないと思うよ。」

信号に引っ掛かり、高木は時計に目をやると、既に8時を過ぎていた。

「…どうしたの？光彦君。」

「え…」

「さっきから元気ねえよな。」

「…そうでしょうか？」

後ろの方向に、光彦は目をやる。

（…良いですね。コナン君は…）

ずっと笑顔の左側に座る少女。

—どこかミステリアスで、魅力的な彼女。

（…はあ、僕って…）

突発的に、怯えた彼女を守るように手を広げた。

―その『化物』から、守るように。

帰り際に「ありがとう」と囁かれて、少年の心は揺れ動いた。

「何考えてるんでしょうか…僕は。」

「え？どうしたの？」

「あ、いえいえ。何でも…」

「可笑しいぞ。光彦…もぐもぐ。」

元太はポケットに入れてあったおやつを口の中に放り込んだ。

（…気にしてもしようがないですね。）

40 鮮血を描く少女（前書き）

全国のコナンファンの皆様、大変長らくお待たせしました（？）
いよいよ彼女の登場です。ええ、察しが良い方はもうこれだけで分かっちゃうかもです。

40 鮮血を描く少女

「美味しかった〜…ありがとう、志保お姉ちゃん。」

「それなら良かったわ……それで、博士の家に泊まるんだったかしら？」

「う、うん。そうだよ。」

「そう……」

夜道を歩みながら、志保はあの日の事をふと思い出す。

「…まだ教えてくれない、のかしら？」

「え……」

「―偽名なんでしょ？江戸川コナンって……」

「…っ……」

既に、志保にはもうバレてしまっている。

自分の名前は、自分の後ろにあった本から取ったという事は。

「夜道歩いてて分かった事。あなたは自らの足で事務所までの道のりを理解していた……ねえ、一体何者なの？江戸川君は……工藤君じゃない。それは分かってる。じゃあ何者？一体……」

しばらく悩んで、コナンは言った。

「…………僕にも、良く分からないよ。」

「え……」

「けれど…………一つだけ。一つだけ……分かるんだ。」

「……何？」

阿笠邸の前で立ち止まって、一度だけ笑みを向けた。

「——志保お姉ちゃんを大切にしようとしている、人なんだと思うよ。」

「…………江戸川、君……」

「……じゃあ、またね。志保お姉ちゃん、また明日。」

「……ええ。」

ドアを開けて中に入っていくコナンが、やけに小さく見えた。

（……大切、か。）

自分は何を考えているのだろう。そう思って、すぐに思考の中から一人の青年を掻き消した。

（彼が帰ってきたら……教えてくれるかしら。あの子の事……何か知ってる気がする。いいえ、その逆……あの子が……新一の事を、何か……知ってる気がする。）

~~~~~

「こんばんは…博士？」

ドアに鍵が閉まってなかった為、誰かが居るものだと思ってたコナ  
ンは首を傾げる。

（流石に博士でも…ここまで不用心じゃねえとは思っけど……ん？）

視線の先に、小さな人影が見える。

「あれ…？」

キッチンの奥側だった。

―不気味な緋色の液体が流れ始めている。

「まさか―っ！―！」

慌てて靴を脱ぎ捨てて、駆けつけた先に、悪夢のような光景が広がっていた。

「おい！しっかりしろ…おい！！」

「あ…」

少女が首元を包丁で切り裂いて、血を流している。

（よし…これぐらいなら…）「待ってる！救急車呼んでくつから…」  
無造作に置かれた小さなナイフを取り上げて、窓から放り投げると、  
急いでコナンは携帯電話を手に取り電話をかける。

『プルル…』（くっそ早く出て…）

―ブチッ

「…っ…っ…」

突然、頭痛がしたかと思うと、携帯は手元を離れ、半分に分解された液晶画面が電話番号を表示したままストップしている。

―そして、虚ろな目線で前を見据えれば、そこには右手に携帯電話のもう半分を持つ少女が居た。

「え…」

「―もう…ダメだよ。」

そう言うと、少女は半分を放り投げて、コナンに飛びかかる。

「あつ……」

「――もう、生きたくない……私もう生きたくないの……だから、ね？――一緒に……あなたも……楽に逝かせてあげるから……」

コナンを押し倒して、今度こそ博士の家の台所から取り出された包丁を右手に持った。

――ただでさえ小1の平均身長にすら満たしておらず、かなり小さめのコナンよりもさらに小さく、そして細身の彼女から、コナンは逃れる事どころか指一本すら動かす事が出来ない。

「まとめて……殺して、あげ……る、だ……か………」

（ぐっ……）

危うく殺されかけたコナンは、小さな腕時計に感謝しながら、麻酔銃を打ち込まれ、優しく寝息を立てる少女を置いて立ち上がった。

（さてと……くそっ、ひとまず応急処置して……して……から……）

コナンは気付く。「こいつは病院に連れて行かない方が良いかもしれない」と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9271p/>

---

毛利志保と宮野蘭—名探偵コナンAnother ver.—

2011年11月14日14時13分発行